

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集

観音山古墳群平石Ⅳ・Ⅴ群 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群

福岡県筑紫郡那珂川町所在古墳群の調査

2009

福岡県教育委員会

観音山古墳群平石Ⅳ・Ⅴ群 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群

福岡県筑紫郡那珂川町所在古墳群の調査



観音山古墳群瀬戸Ⅱ群遠景（南西上空から）

序

福岡県教育委員会では、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、平成13年度から九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に着手し、同19年度に現場作業を終了しました。

筑紫郡那珂川町内では九州新幹線本線と工事用道路の建設工事があり、本線を県教育委員会が、工事用道路については県教育委員会と那珂川町教育委員会が地区を分担して発掘調査を実施しました。本書は県教育委員会が実施した発掘調査のうち、観音山古墳群平石Ⅳ・Ⅴ群・瀬戸Ⅱ群の報告を行うものです。

本書によって、新幹線建設工事の中で記録保存された埋蔵文化財の存在にわずかでも思いを馳せていただけるならば、また、本書が文化財愛護思想の普及および学術研究・生涯学習への一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理・報告書作成に至る間に御協力・御助言いただきました関係諸機関や地元をはじめとする多くの方々に対しまして、記して深甚の謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会教育長
森 山 良 一

例 言

- 1 本書は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査を実施した福岡県筑紫郡那珂川町大字松木に所在する観音山古墳群平石Ⅳ・Ⅴ群、同町大字下梶原所在の同瀬戸Ⅱ群の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財報告の第12集である。
- 2 本遺跡群の発掘調査・整理報告は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 各遺跡は九州新幹線博多―船小屋間の埋蔵文化財調査地点のうち、第5地点（観音山古墳群平石Ⅳ群）・第6地点（同平石Ⅴ群）・第10地点（同瀬戸Ⅱ群）にあたる。
- 4 本書に掲載した遺構写真はそれぞれ調査担当者が撮影し、空中写真は九州航空株式会社、東亜航空技研株式会社及び空中写真企画有限会社へ委託した。遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものである。
- 5 本書に掲載した遺構図は各担当者の他、林知恵・坂口朝子・中山朱美・野北祐子・宮里好子・吉川孝子・渡辺廣子が作成した。
- 6 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館および文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也および各担当者の指導の下に行った。出土遺物の実測・製図は各担当者の他に、海出淳平・平田春美・棚町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・寺岡和子・中川真理子・中川陽子・中村洋子・栗林明美（実測）、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子（製図）が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子・藤美代子が補助した。
- 7 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館および文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 8 本書の執筆・編集は、飛野・小川がそれぞれ分担した。

目次

卷頭図版
序
例言
図版目次
挿図目次
表目次

I	はじめに (飛野)	1
1	調査の経緯	1
2	調査の組織	3
II	位置と環境 (飛野)	5
III	発掘調査の記録	9
1	観音山古墳群平石IV群 (飛野)	9
1)	はじめに	9
2)	観音山平石IV-1号墳	9
3)	その他の遺構と遺物	23
4)	小 結	23
2	観音山古墳群平石V群 (飛野)	25
1)	はじめに	25
2)	観音山古墳群平石V-1号墳	26
3)	観音山古墳群平石V-2号墳	31
4)	観音山古墳群平石V-3号墳	39
5)	その他の遺構と遺物	57
6)	小 結	58
3	観音山古墳群瀬戸II群 (小川)	59
1)	はじめに	59
2)	観音山古墳群瀬戸II-1号墳	63
3)	観音山古墳群瀬戸II-2号墳	65
4)	小 結	67
IV	おわりに (飛野)	68

図版目次

巻頭図版 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群遠景（南西上空から）

観音山古墳群平石Ⅳ群

- | | | |
|------|------------------------|---------------------|
| 図版 1 | 1. 平石Ⅳ-1号墳現況（南から） | 2. 同（東から） |
| | 3. 同墓道南端発掘状況（南から） | |
| 図版 2 | 1. 平石Ⅳ-1号墳調査後（上空から） | 2. 同（南上空から） |
| 図版 3 | 1. 平石Ⅳ-1号東トレンチ土層（南東から） | 2. 北トレンチ土層（北東から） |
| 図版 4 | 1. 平石Ⅳ-1号墳墳丘（東から） | 2. 同（南から） |
| | 3. 同（北西から） | |
| 図版 5 | 1. 平石Ⅳ-1号墳前面崩落状況（南から） | 2. 同閉塞状況（南から） |
| | 3. 同（東から） | |
| 図版 6 | 1. 平石Ⅳ-1号墳閉塞石除去後（南から） | 2. 同（東南から） |
| | 3. 同（東から） | |
| 図版 7 | 1. 平石Ⅳ-1号墳完掘後全景（南から） | 2. 同（南から） |
| | 3. 同主体部内（串は耳環、南から） | |
| 図版 8 | 1. 平石Ⅳ-1号墳玄室左側壁（南から） | 2. 同奥壁（東から） |
| | 3. 同奥壁上半（南から） | 4. 同石材間の粘土充填状況（南から） |
| 図版 9 | 1. 平石Ⅳ群丘陵頂部現況（南東から） | 2. 同調査後（北西から） |
| | 3. 同（南東から） | |

観音山古墳群平石Ⅴ群

- | | | |
|------|---|----------------------|
| 図版10 | 1. 平石Ⅴ群現況（南から） | 2. 同調査後（上空から） |
| 図版11 | 1. 平石Ⅴ群完掘後（南から） | 2. 同Ⅴ-1号墳主体部（北から） |
| | 3. 同Ⅴ-1号墳玄室北半（南から） | |
| 図版12 | 1. 平石Ⅴ-1号墳主体部全景（南から） | 2. 同閉塞状況（南から） |
| | 3. 同周溝東辺の礫群（東から） | |
| 図版13 | 1. 平石Ⅴ-1号墳NW区周溝（南東から） | 2. 同墓道西肩土器出土状況（南西から） |
| | 3. 同Ⅴ-2号墳主体部（北から） | |
| 図版14 | 1. 平石Ⅴ-2号墳東トレンチ土層（北西から） | 2. 同NE区墳丘（南東から） |
| | 3. 同Ⅴ-2号墳主体部完掘後（北から） | |
| 図版15 | 1. 平石Ⅴ-2号墳墓道東側壁（南西から） | 2. 同閉塞状況（北から） |
| | 3. 同（南西から） | |
| 図版16 | 1. 平石Ⅴ-2号墳SE区土器出土状況（南東から） | 2. 同墓道周辺土器出土状況（南東から） |
| | 3. 同Ⅴ-2号墳前面土器出土状況（手前の土器は1号墳墳裾として取り上げ、南から） | |
| 図版17 | 1. 平石Ⅴ-3号墳東トレンチ土層（南東から） | 2. 同NE区墳丘（北西から） |
| | 3. 同墓道堆積状況（西から） | |
| 図版18 | 1. 平石Ⅴ-3号墳主体部完掘後（南から） | 2. 同（北から） |

3. 同（西から）
- 図版19 1. 平石V-3号墳閉塞状況（北から） 2. 同（南から）
3. 同土器出土状況（西から）
- 図版20 1. 平石V-3号墳墓道土器出土状況（北東から） 2. 同（南東から）
3. 同（南から）
- 図版21 1. 平石V-3号墳墓道土器出土状況（東から） 2. 同（南から）
3. 同（南から）
- 図版22 1. 平石V-3号墳東辺周溝土器出土状況（南から） 2. 同（東から）
3. 同（東から）
- 図版23 1. 平石V-3号墳東辺周溝土器出土状況（西から） 2. 同墓道東肩土器出土状況（南東から）
3. 同墳丘SW区土器出土状況（北西から）
- 図版24 1. 平石V-3号墳墳丘SW区土器出土状況（西から） 2. 同（南西から）
3. 同（北から）
- 図版25 1. 平石V群Aトレンチ（西から） 2. B1トレンチ（南西から）
3. 平石V群B2トレンチ（西から）
- 図版26 1. 平石V群Cトレンチ（南西から） 2. 同Dトレンチ現況（西から）
3. 平石V群Dトレンチ（北西から）

観音山古墳群瀬戸Ⅱ群

- 図版27 1. 瀬戸Ⅱ群遠景（南から） 2. 同調査区全景（南から）
- 図版28 1. 瀬戸Ⅱ-1号墳全景（上空から） 2. 同石室（南から）
3. 同石室床面（南から）
- 図版29 1. 瀬戸Ⅱ-1号墳西周溝土層断面（南から） 2. 同北周溝土層断面（東から）
3. 同東周溝土層断面（南から）
- 図版30 1. 瀬戸Ⅱ-2号墳全景（上空から） 2. 同石室（南西から）
3. 同北西北東周溝土層断面（南東から）

出土遺物

- 図版31 出土遺物1（平石Ⅳ-1号墳出土遺物1）
- 図版32 出土遺物2（平石Ⅳ-1号墳出土遺物2、平石Ⅴ-1号墳出土遺物1）
- 図版33 出土遺物3（平石Ⅴ-2号墳出土遺物1）
- 図版34 出土遺物4（平石Ⅴ-2号墳出土遺物2、Ⅴ-3号墳出土遺物1）
- 図版35 出土遺物5（平石Ⅴ-3号墳出土遺物2）
- 図版36 出土遺物6（平石Ⅴ-3号墳出土遺物3）
- 図版37 出土遺物7（平石Ⅴ-3号墳出土遺物4）
- 図版38 出土遺物8（平石Ⅴ-3号墳出土遺物5）
- 図版39 出土遺物9（平石Ⅴ-3号墳出土遺物6、平石Ⅳ・Ⅴ群出土石製品）
- 図版40 出土遺物10（瀬戸Ⅱ-1・2号墳出土遺物）

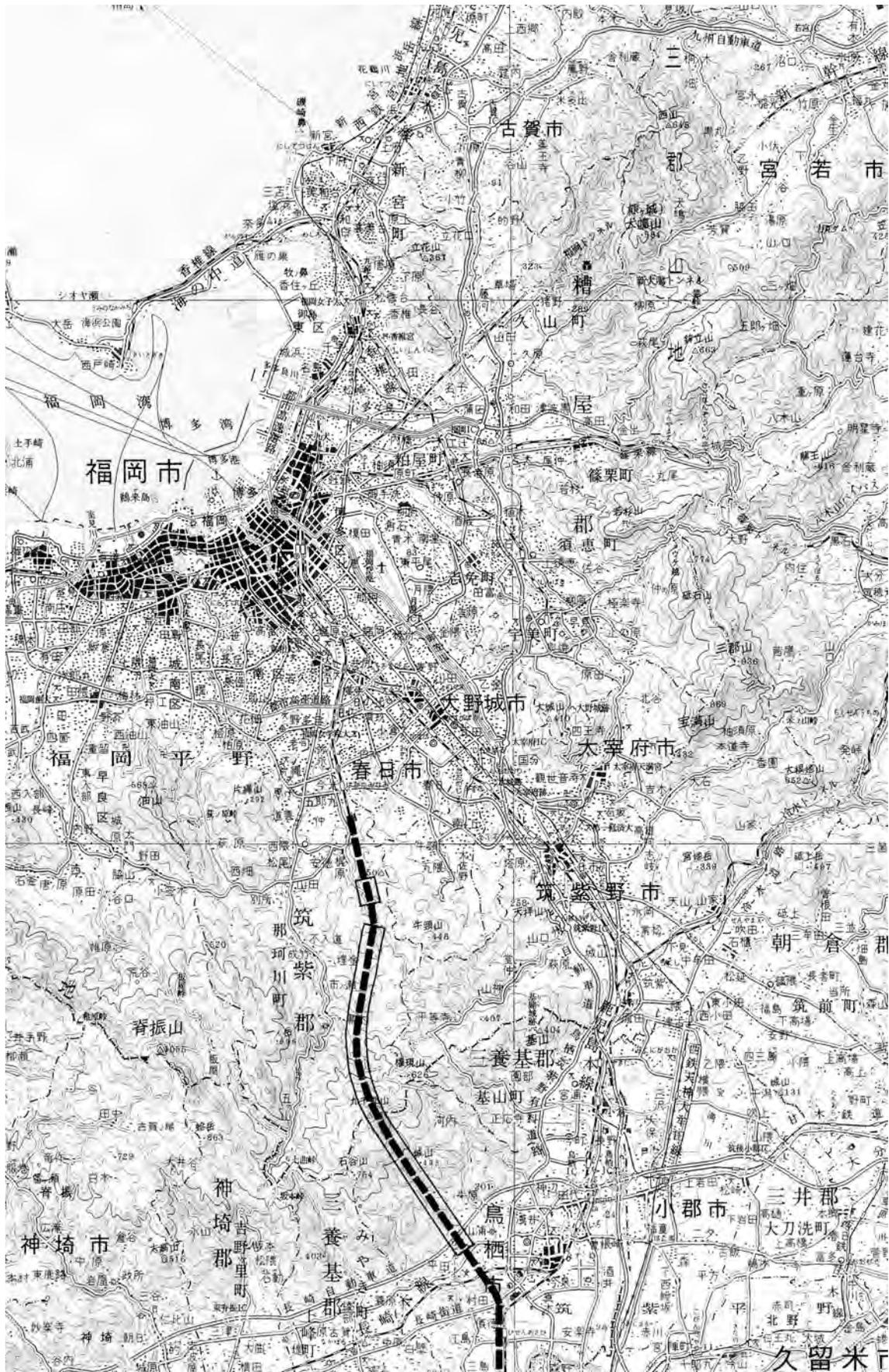
挿図目次

第 1図	九州新幹線路線図 (1/200,000)	vii
第 2図	那珂川町内九州新幹線関係工事位置図 (1/10,000)	2
第 3図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第 4図	調査区位置図 (1/1,000)	10
観音山古墳群平石Ⅳ群		
第 5図	平石Ⅳ-1号墳墳丘測量図 (現況・墳丘、1/200)	11
第 6図	平石Ⅳ-1号墳墳丘土層実測図 (1/80)	12
第 7図	平石Ⅳ-1号墳主体部平面実測図 (1/60)	14
第 8図	平石Ⅳ-1号墳主体部実測図 (1/60)	15
第 9図	平石Ⅳ-1号墳墓道二次壁体実測図 (1/60)	16
第10図	平石Ⅳ-1号墳閉塞状況実測図 (1/60)	17
第11図	平石Ⅳ-1号墳出土遺物実測図1 (金属製品、1/1・1/2)	18
第12図	平石Ⅳ-1号墳出土遺物実測図2 (金属製品、1/2)	19
第13図	平石Ⅳ-1号墳出土遺物実測図3 (土器、1/3)	20
第14図	平石Ⅳ-1号墳出土遺物実測図4 (土器、1/3)	21
第15図	平石Ⅳ群出土石製品等実測図 (1/1)	22
観音山古墳群平石Ⅴ群		
第16図	平石Ⅴ群地形測量図 (現況・墳丘、1/200)	24
第17図	平石Ⅴ群調査区位置図 (1/400)	25
第18図	平石Ⅴ-1号墳墳丘土層実測図 (1/80)	26
第19図	平石Ⅴ-1号墳主体部実測図 (1/60)	27
第20図	平石Ⅴ-1号墳閉塞状況実測図 (1/60)	28
第21図	平石Ⅴ-1～3号墳出土金属製品実測図 (1/1・1/2)	29
第22図	平石Ⅴ-1号墳出土遺物実測図1 (土器、1/3)	30
第23図	平石Ⅴ-2号墳墳丘土層実測図 (1/80)	32
第24図	平石Ⅴ-2号墳主体部実測図 (1/60)	33
第25図	平石Ⅴ-2号墳閉塞状況実測図 (1/60)	34
第26図	平石Ⅴ-2号墳墳丘須恵器出土状況実測図 (1/20)	34
第27図	平石Ⅴ-2号墳出土遺物実測図1 (1/3)	35
第28図	平石Ⅴ-2号墳出土遺物実測図2 (1/3)	36
第29図	平石Ⅴ-2号墳出土遺物実測図3 (1/3)	37
第30図	平石Ⅴ-3号墳墳丘土層実測図 (1/80)	38
第31図	平石Ⅴ-3号墳閉塞状況実測図 (1/60)	39
第32図	平石Ⅴ-3号墳主体部実測図 (1/60)	40
第33図	平石Ⅴ-3号墳周溝出土金属製品実測図 (1/1・1/2)	41
第34図	平石Ⅴ-3号墳主体部及び周溝実測図 (1/60・1/30)	42

第35図	平石V-3号墳出土遺物実測図1 (墓道出土土器、1/3)	-----	44
第36図	平石V-3号墳出土遺物実測図2 (墓道出土土器、1/3)	-----	45
第37図	平石V-3号墳出土遺物実測図3 (墓道出土土器、1/3)	-----	46
第38図	平石V-3号墳出土遺物実測図4 (墓道出土土器、1/3)	-----	48
第39図	平石V-3号墳出土遺物実測図5 (墓道出土土器、1/3)	-----	49
第40図	平石V-3号墳出土遺物実測図6 (墳丘・周溝出土土器、1/3)	-----	50
第41図	平石V-3号墳出土遺物実測図7 (墳丘・周溝出土土器、1/3)	-----	52
第42図	平石V-3号墳出土遺物実測図8 (墳丘・周溝出土土器、1/3)	-----	53
第43図	平石V-3号墳出土遺物実測図9 (墳丘・周溝出土土器、1/6)	-----	54
第44図	平石V-3号墳出土遺物実測図10 (墳丘・周溝出土土器、1/3)	-----	55
第45図	平石V-3号墳出土遺物実測図11 (墳丘・周溝出土土器、1/3)	-----	56
第46図	平石V群出土石製品等実測図 (1/1)	-----	57
観音山古墳群瀬戸Ⅱ群			
第47図	瀬戸Ⅱ群調査区位置図 (1/1,000)	-----	59
第48図	瀬戸Ⅱ群周辺地形図 (1/200)	-----	60
第49図	瀬戸Ⅱ群遺構配置図 (1/150)	-----	61
第50図	瀬戸Ⅱ-1号墳実測図 (1/80)	-----	62
第51図	瀬戸Ⅱ-1号墳主体部実測図 (1/60)	-----	64
第52図	瀬戸Ⅱ-1号墳出土遺物実測図 (1/3)	-----	65
第53図	瀬戸Ⅱ-2号墳実測図 (1/80)	-----	66
第54図	瀬戸Ⅱ-2号墳主体部実測図 (1/60)	-----	67
第55図	瀬戸Ⅱ-2号墳出土遺物実測図 (1/3)	-----	67

表目次

表1	九州新幹線関係那珂川町内調査対象一覧表	-----	1
----	---------------------	-------	---



第1図 九州新幹線路線図 (1/200,000)

I はじめに

1 調査の経緯

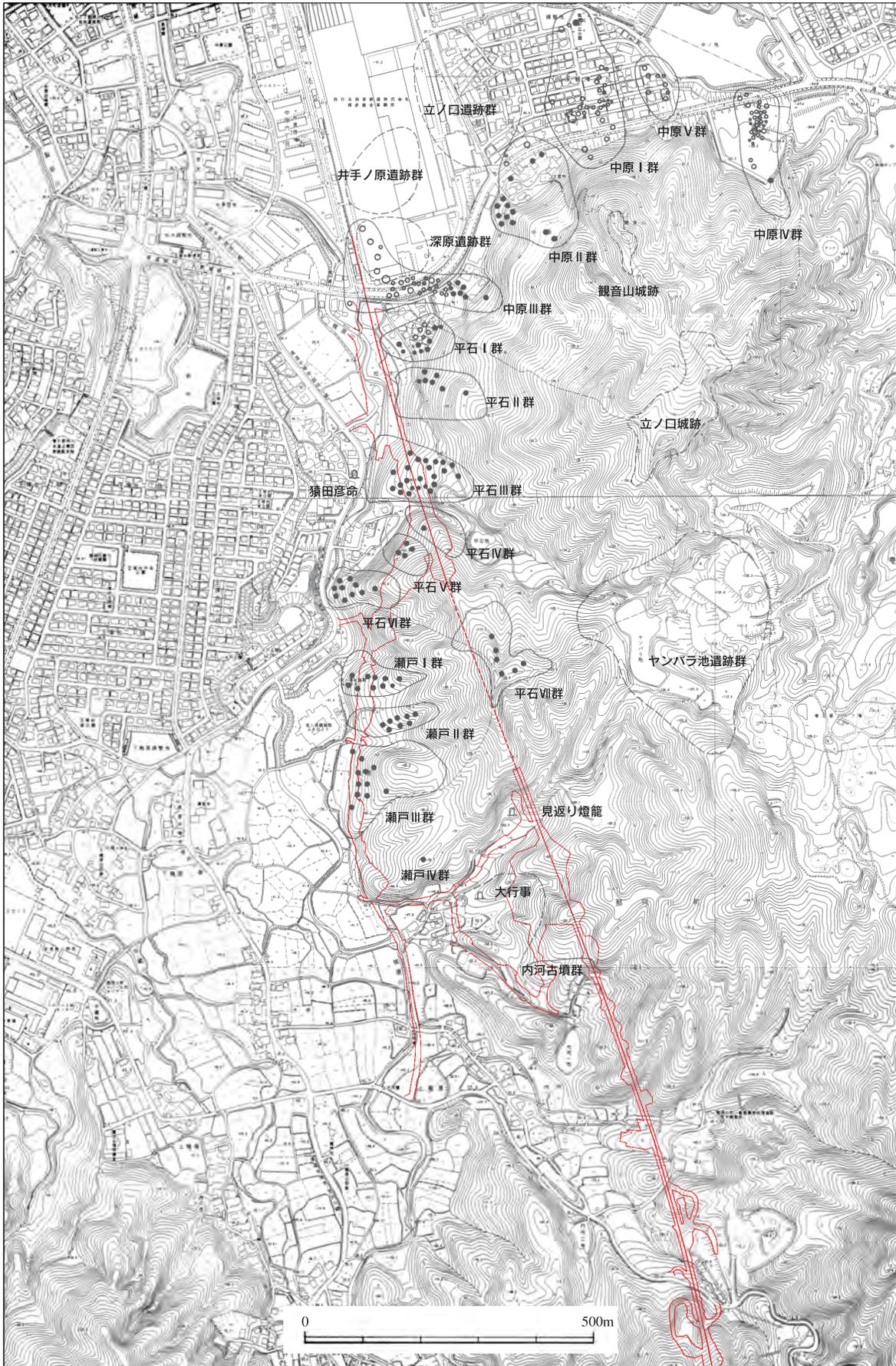
福岡・佐賀・熊本・鹿児島各県の主要都市を結ぶ全長256.82kmの九州新幹線鹿児島ルートは、昭和48年11月に整備計画が決定され、平成3年9月には熊本県八代―鹿児島県西鹿児島（現鹿児島中央）間が着工、16年3月に同区間が開業した。続いて平成10年3月に福岡県船小屋（筑後市）―新八代間、13年6月には博多―船小屋間も着工され、22年度末の全線開業を目指して急ピッチで工事が進められている。福岡県内の埋蔵文化財発掘に至る経緯については既に詳述している（福岡県教育委員会『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3, 2006、同『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』11, 2008）。ここでは、今回報告する各遺跡の調査経緯を簡略に記す。

第11集で既述したように、九州新幹線建設に関わる那珂川町内での埋蔵文化財調査の分担は、福岡県教育委員会（以下、県教委という。）が本線及び本線と隣接する工事用道路を、那珂川町教育委員会（以下、町教委という。）がそれ以外の工事用道路をそれぞれ担当することで関係者は了解していた。工事用道路はやがて町道として町の管理となるためである。

観音山古墳群平石Ⅳ群・同Ⅴ群は、工事用道路建設予定地であるが九州新幹線本線に接することから、当初から県教委の調査対象地として挙げられた地点である。県教委は同古墳群平石Ⅲ群の調査を17年度から継続実施していたが、それが終了した後の18年度秋から平石Ⅴ群の調査を開始した。県教委が着手する以前、町教委が南に隣接する平石Ⅵ群の発掘調査を実施したが、その段階で平石Ⅴ群の伐採も終了していたことから現況地形の写真測量を町教委主体で実施し、成果の一部は県教委へ引き渡されている。なお、この平石Ⅴ群を調査する過程で、平石Ⅳ群の伐採作業が終わり、施工サイドの要望を受けて丘陵頂部及び同南裾の一部の調査を併せて実施した。

地点	遺跡名	所在地	対象面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査年度	報告年度	備考
1	観音山古墳群中原Ⅲ群	那珂川町大字松木	1,600	1,200	H17	H19	
2	観音山古墳群平石Ⅰ群	那珂川町大字松木	4,300		—	—	なし
3	観音山古墳群平石Ⅱ群	那珂川町大字松木			—	—	なし
4	観音山古墳群平石Ⅲ群	那珂川町大字松木	3,900	2,700	H17・18	H21(予定)	
5	観音山古墳群平石Ⅳ群	那珂川町大字松木	5,600	300	H18・19	H20	
6	観音山古墳群平石Ⅴ群	那珂川町大字松木	2,800	600	H18	H20	
7	観音山古墳群平石Ⅵ群	那珂川町大字松木	4,000	4,000	H17	H20	那珂川町調査
8	観音山古墳群平石Ⅶ群	那珂川町大字松木			—	—	トンネル上のため調査不要
9	観音山古墳群瀬戸Ⅰ群	那珂川町大字下梶原	5,000	5,000	H17	H20	那珂川町調査
10	観音山古墳群瀬戸Ⅱ群	那珂川町大字下梶原	500	300	H18	H20	
11	観音山古墳群瀬戸Ⅲ群	那珂川町大字下梶原	5,000	5,000	H17	H20	那珂川町調査
11-2	観音山古墳群瀬戸Ⅳ群	那珂川町大字下梶原	2,400	380	H16	H19	
12	ヤンバラ池遺跡群	那珂川町大字下梶原			—	—	なし
13	猿田彦命	那珂川町大字松木			—	—	影響なし
14	見返り灯籠	那珂川町大字上梶原			—	—	解体保存中
15	内河遺跡群	那珂川町大字上梶原	450	350	H15	H19	
16	内河古墳群	那珂川町大字上梶原			—	—	なし
17	大行事	那珂川町大字上梶原			—	—	移設
18	遺物散布地	那珂川町大字上梶原			—	—	なし
19	楠木B遺跡	那珂川町大字上梶原			—	—	なし

表1 九州新幹線那珂川町内調査対象地点一覧



第2図 那珂川町内九州新幹線関係工事位置図 (1/10,000)

平石Ⅳ群の本格的な調査は19年度4月から開始した。鉄道建設・運輸施設整備支援機構との協議資料には2基の古墳が記されていたために、一部試掘溝を設定したが、2基目の古墳を確認できず、地形的にもそれらしいものは認められず、最終的に1基の古墳の調査で終わった。

平成18年末、観音山古墳群瀬戸Ⅱ群として町教委の調査対象に挙がっていた工事用道路建設予定地で急遽用地が解決した。現地は山林分譲によって大きく地形が改変されていたため、町教委は確認調査を実施し、用地内で3基の古墳を確認した。しかし、既に当該年度の契約変更の期限を過ぎていて、町教委は用地買収の見込みのなかった瀬戸Ⅱ群の調査費を減額していた。そのため、町教委としては翌年度まで発掘調査を実施できない状況となり、県教委へ調査を打診、これに応じて県教委が調査を実施したものである。

2. 調査の組織

ここに報告する各遺跡は平成18～19年度に発掘調査を行い、20年度に整理・報告書作成作業を実施したものである。鉄道・運輸機構及び福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。

独立行政法人	鉄道建設・運輸施設整備支援機構	鉄道建設本部	九州新幹線建設局
	平成18年度	平成19年度	平成20年度
局長	元木 洋	元木 洋	元木 洋
次長	関根 茂	関根 茂	関根 茂
用地第一課長	高橋 秀幸	高橋 秀幸	西岡 英郎
用地第一課担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久
	房野 和清	房野 和清	小川 秀平
工事第一課長	佐々木幸一	佐々木幸一	吉野美喜男
工事第一課課長補佐	松原 鉄雄	三好 省三	三好 省三
	三好 省三		
工事第一課担当係長	後藤 敏之	長野 利幸	長野 利幸
那珂川鉄道建設所長	坂元 茂	坂元 茂	村山 正巳
同担当副所長	寺田 修	寺田 修	寺田 修
			堀 倫万

福岡県教育庁総務部文化財保護課

総 括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	植崎洋二郎	植崎洋二郎
総務部長	大島 和寛	大島 和寛	荒巻 俊彦
副理事兼文化財保護課長	磯村 幸男	磯村 幸男	磯村 幸男
副課長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊 元明
参事兼課長技術補佐	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲
参事兼課長補佐	安川 正郷	中藺 宏	

	平成18年度	平成19年度	平成20年度
課長補佐			前原 俊史
庶務			
管理係長	井手 優二	井手 優二	富永 育夫
事務主査	野中 顯		
主任主事	湖上 大輔	湖上 大輔	藤木 豊
主任主事	柏村 正央	柏村 正央	近藤 一崇
主任主事	小宮 辰之	小宮 辰之	小宮 辰之
主 事		野田 雅	野田 雅
調査・報告			
参事補佐兼調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
参事補佐	濱田 信也	濱田 信也	濱田 信也
技術主査	小川 泰樹	小川 泰樹	小川 泰樹
九州歴史資料館主任技師	一瀬 智	一瀬 智	

また、実際の発掘調査においては、那珂川町教育委員会をはじめ、工事中道路の大部分の工事主体者である同町五ヶ山ダム・九州新幹線対策室、りんかい日産・広成特定建設工事共同企業体および奥村・三井住友・岡本・古賀特定建設工事共同企業体の九州新幹線建設工事関係者から、工事・調査の工程・内容について便宜を図っていただいた。また、炎暑や極寒の中で発掘調査に携わっていただいた那珂川町をはじめとする地元の方々のご協力を得て、無事に調査を完了することができた。あらためてすべての関係者に謝意を表します。



博多南駅から工事中の高架橋を見る。坑口は梶原トンネル。

Ⅱ．位置と環境

筑紫郡那珂川町はその名の通り福岡平野の主要河川の一つである那珂川上流に位置する。那珂川は福岡・佐賀両県を分ける背振山系に源を発し、狭隘な谷を北流するが、安德台遺跡の載る独立丘陵に遮られて那珂川町山田地区で一端小盆地を形成、以北は福岡平野に流出する。

山陽新幹線開業以来、車両基地周辺は旧地形を読みとることも困難なほどにめざましい変貌を遂げてきたが、1970年頃の地形図では、那珂川左岸では川に近接して南北に連なる山塊があり、それと2kmほどの間隔をもって右岸にも観音山から延びる丘陵が北上する様子がよく見える。後者の丘陵先端が弥生時代奴国の中心部、須玖遺跡である。

那珂川兩岸の山塊には多くの遺跡が知られていて、それらの間の低地や微高地上でも多くの遺跡が発見・調査されている。那珂川町及び周辺の主要遺跡については、昨年度に報告した『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集で概要を紹介した。ここでは、同じ地域の古墳時代の遺跡について、便宜上那珂川を境にして概観したい。

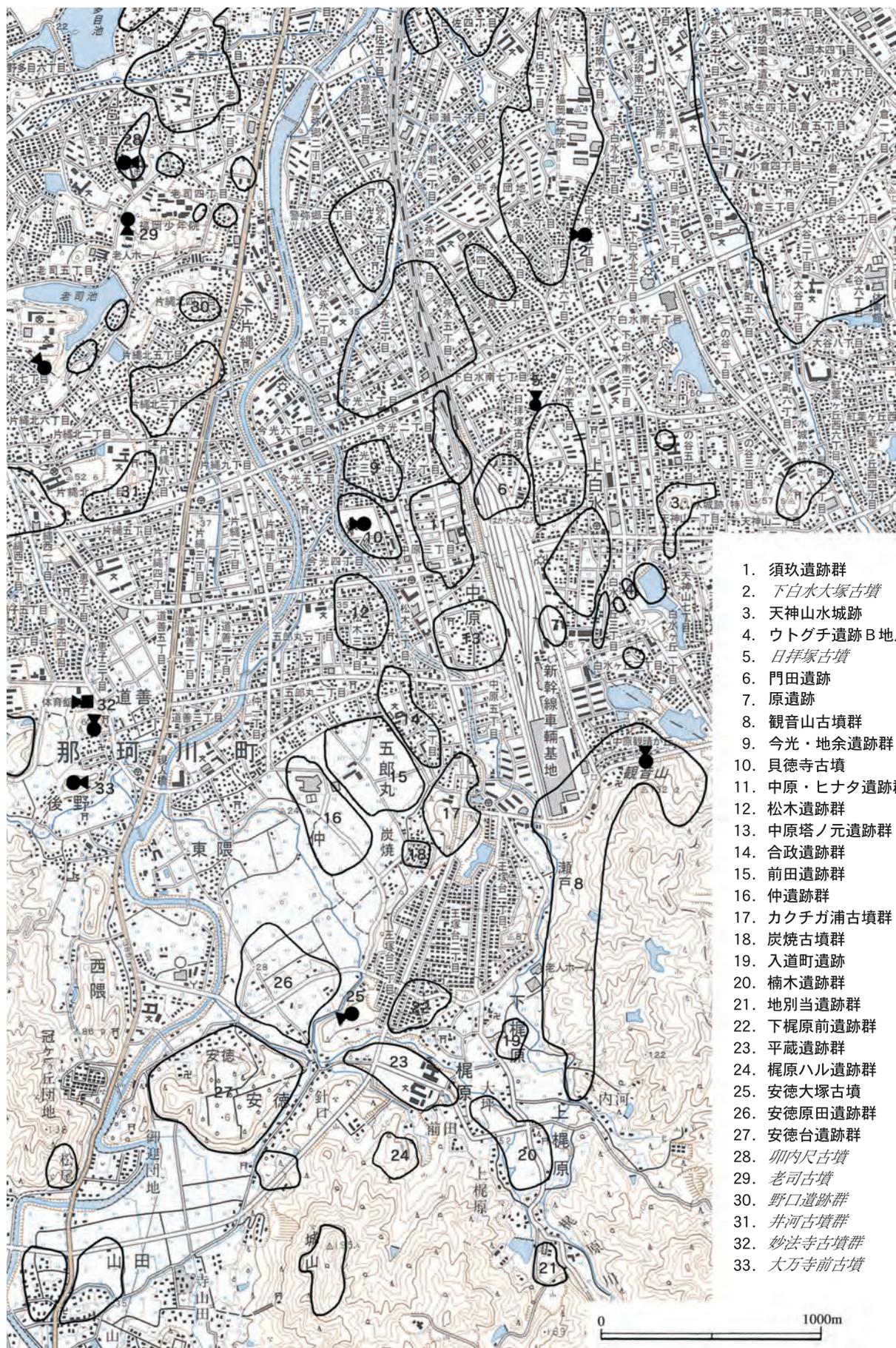
那珂川左岸

福岡市南区¹⁾卯内尺古墳は古くに発掘されて、銅鏃1・仿製三角縁獣帯三神三獣鏡1面が残存する。墳丘の殆どが破壊されていたが、1991年に福岡市教育委員会による発掘調査がなされて、良好に残存するくびれ部が確認された。その報告によると全長75m前後の三段築成の前方後円墳に復原され、墳丘には二重口縁と直口縁の壺形埴輪が樹立されていた。従来、粘土槨と考えられていた主体部は堅穴式石室であったと推測され、4世紀中葉に比定されている。卯内尺古墳の南150mに位置する²⁾老司古墳は初期横穴式石室4基を主体部にもつ全長75mの前方後円墳で、報告書では5世紀初め頃に位置付けられている。その中心主体である3号石室は3.2×2mほどの長方形プランをもち、南小口に階段状の入口があって、前方部へ向かって長い墓道が掘削されていた。石室内からは穿孔された舶載三角縁神獣鏡片をはじめとする舶載・仿製鏡8面のほか装身具・鉄製品が多く出土している。この2古墳は位置関係から見て同一系譜にあるのであろう。

小古墳では那珂川町妙法寺³⁾2号墳が注目される。全長18mの前方後方墳で、後方部は一辺長12mを測り、0.6mの薄い盛土をもつ。周溝は前方部前面には掘削されず、形態としては古式を示す。後方部の割竹形木棺から舶載三角縁神獣鏡1面のほか玉類・鉈・鉄斧などが、前方部箱式石棺の棺外から鉄鎌などが出土した。

また、町内野口遺跡群⁴⁾・井河古墳群⁵⁾・恵子若山遺跡⁶⁾・油田古墳群⁷⁾などで前期から中期にかけての一辺長10～20m前後の方（円）形墳が調査されている。主体部は小型堅穴式石室・箱式石棺・石蓋土壙墓や簡略な粘土槨、木棺直葬などである。恵子若山遺跡・油田古墳群で小型仿製鏡片が出土しているが、副葬品は概して貧弱である。

横穴式石室を主体部とする前方後円墳は小丸⁸⁾1号墳が調査された。石室は単室で、二段築成された墳丘規模は20m強に復原されている。この小丸1号墳のすぐ北東に浦の田4号墳がある。詳細は不明であるが、墳長40mを測るとされ、これも同じ系譜上に位置付けられよう。また、これらから1.5kmほど南には妙法寺1号墳（26m）・大万寺前古墳（24m）の2基の小型前方後円墳が近接して位置し、ともに横穴式石室を主体部とする。



1. 須玖遺跡群
2. 下白水大塚古墳
3. 天神山水城跡
4. ウトグチ遺跡B地点
5. 日拝塚古墳
6. 門田遺跡
7. 原遺跡
8. 観音山古墳群
9. 今光・地余遺跡群
10. 貝徳寺古墳
11. 中原・ヒナタ遺跡群
12. 松木遺跡群
13. 中原塔ノ元遺跡群
14. 合政遺跡群
15. 前田遺跡群
16. 仲遺跡群
17. カクチガ浦古墳群
18. 炭焼古墳群
19. 入道町遺跡
20. 楠木遺跡群
21. 地別当遺跡群
22. 下梶原前遺跡群
23. 平蔵遺跡群
24. 梶原ハル遺跡群
25. 安徳大塚古墳
26. 安徳原田遺跡群
27. 安徳台遺跡群
28. 卯内尺古墳
29. 老司古墳
30. 野口遺跡群
31. 井河古墳群
32. 妙法寺古墳群
33. 大万寺前古墳

第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

福岡市報603集「野多目A遺跡5」1999、春日市報39集「ウト口遺跡B地点」2004、那珂川町報65集「裂田溝」2005より作成

前期～中期の古墳群や前方後円墳などは平野に張り出した丘陵上に位置するが、その背後、山麓に張り付くようにして多くの後期古墳がある。その中で丸ノ口古墳群は中学校建設に伴って調査がなされ、5基の古墳が現状保存あるいは移築復原された。古墳2基の奥壁に敲打によって表現された円文が発見されたためである。

那珂川右岸

町内安徳大塚古墳は全長60m余の前方後円墳で、詳細はわかっていないものの、その形状・規模などから福岡平野南端部の前期の盟主墳と目されている。⁹⁾貝徳寺古墳は新幹線車両基地西側の区画整理で調査された。墳丘は全く残存せず、周溝のみが検出されて、その中から円筒・朝顔・人物・蓋・家形埴輪や「TK23～TK47形式」の須恵器が出土した。墳長47m、周溝を含めた全長は53mを測る。貝徳寺古墳の北東方向にそれぞれ1km内外の距離をもって日拝塚古墳(約50m)・下白水大塚古墳(約50m)・竹ヶ本古墳(約30m)の3基の前方後円墳¹⁰⁾が春日市域に残存する。中でも、昭和4年に盗掘された日拝塚古墳は、二段築成で、単室横穴式石室を主体部とする。仿製鏡や垂飾付耳飾・武具・馬具・土器など6世紀前半の出土品が東京国立博物館に所蔵され、古墳は国史跡となっている。下白水大塚古墳は墓地などによって墳丘が変形しているが、過去の調査で土製人形などが出土し、横穴式石室の存在が確認されている。6世紀後半～7世紀前半の築造とされる。

日拝塚古墳の南東には、いずれも横穴式石室を主体部とする天神山古墳(35m)、その南に観音山古墳群中原I-1号墳(約20m)がやはり1km前後の距離をもって位置する。

前期から中期にかけての小古墳は炭焼古墳群・カクチガ浦遺跡群・エゲ古墳¹²⁾などが安徳大塚古墳の占拠する丘陵の北端付近に集中する。エゲ古墳はカクチガ浦遺跡群の載る丘陵の北端に位置する方墳で、一辺長19mの規模をもつ。二段築成で下段は地山削り出し、上段は盛土で形成し、高さは最大で4.5mを測る。主体部は長さ3.65mの割竹形木棺を粘土で固定したもので、仿製四獣形鏡1面、玉類、鉄製品(剣・鏃・斧・鉈・鋸・錐)などが出土し、古式の土師器を伴う。近接して6世紀代まで連綿と造墓活動が継続し、墓制の変遷がよく窺える。

新幹線車両基地内の原古墳群¹⁴⁾では、3基の円墳に寄り添って周溝墓・土壙墓が営まれている。1号墳は直径約19mの円墳で、幅0.7m、長さ2.6mの竪穴式石室を主体部とし、盗掘を受けるが三角板革綴短甲片を出土した。構造や副葬品の残片から見てカクチガ浦遺跡群中の古墳より上位の階層が葬られたものであろうが継続しない。

那珂川左岸に多くの後期古墳が見られるのに対し、右岸では群としてまとまった規模の例は車両基地周辺、殊に観音山周辺にほぼ限られている。既に市街化して古墳を確認しがたいということもあるかも知れないが、石材の調達と横穴式石室を構築しやすい地形等の条件が整っていないことも大きな理由であったと思われる。那珂川右岸に住んだ人々はどこに葬られたのであろうか。福岡市域の東限となる月隈丘陵の西裾には南北に相当数の小古墳が築造されていて、集落との対応関係は興味ある問題である。

新幹線車両基地から7kmほど北、福岡市博多区に流域の有力前方後円墳が近接して位置する。那珂八幡古墳¹⁵⁾は墳長75mほどの纏向形前方後円墳といわれ、第2主体部から舶載三角縁神獸鏡1面を出土し、九州最古の古墳の一つとされる。また、東光寺剣塚古墳¹⁶⁾は75mの墳長をもち、三重の周濠が復原されている。全長約9mの複室横穴式石室を主体部とし、奥壁に接して阿蘇溶岩製の石屋形を

設置する。6世紀中葉頃に比定される首長墓である。弥生中期に奴国と呼ばれた福岡平野の中で、出現期と最末期に近い最大規模の前方後円墳が奇しくも那珂川右岸に近接して営まれていることは興味深い。

註

- 1) 福岡市教委「卯内尺古墳」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第690集、2001)
- 2) 福岡市教委「老司古墳」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第209集、1989)
- 3) 那珂川町教委「妙法寺古墳群」(『那珂川町文化財調査報告書』第7集、1981)
- 4) 那珂川町教委「野口遺跡」(『那珂川町文化財調査報告書』第4集、1979)、同「野口遺跡群」(『那珂川町文化財調査報告書』第53集、2001)
- 5) 那珂川町教委「井河古墳群」(『那珂川町文化財調査報告書』第10集、1983)
- 6) 恵子遺跡調査会『恵子若山遺跡』、1975
- 7) 福岡県教委「油田古墳群」(『福岡県文化財調査報告書』代42集、1969)
- 8) 那珂川町教委「小丸古墳群」(『那珂川町文化財調査報告書』第13集、1985)
- 9) 那珂川町教委「片縄山古墳群」(『那珂川町文化財調査報告書』第61集、2003)、同『丸ノ口古墳群保存整備事業報告書』、2003
- 10) 那珂川町教委「貝徳寺古墳」(『那珂川町文化財調査報告書』第16集、1987)
- 11) 春日市教委『ハンドブック 春日市の文化財』、1992
- 12) 福岡県教委「炭焼古墳群」(『福岡県町文化財調査報告書』第37集、1968)
- 13) 那珂川町教委「カクチガ浦遺跡群」(『那珂川町文化財調査報告書』第23集、1990)、同「カクチガ浦遺跡群Ⅳ」(『那珂川町文化財調査報告書』第64集、2005) など
- 14) 福岡県教委「原古墳群の調査」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1976)
- 15) 福岡市教委「那珂八幡古墳」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第141集、1986)
- 16) 福岡市教委「東光寺剣塚古墳」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第267集、1991)



観音山古墳群平石Ⅲ群付近、坑口は梶原トンネル。

Ⅲ 発掘調査の記録

1 観音山古墳群平石Ⅳ群

1) はじめに

平石Ⅳ群が占地する支丘は頂部に狭い平坦面をもち、急角度で落ちる西斜面の下位にやはり小さな緩斜面が続く。古墳は緩斜面と急斜面の境付近の南寄りに単独で位置する。この支丘の北には小さな沢を挟んで同Ⅲ群が位置し、南には浅い谷を挟んで同Ⅴ群が接する。

平成18年度冬、平石Ⅴ群の調査中に工事関係者から支丘頂部付近に梶原トンネルの坑口が計画されていて、南から掘削中であり、関連する工事を早急に行いたい旨の説明を受けた。ついで、仮設道を取り付けるために、平石Ⅳ・Ⅴ群の間の谷を大型土嚢で埋め立てて造成する必要があるので、Ⅳ-1号墳の南側の一部と頂部平坦面の調査を至急実施するように依頼を受けた。

丘陵頂部には古墳状の小さな高まりを1か所認めることができ、下位斜面には盗掘坑の可能性のある窪みもあったことから、それらに幅1mの試掘溝を設定、一部を面的に発掘したが、遺構は全く存在しなかった(図版9、第4図)。遺物も頂部付近から石斧が出土したのみである。

一方、Ⅳ-1号墳南では小さな段落ちの上端の一部に大型土嚢を設置するために、その部分の調査を実施した。表土から人力で発掘したが、明瞭な墓道の掘り込みは認められないものの、相当量の土器が出土した。次年度に行った本調査で出土した土器は少量で、本古墳出土土器は殆どがこの時のものである。また、本調査の結果、ここがやはり墓道に相当することが判明した(図版1)。

古墳本体の調査は19年4月から開始した。周溝はそれほど深いものではなかったが、急斜面に石室を構築するため、地山を大規模に掘削した様子を確認できた。

なお、九州新幹線建設局との協議段階では当地に2基の古墳が存在するとされていたが、トレンチ調査の結果2基目の古墳は存在しないことが確認された。

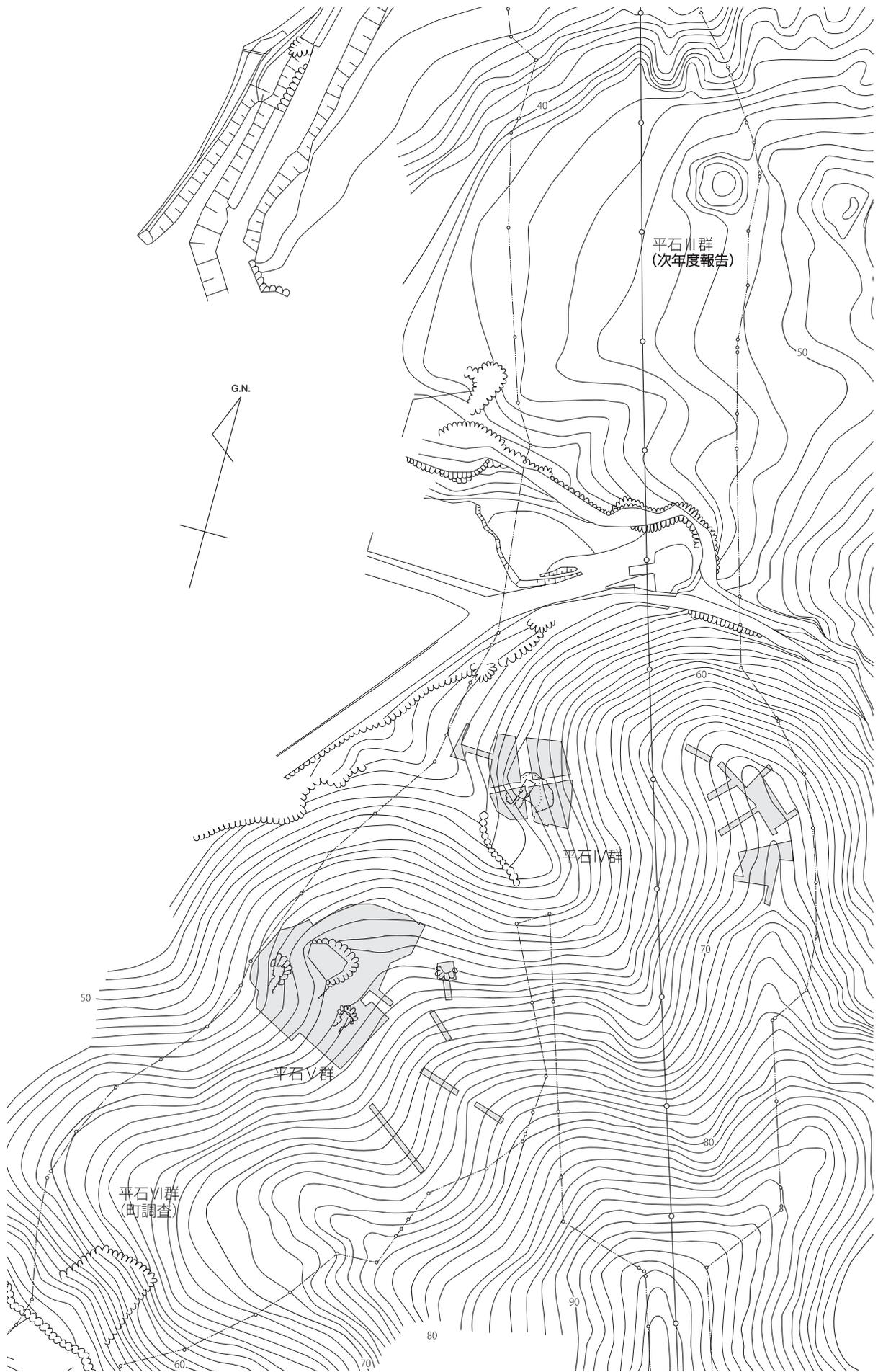
2) 平石Ⅳ-1号墳

i) 墳丘(図版3・4、第5~7図)

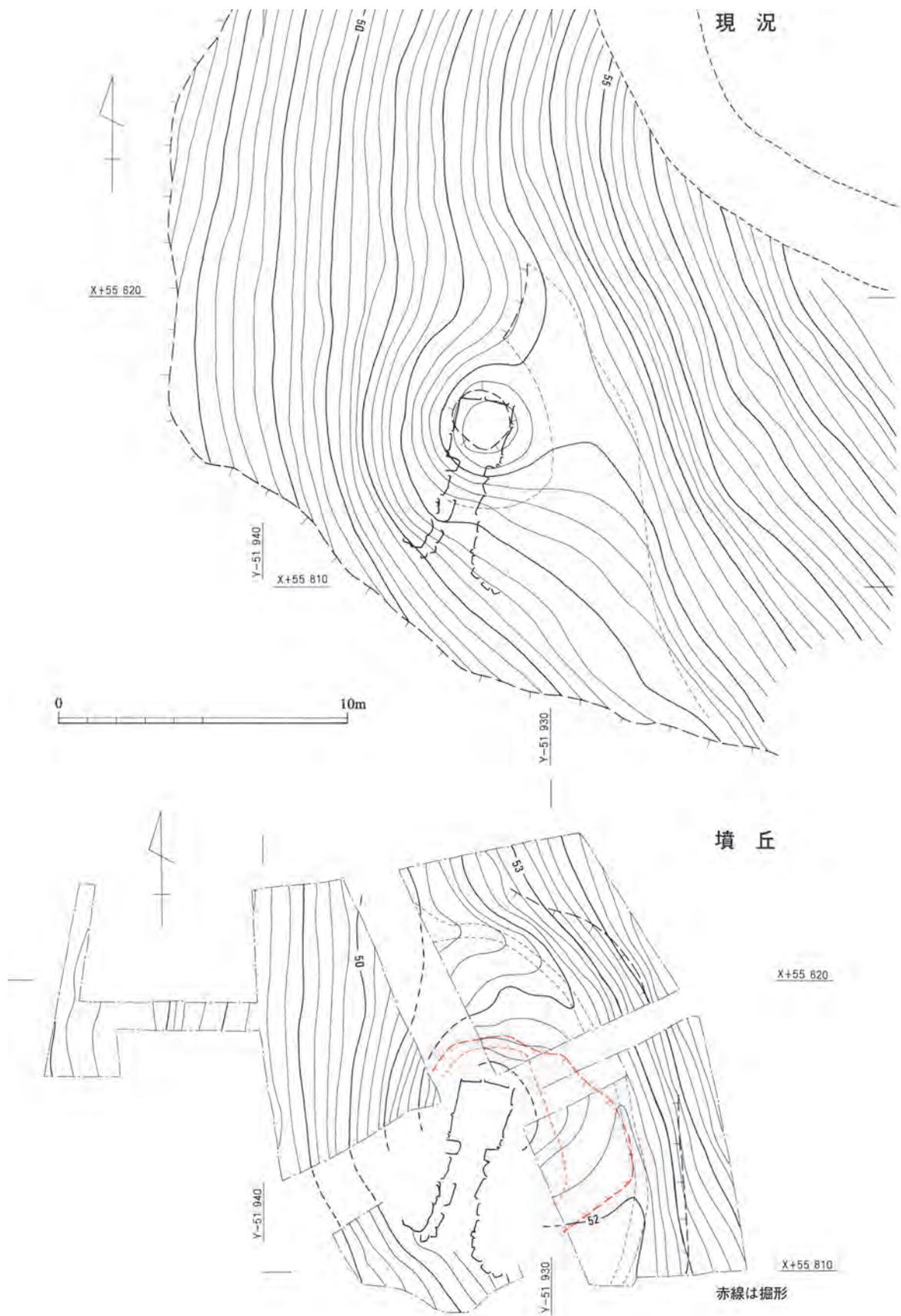
現状で土饅頭が明らかに認められ、頂部は2m内外の平坦面となっていた。墳丘東側は、急斜面との間に幅2.5mほどの掘り割り一周溝が明瞭で、その標高は墳頂部から0.6mほど下位にある。なお、周溝の東肩は急斜面に連なっていて不明瞭であった。墳丘北側は墳頂部から3mほどの付近に地形変換点が認められるが、下位斜面の西側では図示しているもののやはり不明瞭となる。

天井石の一部が転落・露出して主体部主軸は推測可能であったが、古墳築造法を見るため、本来の等高線に対して直角方向にトレンチを設定した。したがって、土層図中の石室実測図は合成したもので実際のものではない。

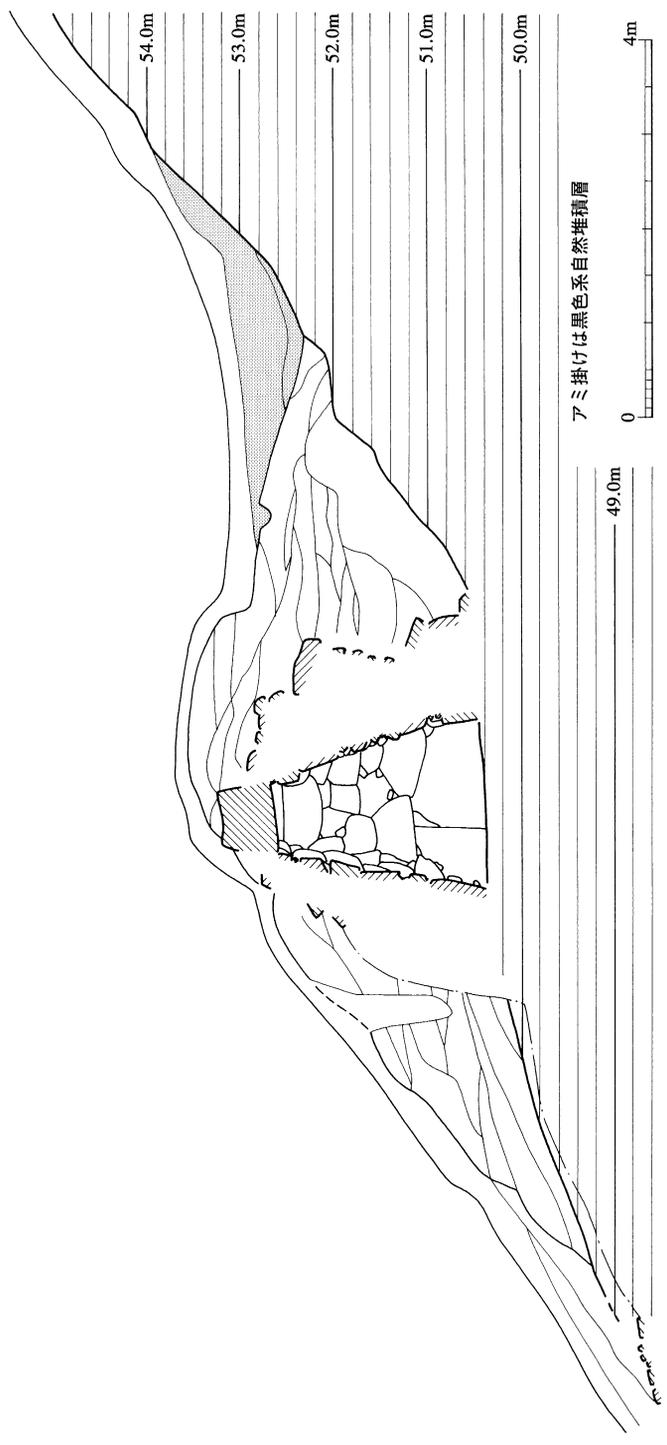
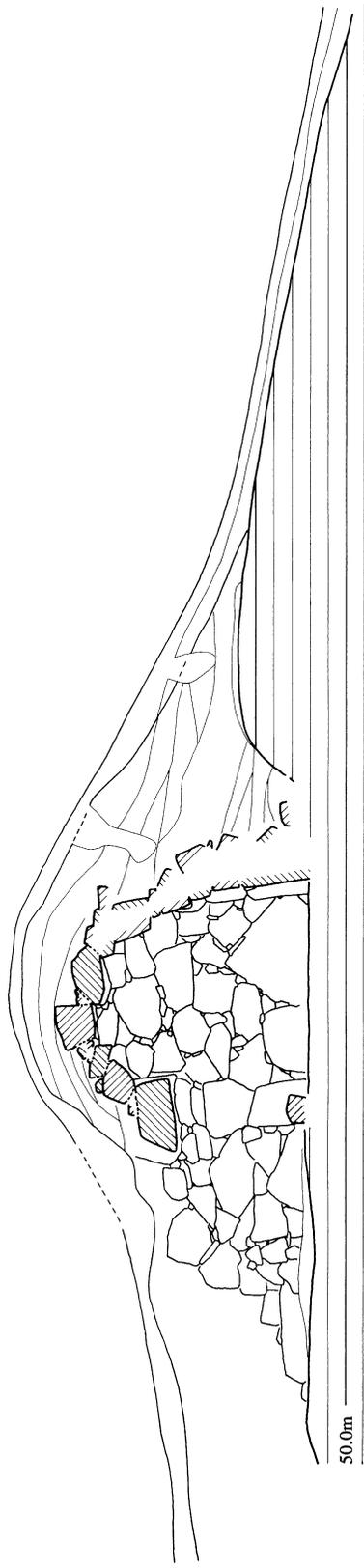
墳丘は概ね地山の花崗岩バイラン土を使用し、粒子の粗い明黄褐色土と粒子の細かい暗黄褐色土を互層に積み上げている。これらはいずれも軟質である。また、観音山古墳群の発掘調査で当惑し



第4図 調査区位置図 (1/1,000)



第5図 平石Ⅳ-1号墳墳丘測量図 (1/200)



第6図 平石Ⅳ-1号墳墳丘土層実測図 (1/80)

たことは、過去に調査を行った古墳のすべてと比べてよい頻度でいわゆる「旧地表」と呼ぶ灰褐色～灰黒色といった薄い土層が見られたのであるが、ここではそれが殆ど見られない点である。しかも、古墳は再堆積した花崗岩バイラン土上に構築されていて、地山の認定が困難なのである。

東Tr. 石室中心から7mの付近から地山を掘削するようで、周溝底となる地点から更に石室床付近まで大きく掘削する。周溝底以下の地山は軟質ではあるが岩盤となり、土層観察では小さな段を削り出しているが、面的には捉えることができなかった。また、このトレンチでは最下層に腰石を押さえるように非常に堅く締まった暗褐色砂質土が厚く貼り付けられていたが、この土は非常に均質で分層ができなかった（23頁、写真）。

この土層では、周溝底下のテラスから天井石を覆う一次墳丘と呼ぶべきラインと、周溝底から墳丘を高くする二次墳丘が看取できるが、他の土層では対比できるラインを明らかにできない。盛土の始まる地点は石室中心から5m余である。

周溝最下層には灰黒色土が、その上方には幅4m強にわたって、黒色土が厚く堆積していた。

西Tr. 東Tr.の様に地山が岩盤ではなく、二次堆積のバイラン土であるため盛土の裾は判断が困難であったが、土層図で地山とした層の上面に炭化物が散見されることもあって図のような判断でよいと思われる。これによれば、盛土は石室中心から4.6mの地点から始まり、東Tr.の知見とも齟齬はない。なお、図西端に並べ置かれたような礫群があるが、南Tr.の所見では標高49m付近の下位に大小の礫が土石流を思わせる状況で散乱していて、その一部が覗いているのであろう。

盛土はやはり多くが軟質なバイラン土であるが、地山から1mほどの高さまでは東Tr.最下層に見られた硬質の土が軟質土に混入して使用されている。

北Tr. 盛土は大部分が軟質土で、掘形内にもみ東Tr.下位に見られた硬質土が観察された。地山に薄く貼り付く旧地表様に見える盛土は硬質土・軟質土の混合である。なお、石室前端から北Tr.北端の盛土までの距離は約10.5mほどとなる。

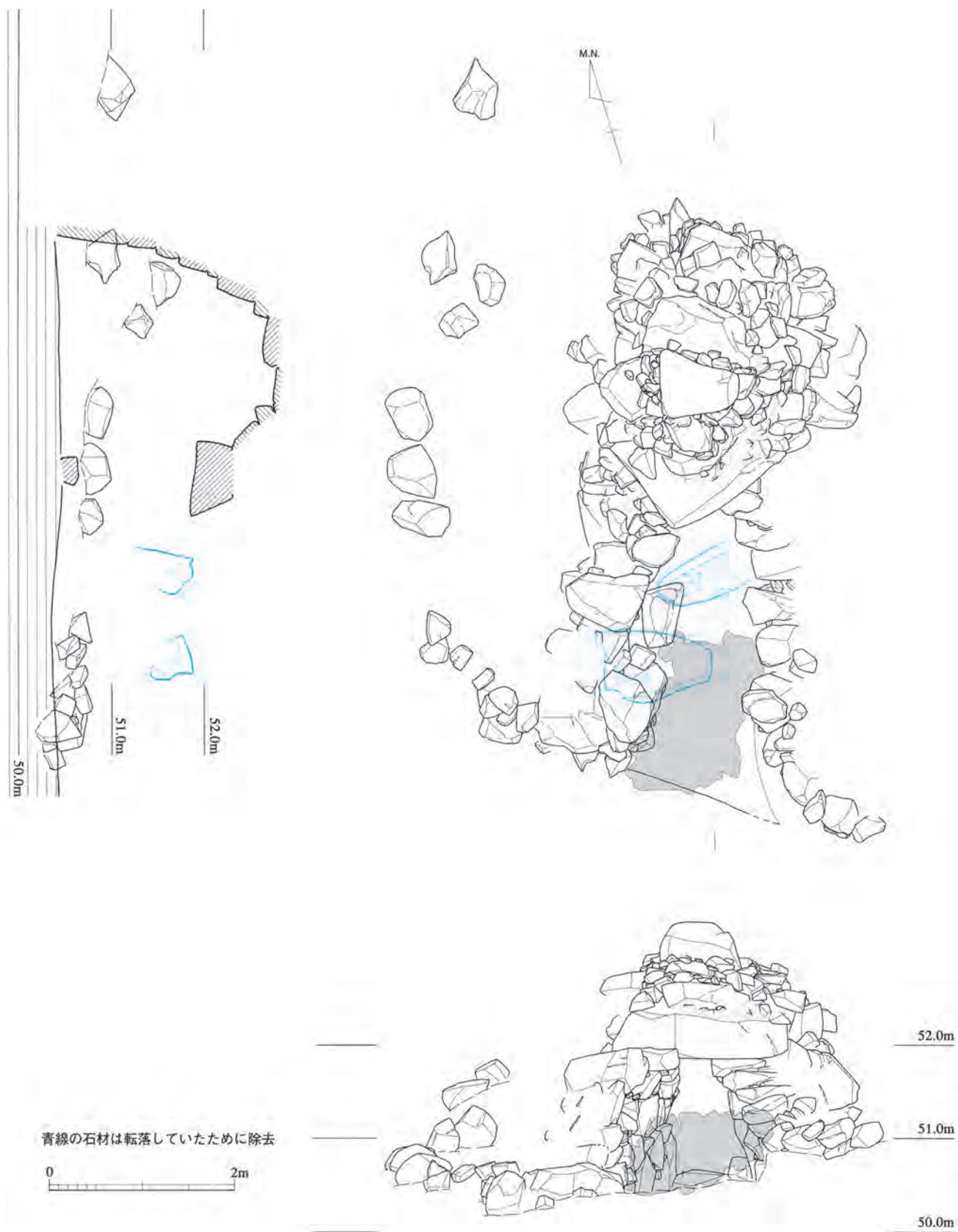
以上の所見から、この古墳は直径10mほどの円墳としてよかろう。尾根線上位に幅広い周溝をもつが、そこからの出土遺物は乏しい。

外護列石

左（西）壁前端の墓道石組基部には大きく、高さの低い石材を置き、墳丘西側を巡る外護列石へと続く。墓道に連続する南辺ではさほど大きな石材を用いず、乱雑ながらも一応連続的に配置した意図が読み取れる。一端途切れた部分は西Tr.を設定した付近だが、発掘中に石材を除去しておらず、本来的に空隙が置かれたようである。空隙南北の石材の大きさが異なり、かつ北側の3個の石材の設置位置が高くなっていることなど、本来的に連続性はなかったとしてよかろう。この3個の石材のさらに北では、もはや散乱状態といった状況の石材4個があるが、これらがどのような意図で置かれたものか、判断に苦しむ。墳丘封土の流失を防ぐにしても、墳丘の装飾を図ったにしても成功したとは思えないものである。

ii) 主体部（図版2・5～8、第7～10図）

現状で、南端の天井石の前面が露出して、土砂の流入した内部を窺うことができた。その前面を掘り下げて行くと、転落した巨石が2個現れ、これは羨道部の天井を構成したものであろう。石室東壁（右壁）がすべて盛土中にあるために、上方からの土圧によって羨道壁とともに崩落した模様である。なお、前年度末に墓道先端を調査した際に1個の巨石を確認している。

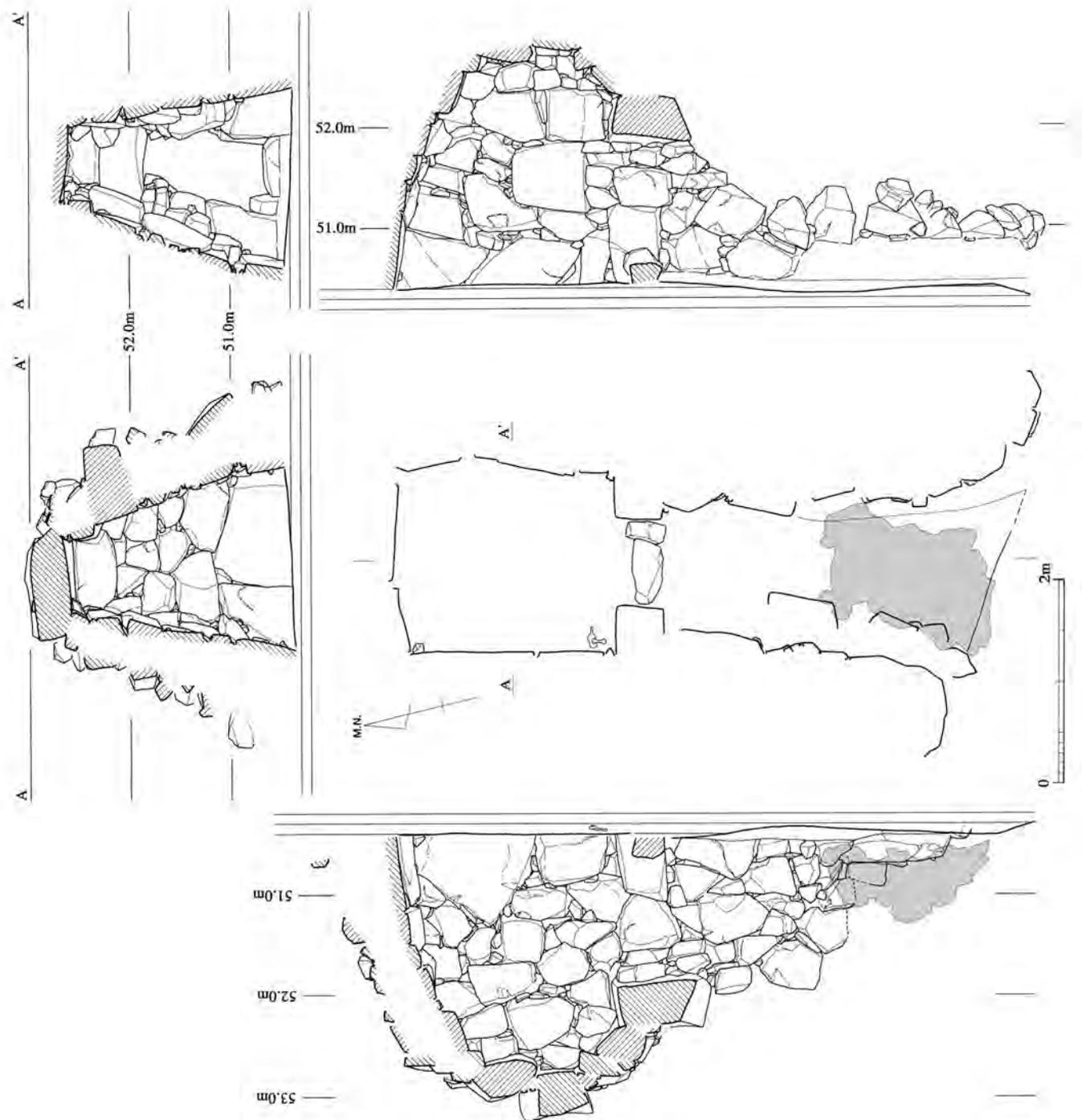


第7図 平石Ⅳ-1号墳主体部平面実測図 (1/60)

主体部は両袖式単室横穴式石室で、全長約6.5mを測り、上方からの土圧を強く受ける東壁石組みが西壁よりも長く伸びている。

石室

袖石の配置はほぼ正確に対称の位置に配され、西壁も整然と置かれるが、奥壁及び東壁はプランが乱れる。長さ2.2m、幅1.9mほどの長方形プランをもち、高さは最大で2.2mほどとなろうか。最高



第8図 平石Ⅳ-1号墳主体部実測図 (1/60)



第9図 平石Ⅳ-1号墳墓道二次壁体実測図（1/60）

所は玄室中心より前に偏しているが、奥壁に顕著な乱れは認められないことから、これが本来の姿であったと思われる。東壁は土圧でせり出す。

なお、敷石が使用されていたが、攪乱を受けていたために記録作成時にははずしている。

羨道・墓道

袖石から前面の石組は、東側では大きく崩れて、内傾する1、2段が残るのみであった。一方、西側では二重の石組がなされ、前面のそれが補修、あるいは補強されたものであるのは確かであろう。それぞれの高さを見ると、前面石組は頂部がほぼ揃うとはいえ、袖石上天井石付近の高さに比べればなお50cm以上低くなっている。しかし、本来の壁体である背面石組は袖石上天井石から1mの位置までは高さを維持するが、その南側は急速に高さを減じている。この本来の壁体を見ると羨道を構成する天井石は1個で済みそうである。前年度調査で検出した石材を含めて、なお2個の巨石は前面石組の上に置かれていたものであろうか。羨道・墓道の西壁・天井石は組み替えられたものと思われる。なお、その際には意図したものか、前面石組が置かれたことによって、框石前面に前室的空間が生じた。框石等の明瞭な構造物も出土遺物もないが、閉塞の位置関係から見て前室としての空間と位置付けられた可能性がある。

なお、墓道は掘り込みを伴っていない。

閉塞

大小の塊石を使用したもので、必ずしも整然としたものではないが、まとめ具合から見て本来の姿をさほど逸脱したものではないようである。

閉塞石は通常、框石を基準に積み上げることが多く、閉塞の先端から框石までの間が前室の空間とされていたことを暗示する。

iii) 出土遺物

玄室内から原位置を保たない各種金属製品、明確な掘り込みをもたない墓道付近及び周溝南端付近などから土器類が出土した。また、墳丘南西付近に並べられた列石前面で鉸具が出土しているが、盗掘に伴うものであろう。先述したように、土器は殆どが18年度末に緊急に調査した部分で出土している。

金属製品 (図版27、第11・12図)

6個の耳環が玄室内から出土したが、敷石が攪乱されていたために、本来の位置を保つものか不明である。1・2は最大径2.5cmほどの大振りの金銅製耳環。中空のようで、それぞれ5・6gを測る。小口面は膨らみをもたず、環体との境はシャープな稜をもつ。1は緑青を吹くが、金も比較的良好に残る。2はわずかに金が残るのみで、殆どが緑青に覆われ、一部破れている。3・4もセットをなすもの

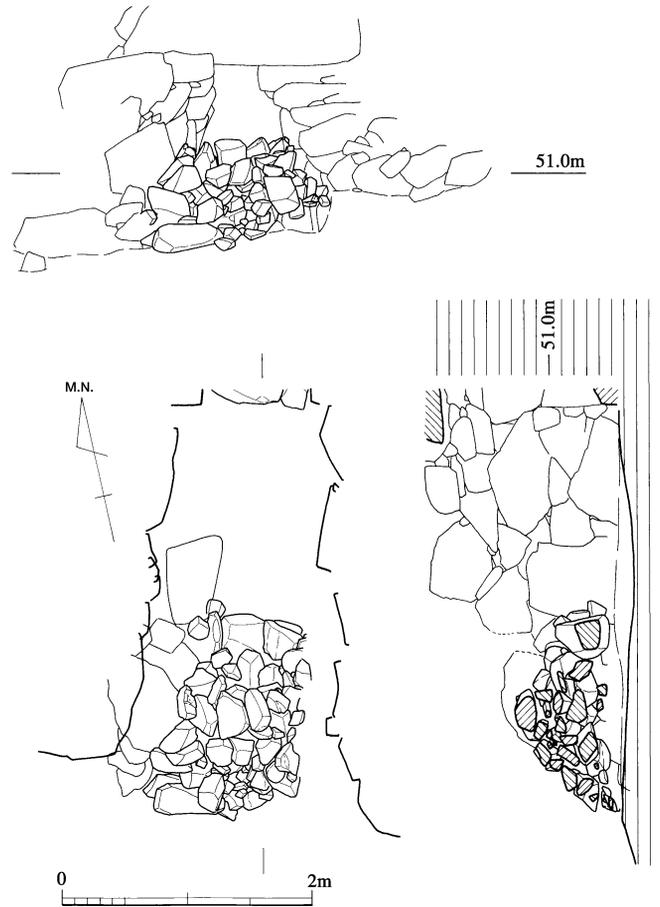
であろう。最大径2cmほどで、環断面がやや扁平となる。それぞれ6・7gである。ともに緑青を吹くが、なお金が多く残り、部分的に黒色化する。5は最大径は3・4に似るが、環自体の直径が小さく、重量も3gに過ぎない。環はほぼ円形で、金がほぼ全体に残る。よく見ると金が皺状になった部分があり、これは金箔を用いたものであろう。なお、先の4点には皺は見えず、5に比べて光沢の面で勝る。6は銅芯である。最大径は5に似るが、セット関係は不明。これは1gを測る。

19～21は鉄製品。19は主体部南西部の列石付近で検出したが、盗掘時のものである可能性が高いと考えている。21は玄室内南西隅から唯一現位置を保って出土した。その他は攪乱土中で原位置を特定できないものである。

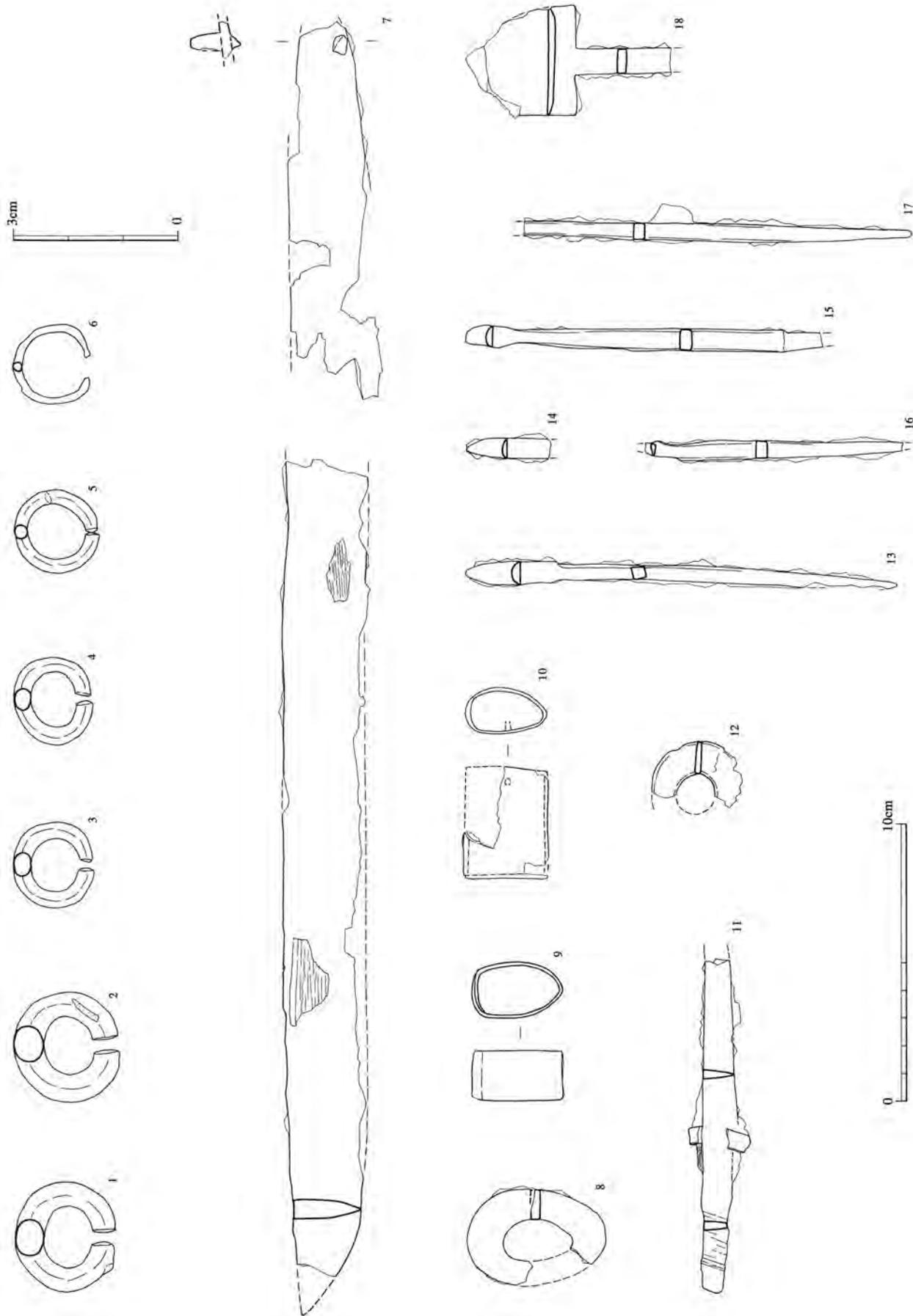
7は大刀。刀身残存長30cm弱で切先の一部を欠く。柄も柄尻の一部を欠損するが、破損部のすぐ横に目釘が残る。図左半分以上の部分で刃部が毀損している。

8は倒卵形、小型の鏝。全体に剥離するようである。9は縁金具で、上部は薄い鉄板を重ねるようである。10は鞘尻金具で、先端部の倒卵形円盤が剥離していた。目釘が1か所に残る。これら3点は形状や大きさがほぼ同様で、セットで刀装具をなしていたようである。7の大刀に伴うものか。

11は刀子で、切先を欠く。柄部分に薄く木質が残存する。12は正円の円盤で、背面は剥離するようである。13は片丸造柳葉形長頸鏃で、関ははっきりしない。14は身が薄いようだが同形であろう。15は切先が潰れたようになり、身も小振り。篋被があるように見えるがこれもしっかりしない。18は五角形の鏃で、先端が折れて錆着する。図背面になるが、鏃をもつ。



第10図 平石IV-1号墳閉塞状況実測図 (1/60)



第11图 平石IV-1号出土遗物实测图1 (1/1·1/2)

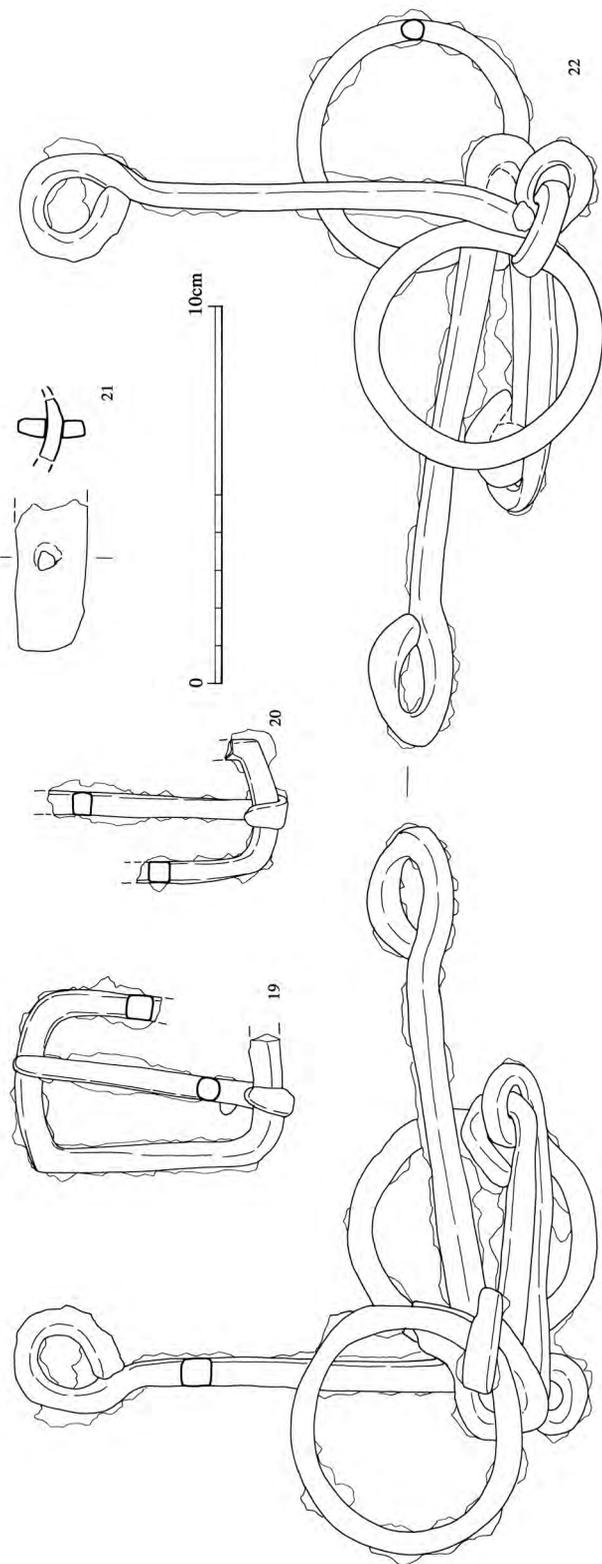
19・20は鉸具。21は鉄製の革金具で、留具が残る。

22は轡。銜は全長8～9cmと長さがやや異なる、断面円形に近く、両端を折り曲げて環とする2本の鉄棒で構成される。環の形状は正円でなく、両端の環の形状が不揃いであつ一方では両端の環が90度の角度をもつて造られている。他方は90度までいかないが、やはり両端の環は捻れた位置関係にある。素環鏡板は直径6.5cmほどの正円となり、直径5mmほどの断面円形の鉄棒を加工する。継目は見えない。引手は一辺7mmほどの断面隅丸方形の鉄棒を使用するようである。これも両端を折り曲げて環を造るが、比較的形状は整い、両環は180度の位置、分かり易くいえばS字状となる。これも15.5～16.5cmで2本の長さがわずかに異なる。銜の環が素環鏡板と引手を繋ぎ止めている。

土器 (図版27・28、第13・14図)

第13図1～10は「墓道周辺」出土の須恵器。明確な掘り込みをもたないために、石室前面から出土した土器をこう称した。1・2は口縁部に高いかえりをもち、つまみを付すもの。1は3/4が残存し、一見杯身のように見えるが、つまみの剥離痕がある。天井部外面は雑な回転篋削りで丸味をもって仕上げ、焼成が甘く、器表が荒れている。2は1/2が残存。天井部は平坦面をもつ。外面に灰を被っているが、回転篋削りが見える。3・4は杯身。3は1/2が残存し、天井部は回転篋削りを行つて、篋記号を刻む。口径8.6cm、器高2.5cmを測る。4は焼け歪んでいるが2/3が残存し、口径9.6cm、器高は2.7cmを測る。これも天井部は回転篋削りで終わる。

5は特異な脚付須恵器で、脚部は完存、口縁部付近の1/2が残存する。外面に灰を被り、全体に焼け歪んでいるが、2条の突帯はシャープに作り出され、全体に丁寧に造作されている。なお、下位突帯の下方にはカキ目



第12図 平石IV-1号出土土遺物実測図2 (1/2)

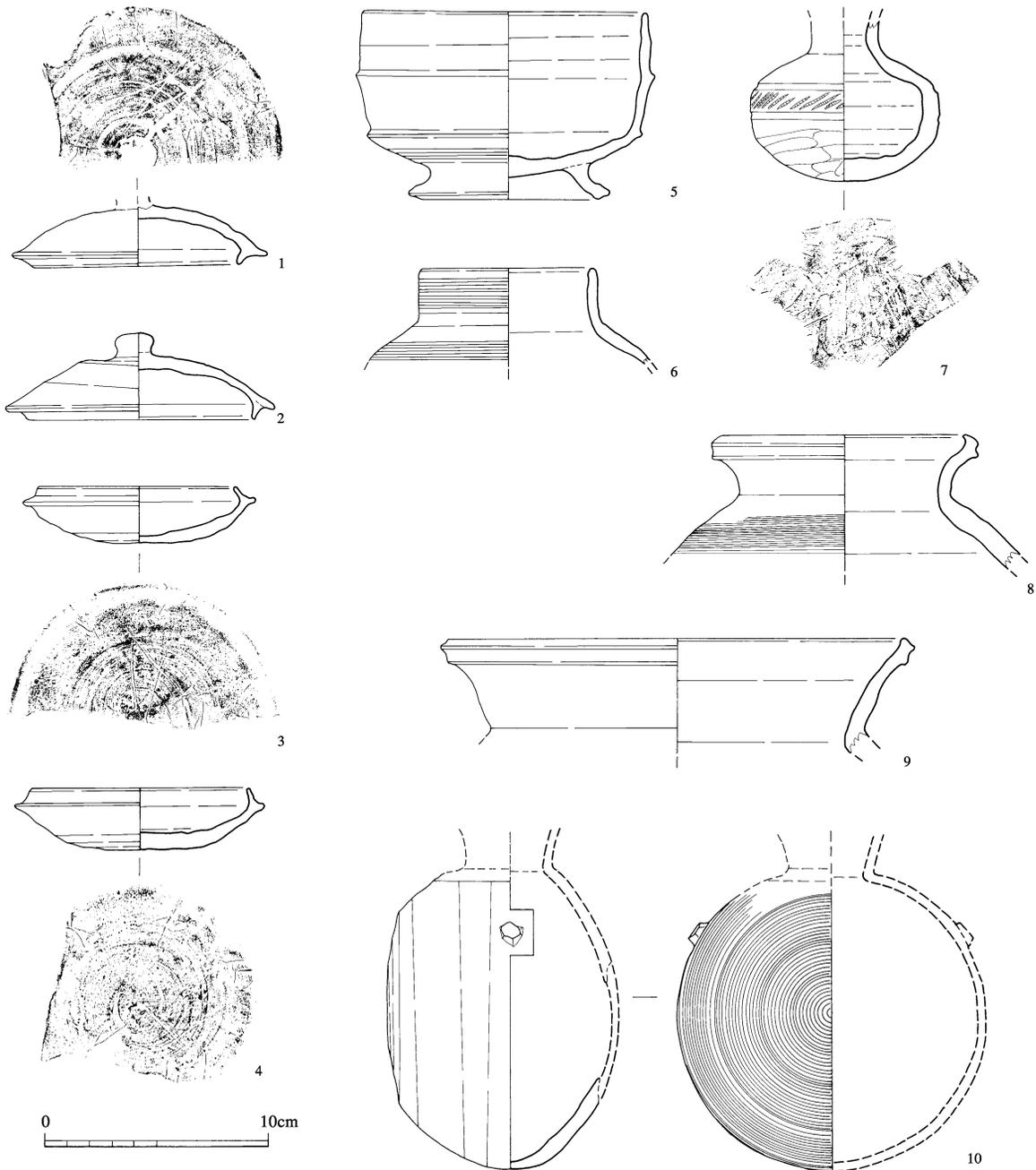
が見える。

6は直口壺片で、繊細なカキ目を多用する。7は体部の2/3が残存する甕。胎土精良で、丁寧に作られる。底部は不定方向の篋削りで仕上げ、粗っぽく格子状の篋記号を刻む。

8は口径12cm弱の小型甕で、口縁部などの造作はシャープになされ、体部上半は繊細なカキ目が施される。9は口径20cmほどに復原でき、胎土精良で、内外面に灰を被る。両者とも1/3が残存。

10は提瓶の残片で、肩部に篋で成形した小さな粘土塊を付すが、単なる装飾に過ぎない。胎土精良で作りも丁寧。カキ目を使用しない部分は丁寧に回転篋削りで仕上げる。

第14図は墳丘及び周溝出土土器で、14・16以外はいずれも須恵器としてよい。11～14は墳丘SE(南東)区表土出土あるいは東辺周溝南端(SE区)から出土したものと接合したもの。11は2/3が残

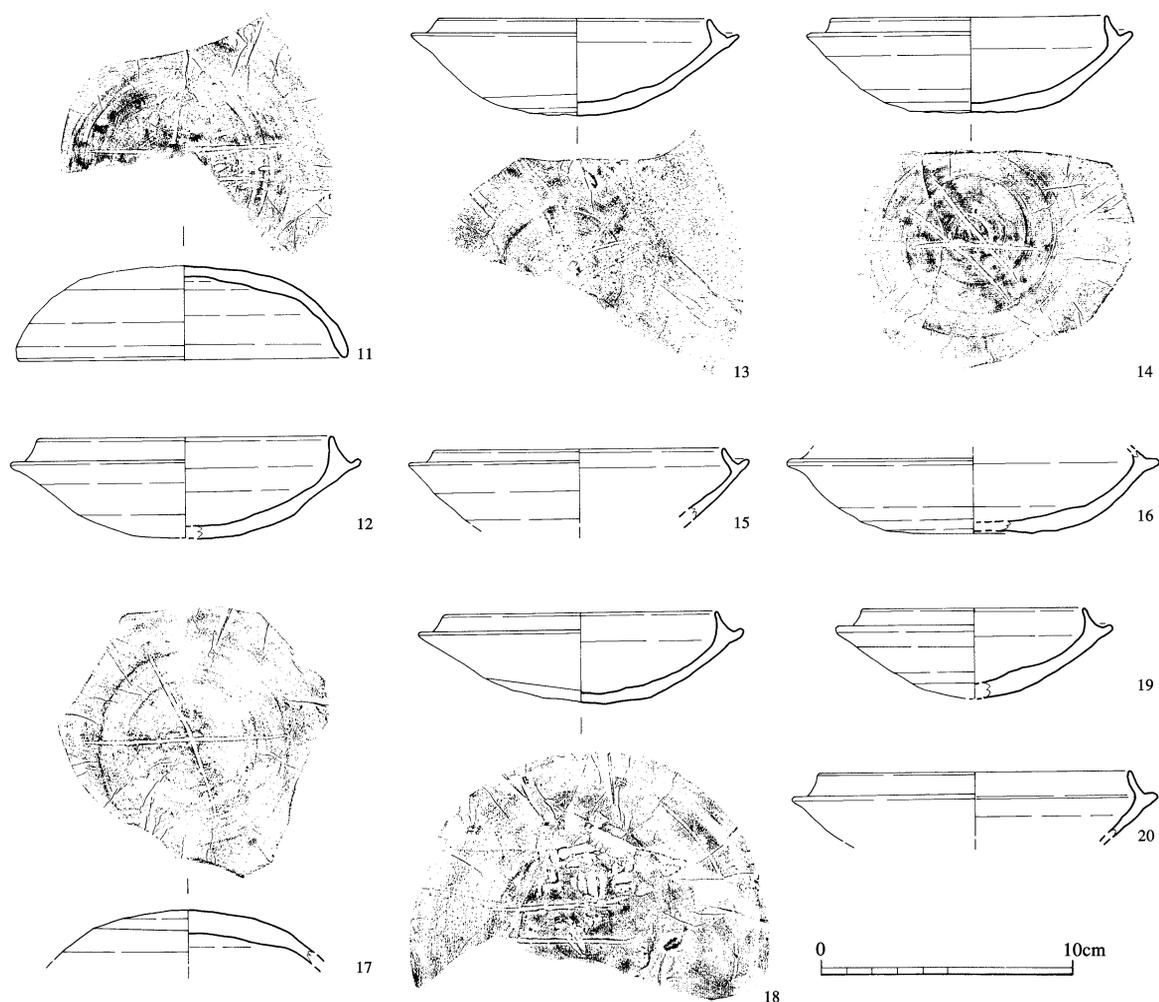


第13図 平石Ⅳ-1号出土遺物実測図3 (1/3)

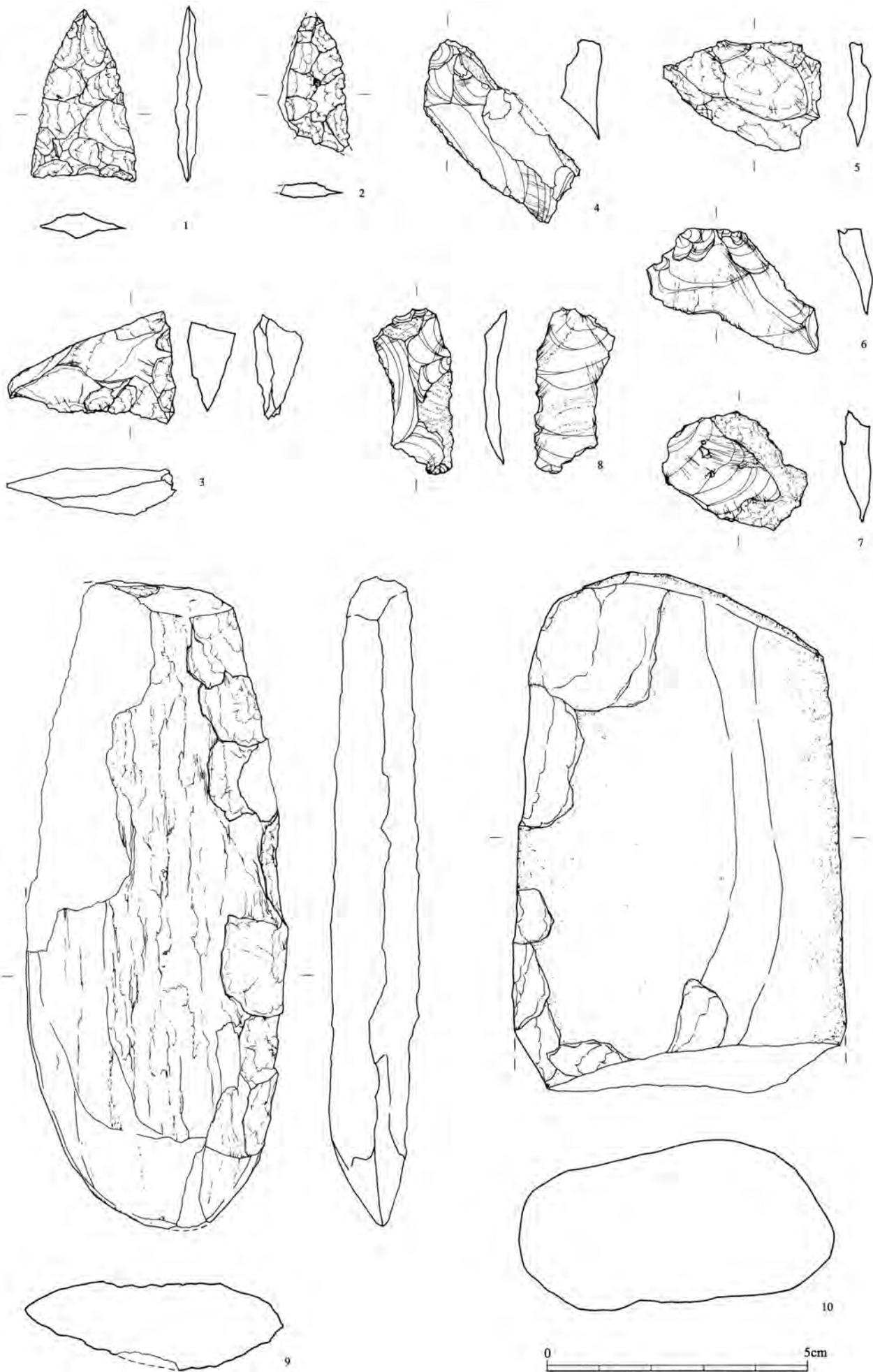
存し、胎土に黒色粒子が目立つ。胎土などから見て図示した中にセットとなる個体はない。口径は約13cmを測る。12は体部の1/2ほどが残存し、口縁部付近は小片となるが、口径は12cmに復原できる。熱を受けたようで器表が荒れ、図示していないが外面に篋記号の一部が残る。13は2/3が残存し、復原口径は10.8cmとなる。胎土精良で、丁寧に作られる。14は灰黄褐色土師質に焼き上がるが、胎土・作りとも良好で、篋記号も含めて通常の須恵器と何ら変わらない。内外面に光沢のない黒色顔料と思われるものが付着するようである。1/2ほどが残存し、復原口径は11cm。

15・16は南畦出土である。南畦は石室東壁の背面のすぐ東に位置し、墳丘SE区としてもよい位置にある。15は1/3ほどが残存し、口径11.6cmに復原できる。胎土精良で、作りはシャープ。灰褐色となるが、黒色顔料らしきが付着する。16は淡灰赤色～灰黄褐色となる土師質に焼き上がった土器で、14に似る。

17～20は東辺周溝南端出土。17は天井部のみが残存するが、胎土精良で、作りも良いが焼きが甘い。18は2/3が残存、口径10.8cmに復原できる。胎土や作りはよいが、外面全体に厚く灰を被る。19も外面に灰を被り、焼け歪んだ残片のために口径が小さく復原されている。20も1/3の残片で、12.5cmに口径復原できる。これも丁寧に作られた須恵器である。



第14図 平石Ⅳ-1号出土遺物実測図4 (1/3)



第15图 平石IV群出土石製品等実測図 (1/1)

3) その他の遺構と遺物 (図版38、第15図)

平石Ⅳ群は急傾斜地に位置しているものの、若干の古墳以前の遺物を出土している。図示したものは石製品であるが、縄文土器小片も若干ある。北に隣接する平石Ⅲ群では多くの押型土器などが出土したが、ここでは時期が分かるものは晩期に属するようである。

1はサヌカイト製の打製石鏃で、二等辺三角形の平基式タイプ。割と大きな細部調整だが、良形に仕上げる。全長3.3cm。1号墳南畦出土。2は安山岩製打製石鏃で1号墳主体部内から出土。先端・左脚・右脚先端が新欠。玄室内表採。3は安山岩製スクレイパーで1号墳墳丘NE区出土。やや、刃部調整が雑な感じを受ける。4は黒曜石剥片で、やはり1号墳墳丘SW区出土。5はサヌカイト剥片で1号墳墳丘NE区出土。やや風化ぎみで石鏃の未製品と疑うものである。6・7は1号墳墳丘NW区出土の黒曜石剥片。7は自然面が残る。8は1号墳墳丘NE区出土の黒曜石剥片。石材はあまり良くない。9は1号墳墳丘NW区出土の局部磨製石斧。暗緑色片岩を用い、刃部・基部に研磨を施すが、研磨方向は不明。右側縁はよく打痕を残す。残存長 12.3cm。10は石斧未製品か。軟質の砂岩を使用し、基部をもつ。残存長10.85cm。丘陵頂部から出土したものである。いずれも縄文時代の所産だが、元位置は保たない。

4) 小 結

平石Ⅳ-1号墳は単独で位置する点で他の群と異なる。石室構築に際して他に類を余り見ない工法を使っているとはいえ、墳丘や主体部の規模はさほどでもなく、副葬品を見ても鉄製素環轡といった馬具の序列の中では下位にランクすべきものであった。すなわち、古墳を築造でき、馬具を有する階層の中ではやはり低位に位置付けられるものであろう。

墓道と墳丘から出土した須恵器蓋杯には明らかな差異が認められる。墓道出土須恵器は杯蓋にはつまみが付き、それらとセットとなるものではないが杯身は口径9cm前後と小型であるのに対し、墳丘出土杯身は口径11cm前後と比較して大型である。ただし、これらの蓋杯はいずれも外面中心部付近を回転篋削りで仕上げている。器形・法量を寄り所として近隣の窯跡と対比するならば、墓道出土土器は杯蓋つまみの形状が異なるが大野城市牛頸小田浦50-I号窯に、墳丘等出土土器は同小田浦33-I号窯あるいは小田浦40-I号窯に対比できようが、後者により近い。北部九州の須恵器編年ではそれぞれⅤ期(7世紀前半～中頃)、ⅣA期(6世紀末頃)に比定できるものである。一般的に、追葬や墓前祭祀のため墓道では新しい時期の土器が出土し、墳丘からは築造時の古い土器が出土する傾向があるが、これもその一例である。

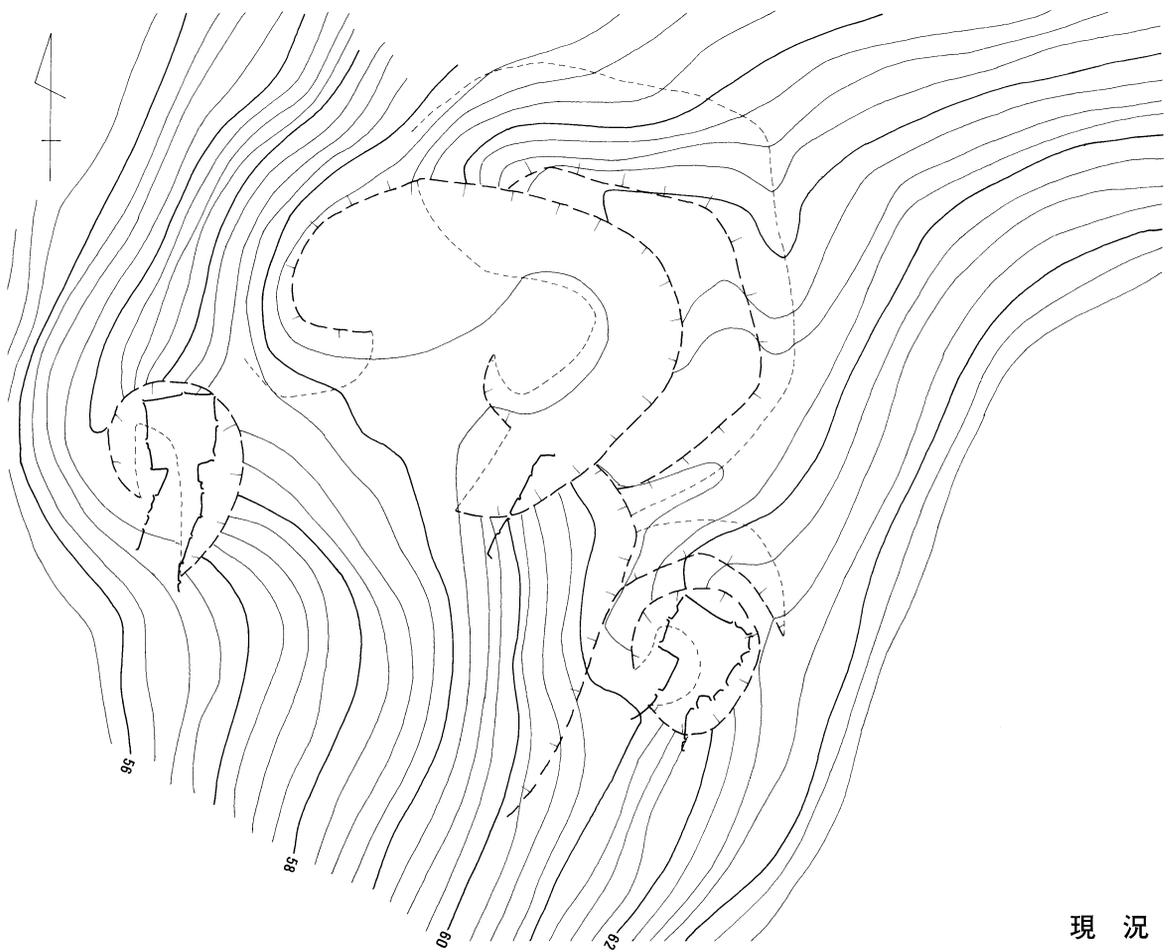
参考文献

大野城市教育委員会「牛頸小田浦窯跡群」
〔『大野城市文化財調査報告書』第35集、1992〕

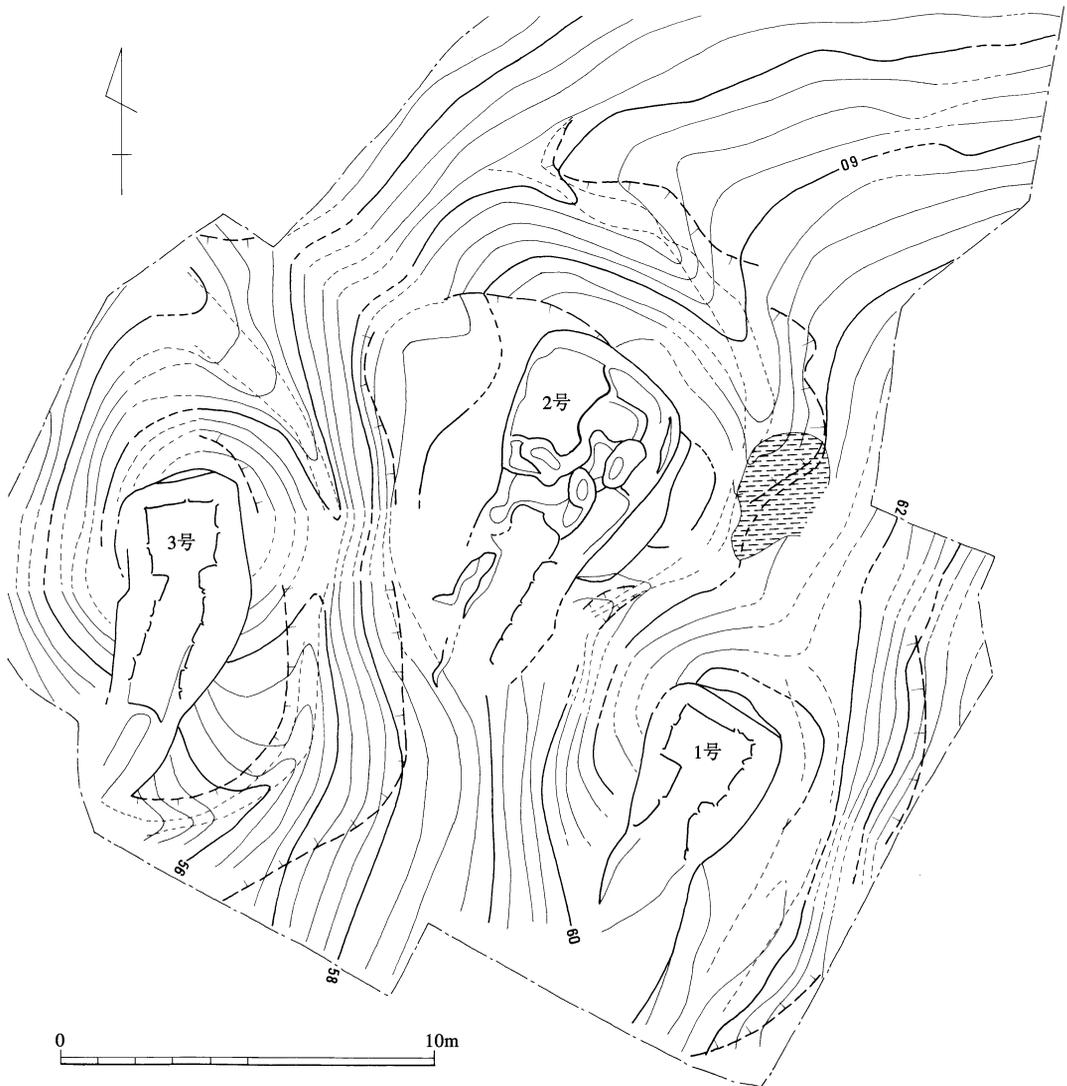
大野城市教育委員会「牛頸窯跡群—総括報告書Ⅰ—」〔『大野城市文化財調査報告書』第77集、2008〕



東トレンチ最下層の硬質盛土



現況



墳丘

第16図 平石V群地形測量図現況・墳丘 (1/200)

2. 観音山古墳群平石V群

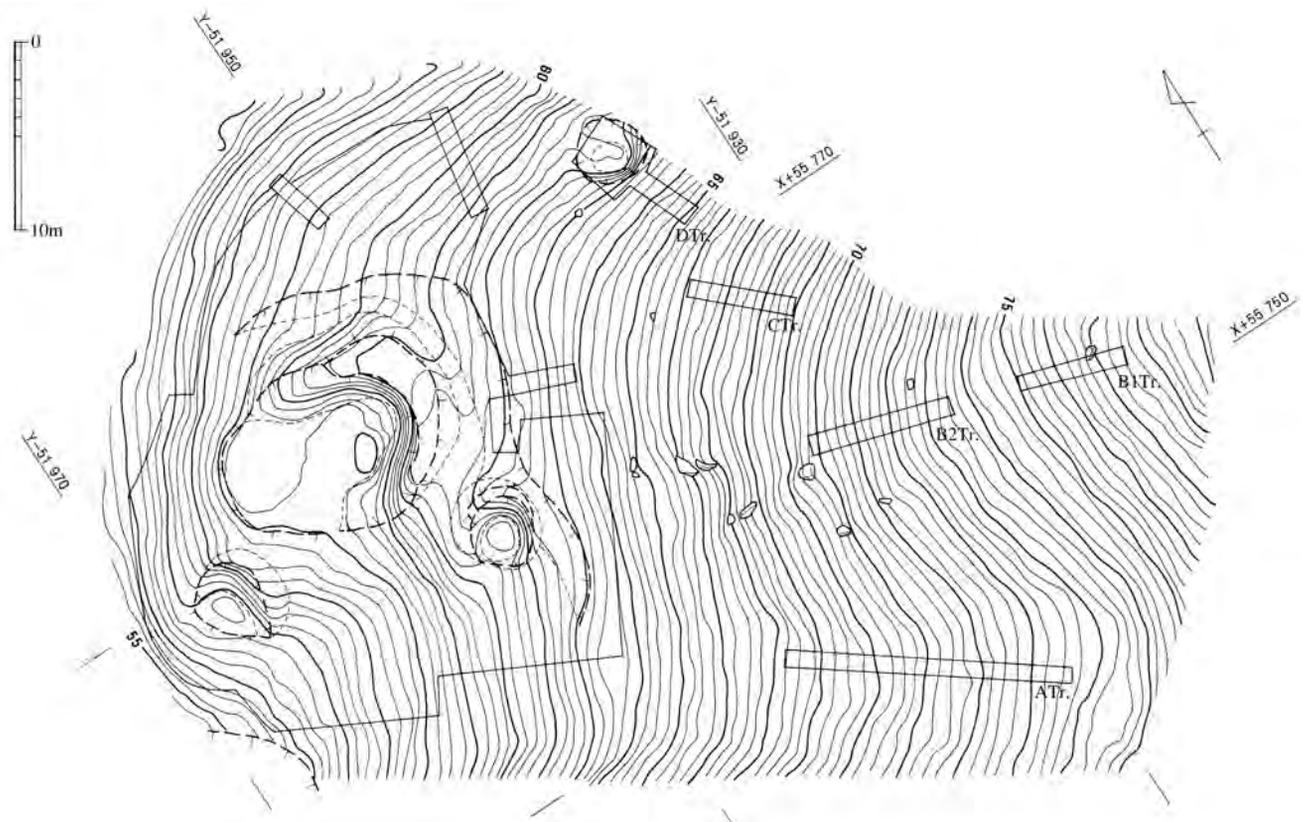
1) はじめに

九州新幹線建設に伴う那珂川町内の発掘調査で最も大規模であった観音山古墳群平石Ⅲ群の調査は平成17年7月から開始し、中に観音山古墳群中原Ⅲ群の調査を挟んで18年の9月までの期間を要した。その後、引き続いて観音山古墳群平石V群の調査に入った。

先述したように、これも浅い小規模な谷を挟んで南側に位置する平石Ⅳ群の調査を那珂川町教委が先行実施し、その終了後に入れ替わるように県教委の平石V群の発掘調査が始まった。町教委の調査時に平石V群の伐採も終了していたため、町教委は両者を併せて空撮及び地形の写真測量を行い、県教委はその成果を譲り受けている。

発掘調査はまず対象地の清掃から開始した。非常な急斜面であるが、町教委調査部分が全面の表土掘削を行っていたため、上下の移動を殆ど必要とせず、横方向に移動して既調査部分に廃棄できたことは幸いであった。その後、急斜面の尾根線や浅い谷部などに試掘溝を設定して遺構のないことを確認し、調査対象を下位斜面の4つの陥没坑に絞った。そのうち、4号墳を想定した陥没坑は遺構でないことが判明し、古墳の総数は3基となった（図版26・27、第17図）。

古墳群は平石Ⅳ群同様、急斜面の下位に続く緩斜面に位置し、上位から順に1～3号墳と名付けた。



第17図 平石V群調査区位置図（1/400）

2) 平石V-1号墳

現況で直径4mほどの陥没坑があり、北側では墳丘の地形変換点も認められた。陥没坑の清掃後、主体部に沿った形でトレンチを設定、掘削した。

i) 墳丘 (図版10~13、第16~18図)

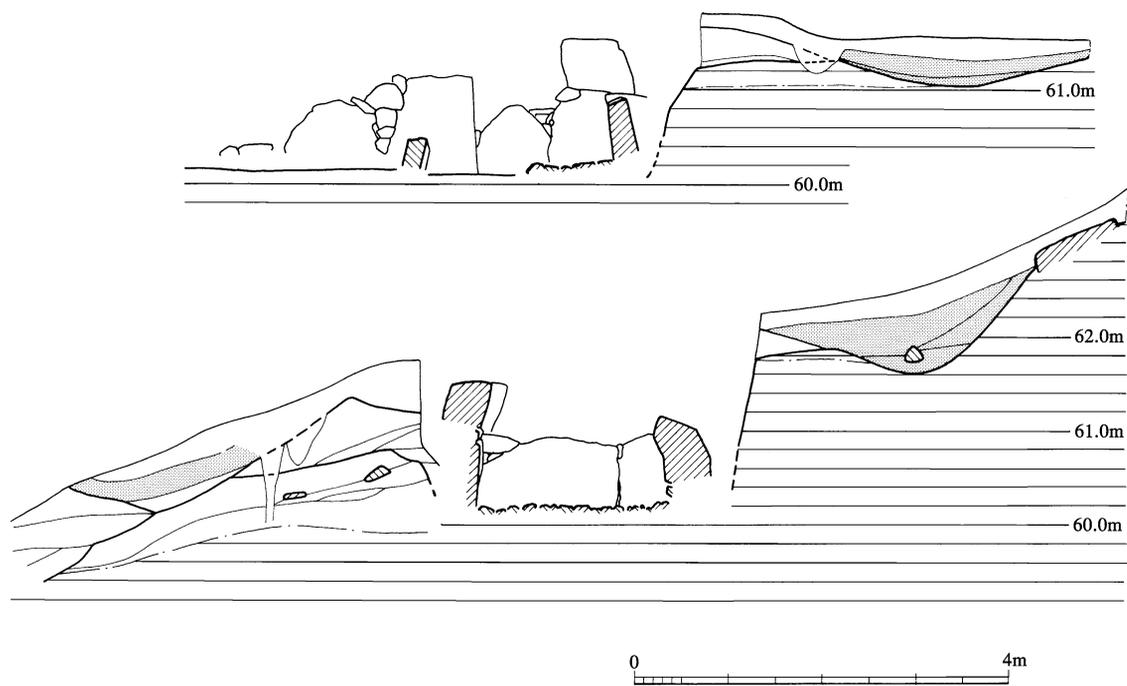
現況では墳丘規模を推し量るのは困難であったが、航空測量では直径5mほどの規模で地形変換点が観察されている。

北Tr. 盛土は薄く、2層に分層できただけだが、下位の層もいわゆる旧地表ではない。根による攪乱を挟んで、北側では黒色系の堆積層からなる浅い周溝が掘削されているため、盛土はその攪乱付近で終わるようである。主体部前面から6.6mほどの規模となる。

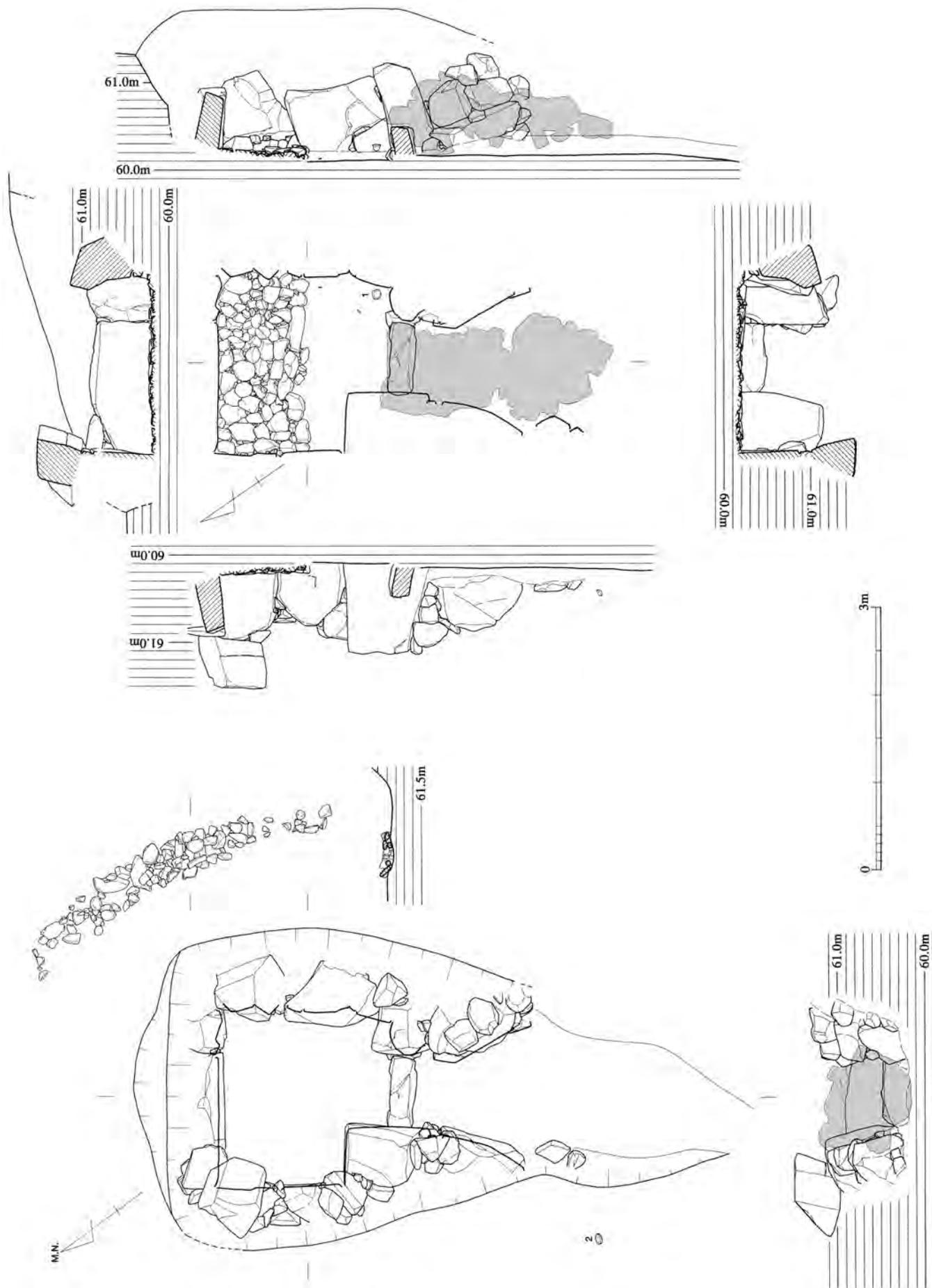
東Tr. ここでも盛土はわずかで、幅2mほどの規模の周溝を確認した。周溝上端は、ちょうど巨石に重なっているが、深さは1.2mほどとなる。

西Tr. 掘削時になかなか明瞭な地山が現れずに苦慮したが、結果的には一部が2号墳盛土を覆って構築されたものであろうと判断している。土層図で地山中の細線は二次(自然)堆積層、西端の西に向かって落ちるラインは2号墳掘形である。1号墳周溝として図示した部分にのみ黒系の自然堆積層が入ることや、2号墳掘形に近接してすぐ東に浅い周溝の痕跡を平面的に確認していることもあり、以上の解釈でよかろう。東西方向で約6.4mほどの墳丘規模となる。

したがって、本来は直径6.5mほどの墳丘に、南を除く三方に周溝を巡らせていたものと復原できる。なお、主体部北東の一部で周溝底に小礫を敷き詰めた様な状態を検出したが、意味は不明のままである。また、墳丘東側では傾斜が比較的急なこともあって、周溝全体を平面的に捉えることはできなかった。



第18図 平石V-1号墳墳丘土層実測図 (1/80)



第19图 平石V-1号墳主体実測図(1/60)

ii) 主体部 (図版11・12、第19・20図)

陥没坑を清掃して検出した。小型の単室横穴式石室で、全長は4mほどである。東壁の石組が終わる付近から南は周溝・掘形上端も不明瞭であった。

石室

平面プランは、一見、片袖式を思わせるが、東壁も袖石を明確に立て据えているので両袖式としてよい。西壁で、長さ1.5m、東壁では約2mとなり、幅は約2mである。

奥壁・西壁に比して、東壁は袖石のみならず配置や組み方が雑である。東壁最北の石材は西壁と同様の大きさであるが、表面に凹凸がひどく、かつ下位も小礫で安定させる必要があるほどに不整形なようである。

床面には北半で良好な状況の敷石が残存していたが、南半には本来的に敷かれてなかった。

羨道・墓道

羨道を有したか確証はないが、袖石前面の石組は規模が小さく、かつ東壁の不安定な石材を見る限りは、天井石をもつ羨道は備えていなかったのではなかろうか。

閉塞

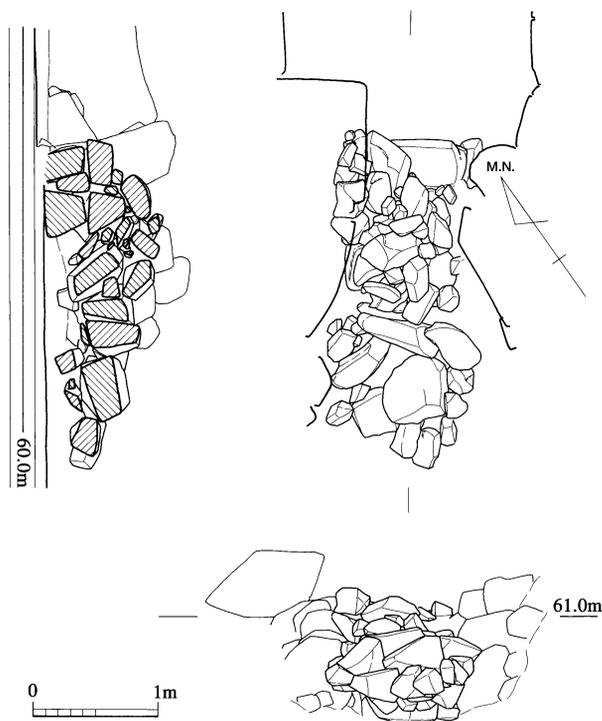
閉塞には比較的大型の石材を使用している。ことに、框石上には整然と横積みされており、その付近では断面図に見るように丁寧に積み上げられている。

iii) 出土遺物

石室内から土師器椀と若干の鉄製品が、そして墳丘・周溝から土器類が出土している。後者の中で確実にこの古墳に伴うと断定できるのは、2に図示した杯蓋で、墓道西側肩から出土している。また、この古墳が最高位に位置することから、より高位にあたる墳丘東側出土土器(3・11)も同じく伴うものとして良いものと思われる。また、西Tr・畦で確認した周溝及び黒色土中から出土した土器(4~9)もこの古墳に伴う可能性は高い。問題は2号墳墓道壁体(貼石)背面の黒色土及び1号墳西裾から出土した土器である。2号墳墓道壁体背面は1号墳周溝にほぼ相当するが、通常石室裏込めにこのように土器を埋める例は殆ど確認されておらず、1号墳が2号墳を破壊して構築されたと考えるならば、これらの土器群は1号墳に伴うと考えるのが妥当であろう。西裾で確認した土器は、2号墳からかなり南に離れていて、1号墳墓道の下位に相当することから、やはりここで紹介する。

金属製品 (図版29、第21図)

図示したのは刀子片で、切先・関付近及び茎先端を欠く。茎には木質が比較的残るが、残存部中央付近が大きく膨らむ。ほかに鉄鏃の茎小片が若干数あるが略す。



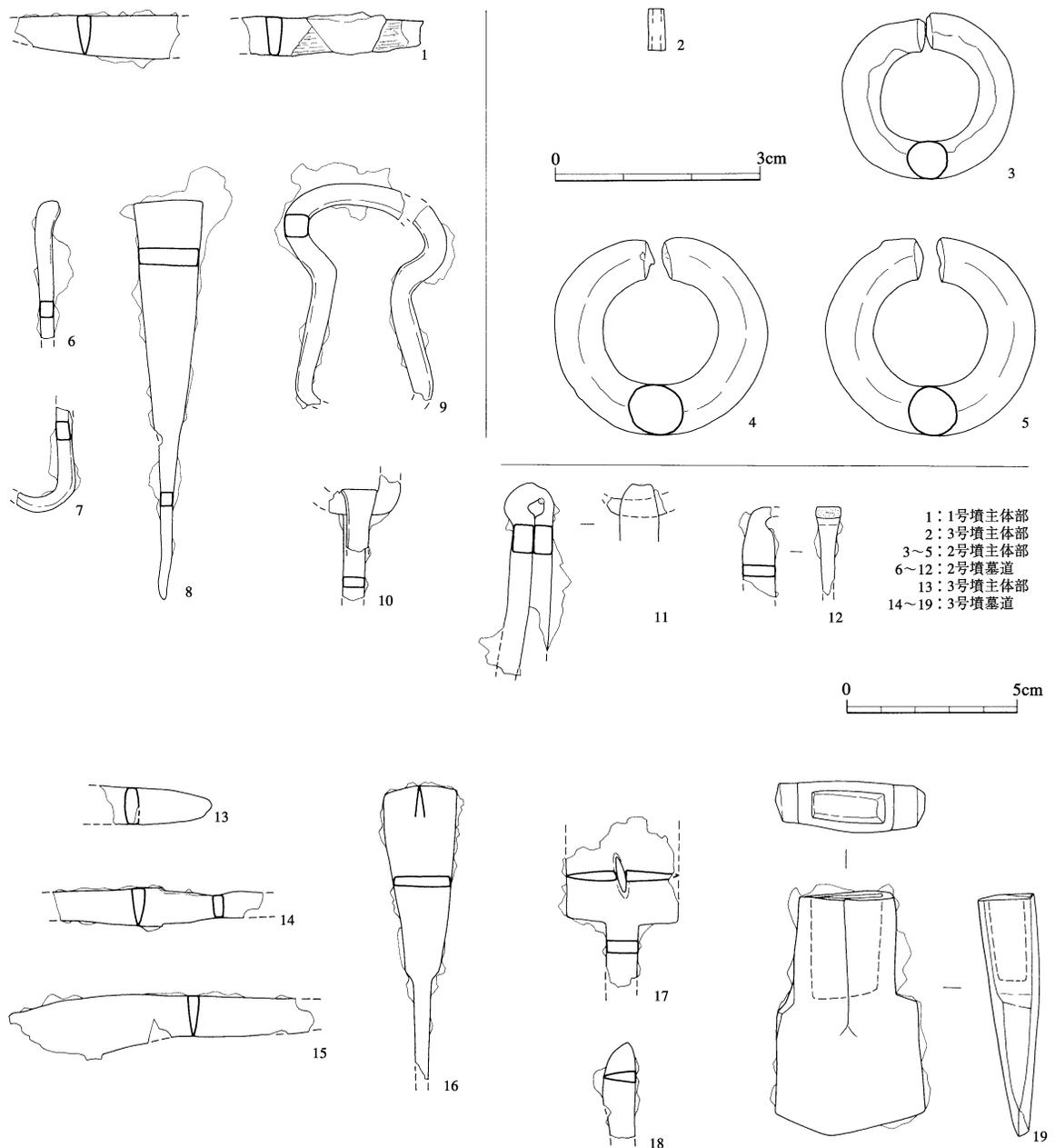
第20図 平石V-1号墳閉塞状況実測図 (1/60)

土 器 (図版29、第22図)

1は石室内南東隅付近から出土した土師器碗の完形品。下半は内彎し、弱い稜をもって反転外反する。器表が荒れているが、外底面には篋磨きが見え、丁寧に作られた土器である。

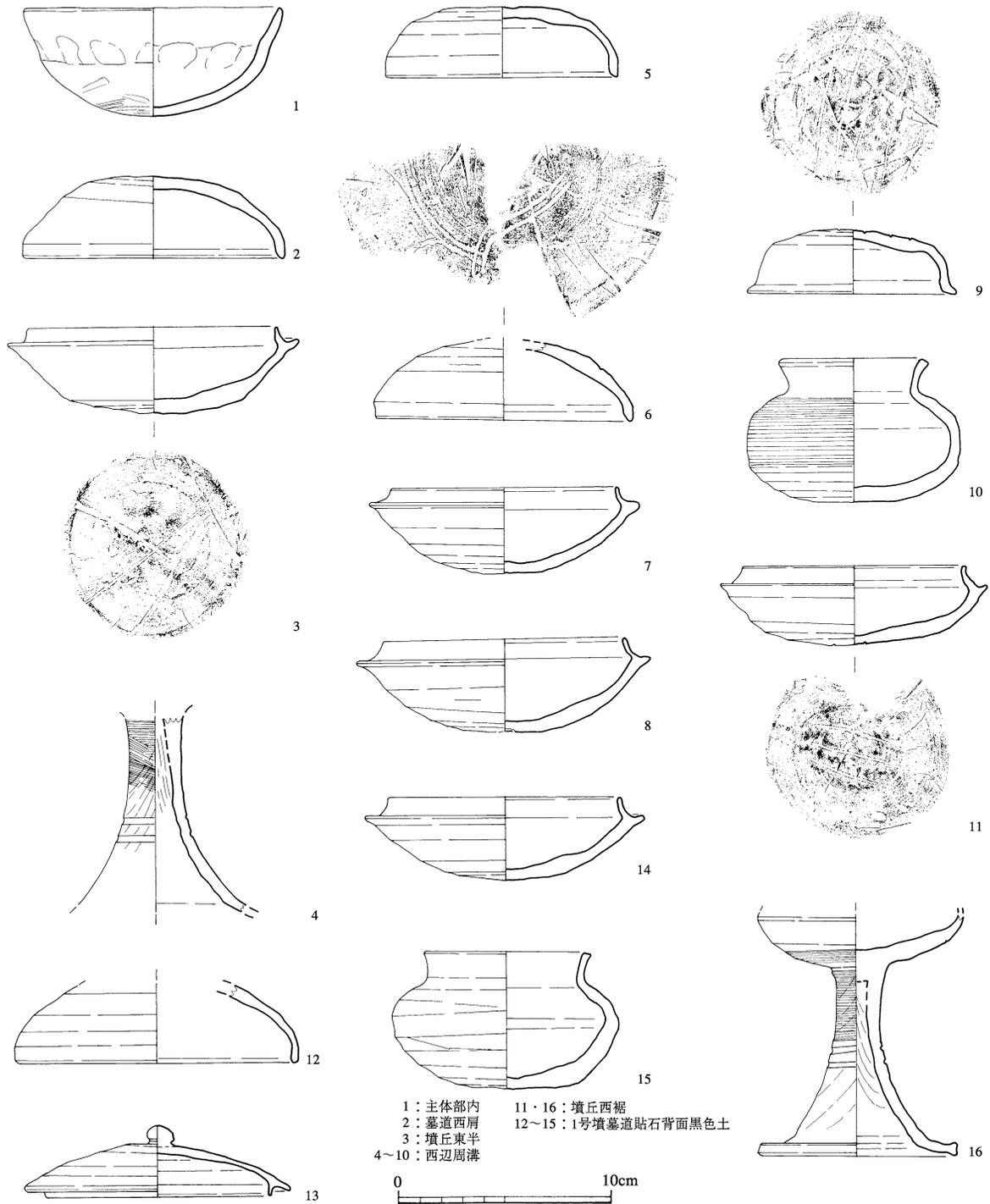
2~16は須恵器。2は墓道西肩から出土した完形の杯蓋。砂粒が多く浮いていて、胎土粗く、作りも粗雑で焼きも甘い。3は墳丘SE区表土出土。2/3の残片で、胎土・作りともによい。

4~10は西Tr.黒色土(周溝)から出土した土器で、他の部位からの出土土器と接合したのものもある。4は「2号墳SE区盛土中」出土土器と接合しているが、「盛土中」を表土あるいは2号墳に掘り込んだ1号墳周溝をも含むと解してここで紹介する。図示部が完存する高杯で、胎土粗く、作りも雑である。中央付近の2条の沈線は始終点が一致しない。5は口縁部の1/4が残存する。これも雑な作りである。6は「2号墳前面」・「2号墳墓道貼石背面」出土品と接合し、3/4が残存する。これも雑



第21図 平石V-1~3号墳出土金属製品実測図 (1/1・1/2)

な作りで焼成も甘いが、天井部に半截竹管を用いた篋記号がある。7も「2号墳墓道貼石背面」出土土器と接合したもので、外面に灰を被る雑な作りの土器。8は「2号墳墓道」・「2号墳墳丘」出土土器と接合し、体部は完存、口縁部は殆どを欠いている。これも粗雑で、焼きが甘い。9も「2号墳墓道」・「2号墳墓道貼石背面」出土土器と接合し、ほぼ完形となる。胎土精良で、丁寧に作られた土器で、天井部にシャープな線で篋記号が刻まれる。10は「2号墳墓道貼石背面」出土土器と接合した小型壺。口頸部は短く、小さく外反し、上下に押し潰されたような体部をもつ。底部周辺は回転篋削り、それ以上頸部付近まではカキ目で仕上げ、外底面を除いて灰を被る。



第22図 平石V-1号墳出土遺物実測図 (1/3)

11・16は西裾出土。11は2/3が残存する。胎土精良で丁寧に作られるが、焼成は甘い。16は杯部の1/2、脚部の2/3が残存。全体に灰を被って黒色化するが、繊細なカキ目が見える。

12以下は「2号墳墓道貼石背面」出土土器である。12は胎土・作りともに良好な土器であるが、焼け歪むため、復原口径には疑問もある。13は「3号墳東」と接合して完形に近くなる。つまみは球形に近く、天井部は丸味に乏しく、かえりは高い。天井部の篋削りは広範に施され、それも含めて調整は丁寧である。胎土は粗い。14は2/3が残存し、胎土精良で、調整は丁寧である。外面に灰を被る。15は口縁部の1/2を欠くが、それ以外は完存する。器形は10に似るが、胎土や作りは粗雑である。

3) 平石V-2号墳

1号墳の北西に位置する。現況で長軸9mほどの巨大な陥没坑があり、排出した土砂が西側に盛られていた。調査の結果、石室は閉塞部とその東壁を遺すのみで、石材はほぼすべて抜き取られるほどに破壊されていた。後述するが、3号墳東辺周溝底から大量の土器類とともに鉄製品が出土しており、それらの一部は2号墳から掻き出されたものではないかと考えている。

i) 墳丘(図版10・11・14、第16・17・23図)

現況で、東辺から北辺にかけて傾斜変換点が認められ、その規模は約12mほどの円を描くようであった。

北Tr. 盛土は掘形からわずか1.8mまでしか認められず、その北には墳丘の一部も覆う黒色系の自然堆積層が約3mの幅で検出された。地山を掘削した幅は約2.5mを測る。盛土端から残存する石材南端までは約10.8mである。

東Tr. こども、主体部掘形から盛土端までの距離は約1.9mを測るに過ぎない。その東は広く黒色土が堆積し、その端部は確認していない。

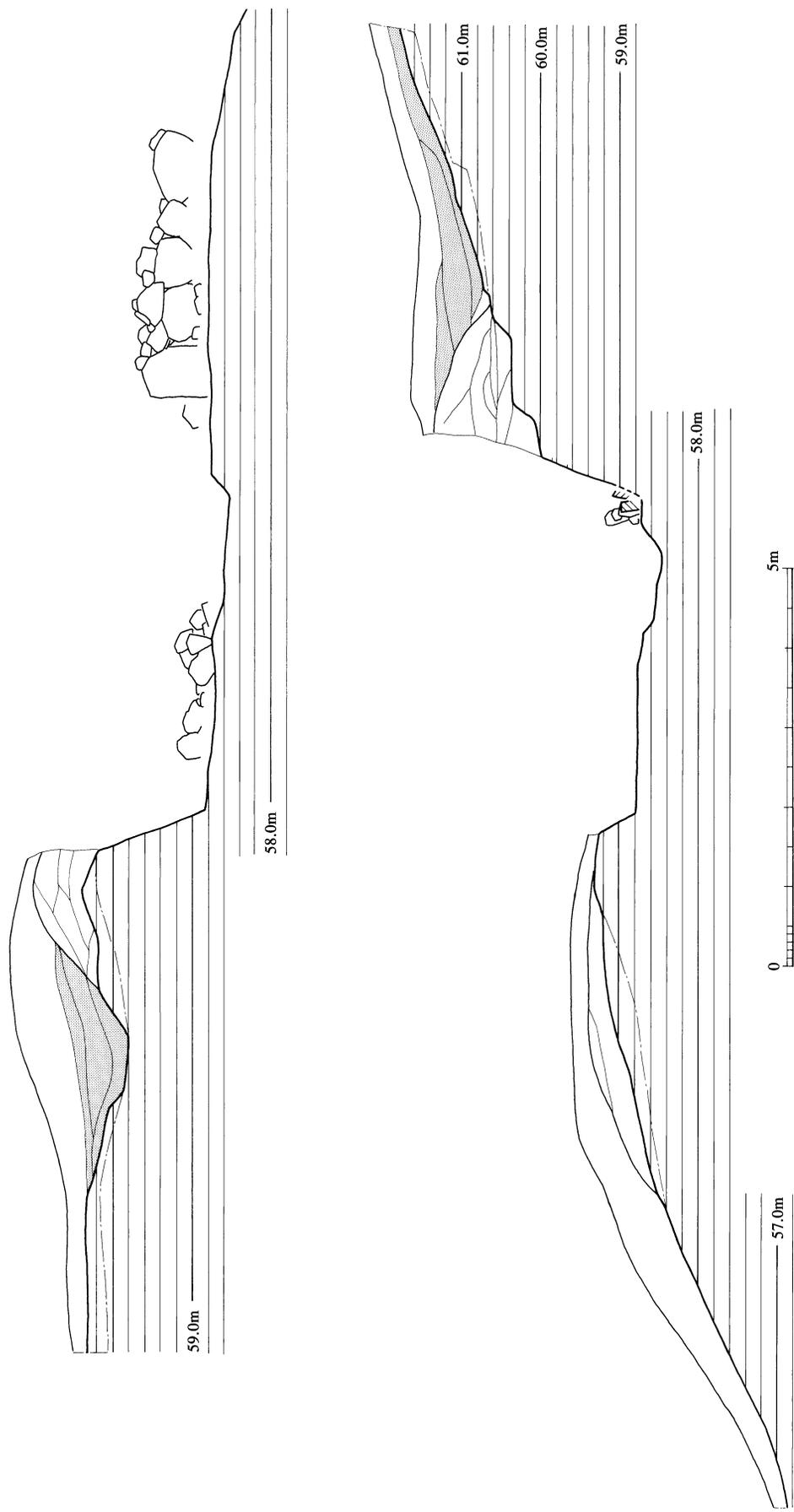
西Tr. 盛土との確信は得ていないが、その可能性のある土層を認めることができた。これが盛土であれば、東西長は11.2mとなる。南北長の数字とも整合することから、この古墳は直径11mほどの円墳であったとしてよからう。東辺及び北辺に周溝を配する。東辺の周溝が一部で乱れるが、その付近は岩盤が露出して、成形していないためである。なお、石材が残存する付近の東側、掘形に近接して周溝の一部が検出されたが、これは上述したように1号墳のものであろう。さらに、墳丘西側は、3号墳周溝が2号墳墳丘に切り込むように掘削されている。つまり、2号墳墳丘は1号墳・3号墳の一部を破壊されているのである。

ii) 主体部(図版10・11・13~15、第24・25図)

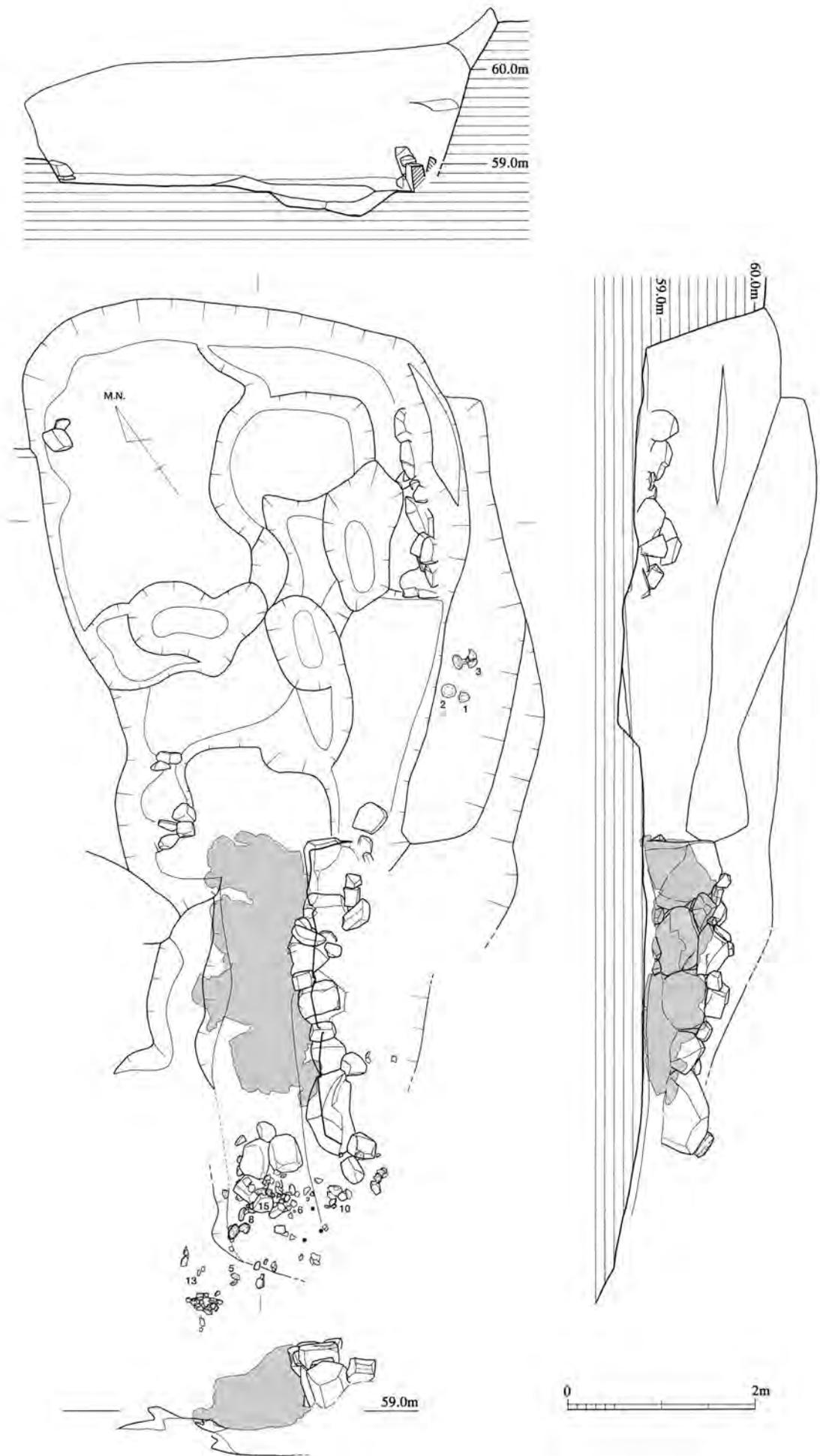
徹底的に破壊され、石材を抜き取られている。

石室

掘形は奥壁付近で幅4.6m、閉塞北端付近で3m余、そして残存する北端の石材から掘形北端までの規模は6m弱となる。その中央やや南よりに東西2か所のやや深い石材抜き跡が見られることから、ここに後室袖石を配した複室構造であった可能性がある。掘形幅が大きく異なる点も、複室構造を想定すれば理解しやすい。他方、その抜き跡が残存する東壁の延長上にあり、閉塞の西に想定され



第23図 平石V-2号墳墳丘土層実測図(1/80)

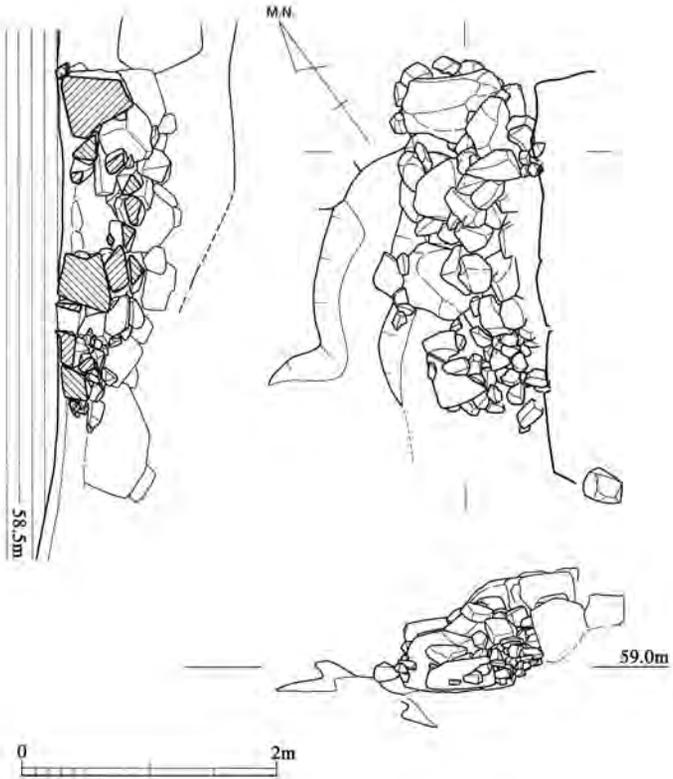


第24図 平石V-2号墳主体部実測図 (1/60)

る西壁の延長上にもあることから、長い墓道をもつ単室構造を推測することも可能である。しかし、残存する石材の状況から見て、ここでは複室構造であったと推測する。

羨道・墓道

残存する東壁は約3.4mの長さを測る。石材の状況を見ると北端の1個が立てられ、その他は横置きである。したがって、残存する北端の石材は袖石として配されたものと考えられる。閉塞が通常框石を先端に構築される例が多いこともそれを補強する。ただ、ここでは框石は使用されていないようである。閉塞北端最下段の石材は框石状に横置きされていたが、高さ60cm弱と巨大すぎる。框石が袖石間に配される通常例からいえば、本墳には框石が用いられていなかったと思われる。



第25図 平石V-2号墳閉塞状況実測図 (1/60)

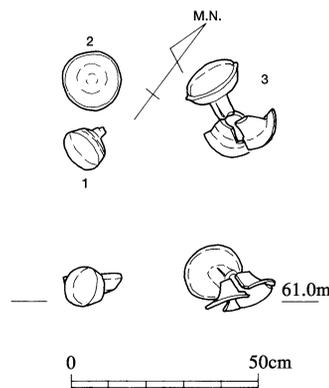
閉塞

最前面（北端）の石材は高さ50cm、幅80cm、厚さ50cmの大きなもので、1mほどの距離を置いて若干小型の石材を地山に接して置く。その前面の小礫は二次的なものであろうが、両者の間は断面図に大型石材が描かれていないものの、平面図で見るとように大小の石材が連続していて、一概に崩落したものとも断じ得ない。2個の大型石材は本来の位置を保っていると考えられる。

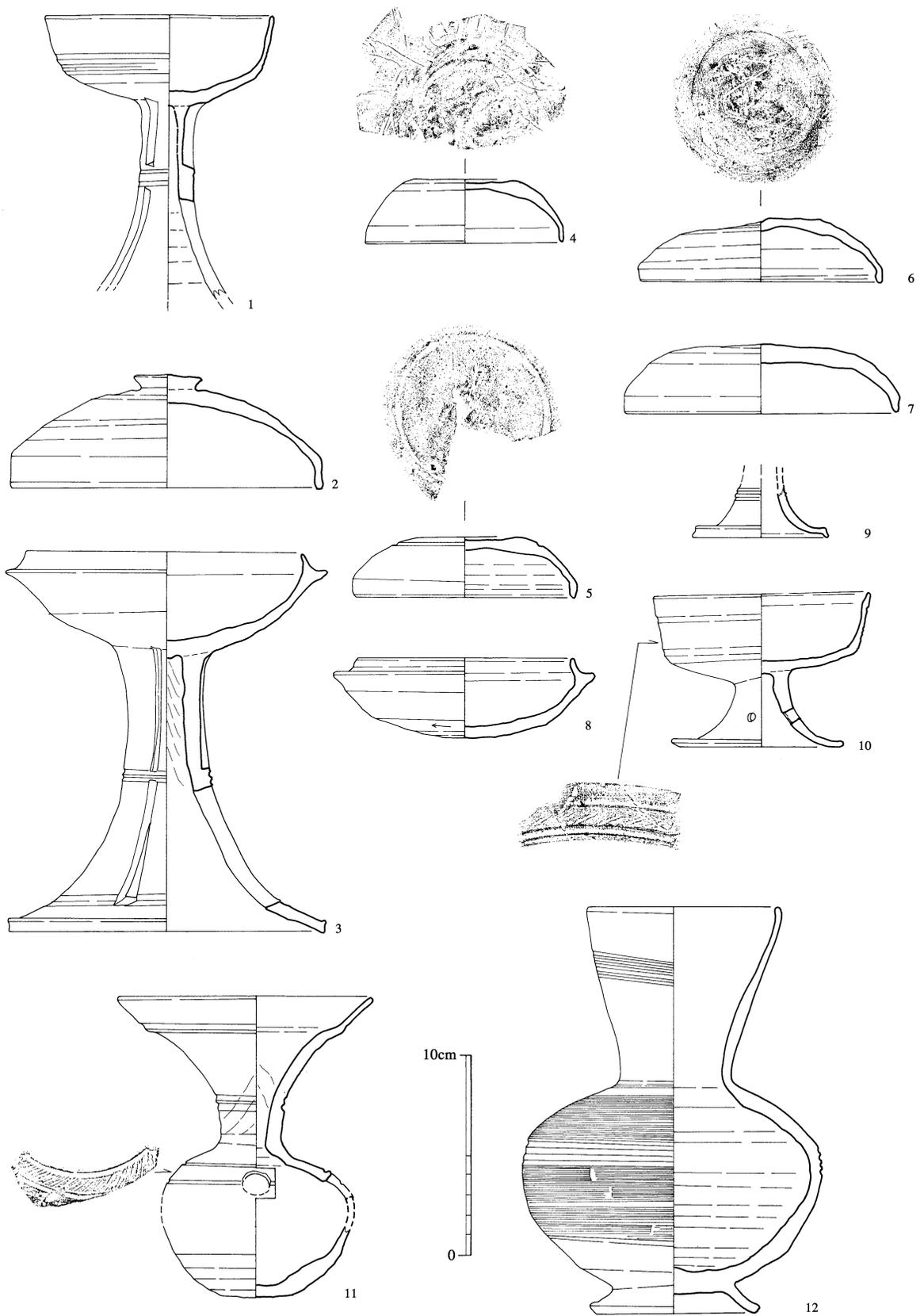
1号墳の様に框石上に閉塞先端を置く例や、後述する3号墳の様に框石から若干の距離を置いて閉塞を配するものがあるが、本墳の様に袖石抜き取り穴から4mの距離を置いて閉塞を置く場合はその間に前室が構築されたと考えるのが妥当であろう。

iii) 出土遺物

上記したように石室はほぼ破壊され、石材の多くが抜き取られていたが、かろうじて埋土中から耳環が出土した。また、石室掘形南東肩付近で墳丘中に埋置された土器群を検出（図版16、第26図）、閉塞前面（南側）の墓道の名残を残す平坦部からは鉄製品や細片化した土器が出土している。閉塞前面出土土器のうち、高位に位置する1号墳周溝などからの出土土器と接合したものは1号墳に帰属するものとし、下位の3号墳周溝などから出土土器と接合したものは2号墳に帰属するものとして取り扱っている。



第26図 平石V-2号墳墳丘須恵器出土状況実測図 (1/20)

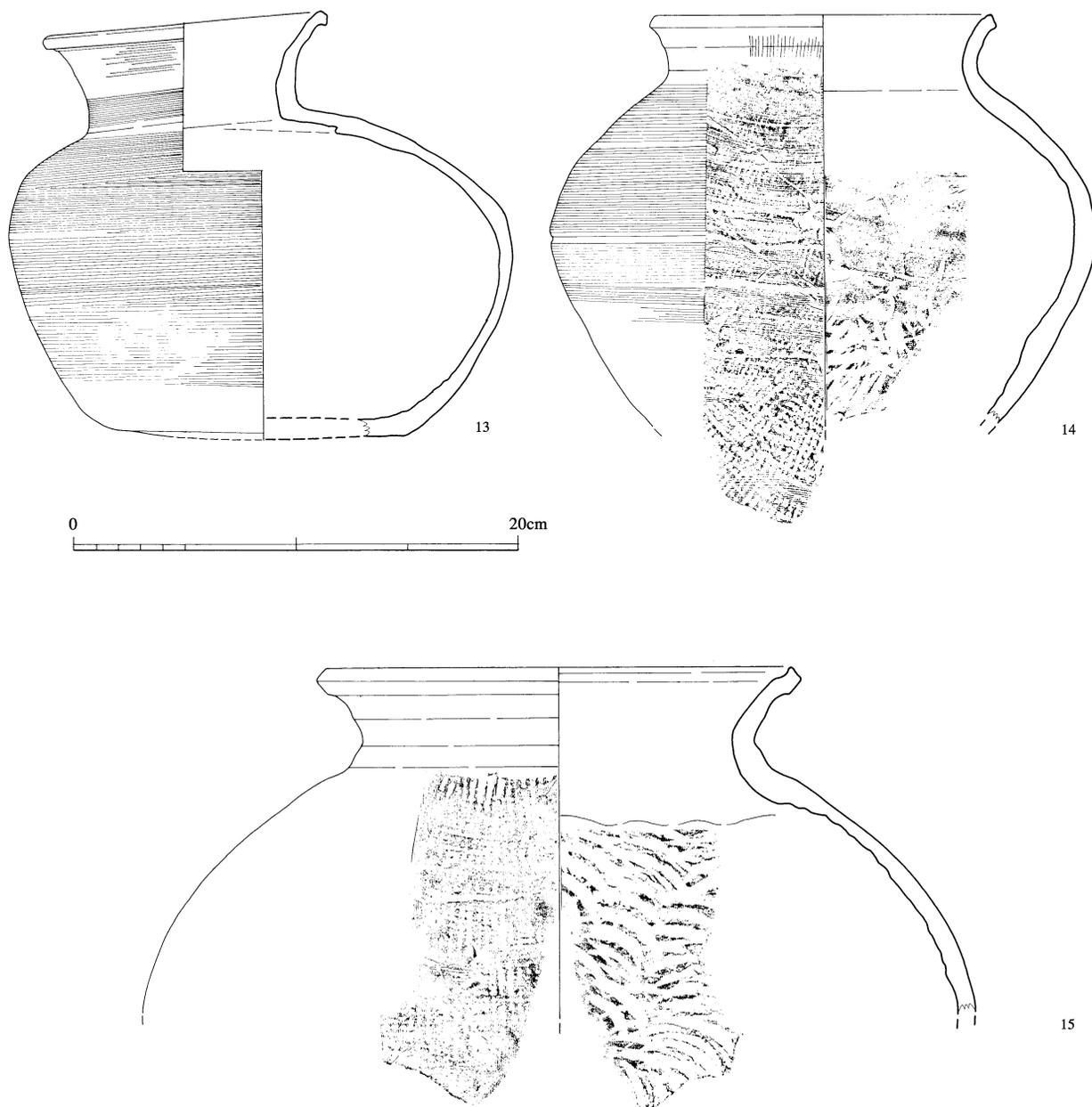


第27图 平石V-2号墳出土遺物実測図1 (1/3)

金属製品 (図版30、第21図)

3~5は耳環で、3は表面の大部分が剥離して緑青が吹くが、内側には黒色化した表面が残る。金色は見えない。4・5はともに22gを測る同大の金銅製でセットであろう。いずれも金がよく残り、一部剥離した箇所には緑青が吹く。小口部に皺が見え、金箔を施したものと思われるが、光沢はIV-1号墳のそれに比して勝り、鍍金と思われるものに遜色はない。

6~12は鉄製品。6・7は釘で、いずれも身は一辺5mmほどの断面方形となる。6の頭部はわずかに屈曲する。8は方頭式長頸鏃で、鏃身に比して茎が短い。関は緩いようで、かつ図左側が欠損していることもあって判然としない。9に図示した鉸具は同一個体かどうかは不明である。断面方形に近い鉄棒を加工する。10も同一個体かも知れない。11は断面長方形の鉄棒を細い鉄棒に巻き付けたもの。12も用途不明鉄器。図上方で彎曲し、彎曲部と下位では直角方向に方向を違えて扁平化する。



第28図 平石V-2号墳出土遺物実測図2 (1/3)

彎曲部の幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る小型品。これらのはいずれも閉塞石前面から出土した。

土器 (図版30・31、第127～29)

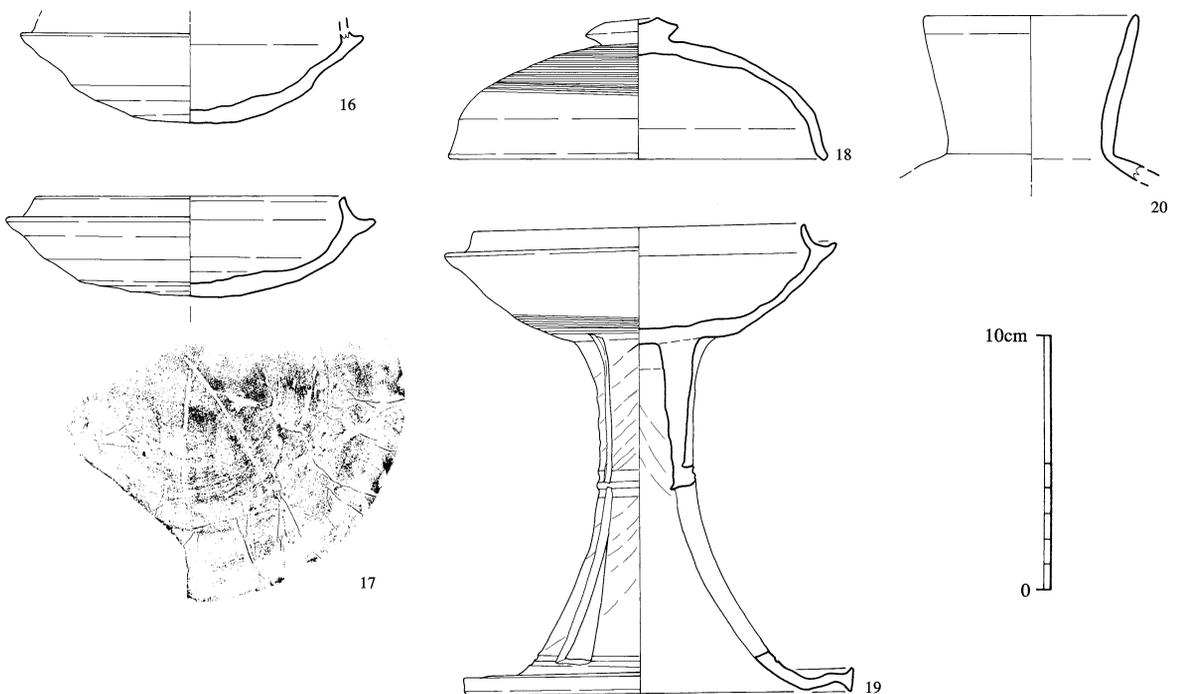
1～3は主体部掘形南東肩付近に埋置されていたものであるが、1の脚部の一部は墳丘NE（北東）区の表土・周溝中から出土しており、埋置にあたって破壊されたようである。脚部中位の浅い2条沈線以上は完存し、2・3と並置されていた。杯部口縁は直立近くに立ち上がり、器壁は薄い。2段透孔を意図するが、上段は器壁中で止まって貫通しない。また、上下段の透孔は正確に配列せず、左下方へ流れるような配置となる。全体に灰被りがひどく、細部は不明。2・3はセット関係の有蓋高杯で、蓋の口端部、高杯受け部の一部を欠くほかはいずれも完存する。この欠損は発掘時の傷のように見える。蓋は扁平なつまみを付し、丸い天井部から直立する口縁へと続くが、全体に丸味をもってシャープさを欠く。高杯は二段透孔で、これも上段は貫通しないが、上下の位置関係は正確である。脚部中位に幅狭いしっかりした沈線を刻み、下段透孔下端付近には浅く不明瞭な沈線を刻む。この2点は胎土精良で、丁寧に造作されるが焼成がやや甘い。

9は閉塞の石組中から出土、4・11・12・14は墓道出土品と3号墳周溝東南部から出土したものと接合し、出土地を特記しない土器は墓道から出土したものである。

4は天井が平坦となる復原口径10cmの小型品で、あるいは身としてもよいのかも知れない。天井部は不定方向の篋削りで仕上げ、口縁部付近の大部分を欠く。5は2/3が残存。天井に繊細な篋記号が刻まれる。6はほぼ完存するが、焼け歪む。篋削り調整で終わる天井部に「乙」字状の篋記号が刻まれている。7は口縁部の1/4ほどが残存する。肉厚となり、焼成が甘く器表が荒れている。これらの杯蓋はいずれも天井部を篋削りで仕上げ、口端部が短く屈曲する点で共通する。

8は完存する杯身で、口径は10.9cmである。底部外面はやや雑な回転篋削りで仕上げ、それ以上は丁寧に横撫でとなる。焼成は甘い。

9は高杯脚部片で、1/2が残存する。胎土精良であるが、焼成が甘く黄白色に近い色となる。10は



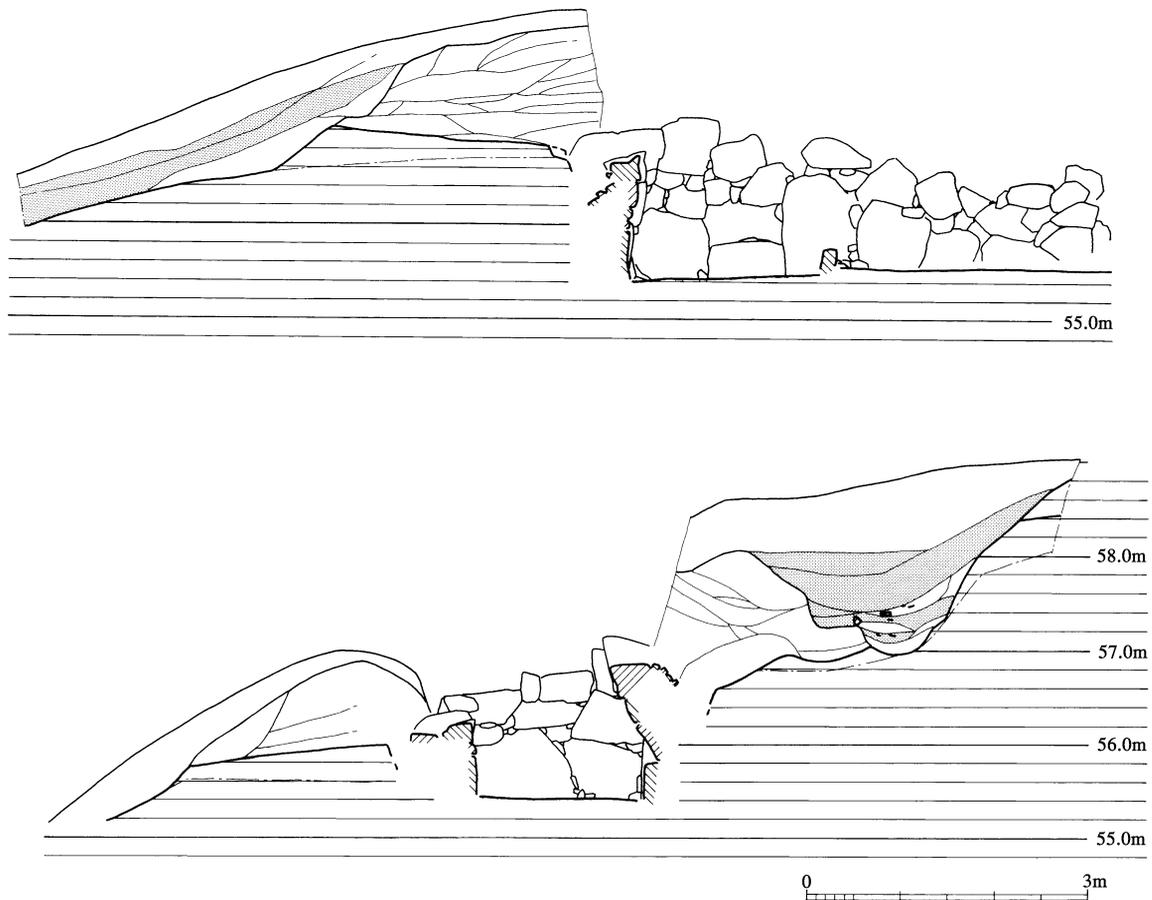
第29図 平石V-2号墳出土遺物実測図3 (1/3)

欠損が多いが全体を窺える。杯部が大振りで、口縁部はほぼ直立して、外面に櫛描刺突文とその上下に2条のごく浅い沈線を刻む。なお、外面底部は回転篋削りとなる。脚部は3個の円孔のほかは装飾がなく、端部も丸く終わる。

11は図上復原した甕で、口縁部は大きく開き、頸部中位には2条の沈線を刻む。肩部には櫛描刺突文を雑に刻んで、その上下を沈線で画した文様帯を配している。体部下半は丁寧に篋削りを行って、底部に小さな平底を作る。12は脚付長頸壺で、口縁部の大部分を欠くが、体部は3/4以上が残存する。頸部の一部及び体部の大部分でカキ目を多用し、底部付近は回転篋削りで仕上げる。なお、体部中位に浅い沈線を3条刻む。焼成時の高温のために焼け歪み、随所で器表が弾け、膨れる。口縁部の一部と高台を含む体部下半が2号墳墓道から出土、その他の部分は3号墳SE区周溝下層などから出土している。

13は底部を欠くが、それ以外はほぼ完存する平瓶。全体にカキ目を多用するが、底部付近は不定方向の篋削りで処理する。胎土精良とはいえず、作りも粗雑で、焼成も甘く生焼けとあってよい。14は小型の甕で、口縁部は短く外反して断面方形に近く仕上げるが、形状が不整となる。体部は叩きの後に雑なカキ目を施し。これも生焼けである。15は口頸部が短いが、端部を小さく加工している。器表に砂粒が多く浮く。

16は「2号墳」と注記されるのみで出土地点が不明である。底部付近はよく残るが、受け部付近は小片となる。胎土精良で、造作も丁寧である。17は東Tr.出土。口縁部の3/4が残存し、作りが雑である。また、焼成甘く灰赤色となる。



第30図 平石V-3号墳墳丘土層実測図 (1/80)

18はほぼ完存する高杯蓋で、これは丁寧に作られ、胎土も良好である。1号墳NW区周溝・2号墳NE区墳丘・同周溝出土品などが接合したものである。19はセット関係にあると思われる高杯で、脚端部を除いてほぼ完存する。脚部は2段透孔で、これも上段は貫通していない。脚中位の2条の沈線は雑で、下段透孔下位の沈線も浅く不整である。これは1号墳NW区周溝、2号墳NE区墳丘表土・東Tr.などから出土したものが接合したものである。

20は平瓶の口縁であろう。胎土精良で丁寧に作られる。これは2号墳SW区の二次堆積土中出土である。

4) 平石V-3号墳

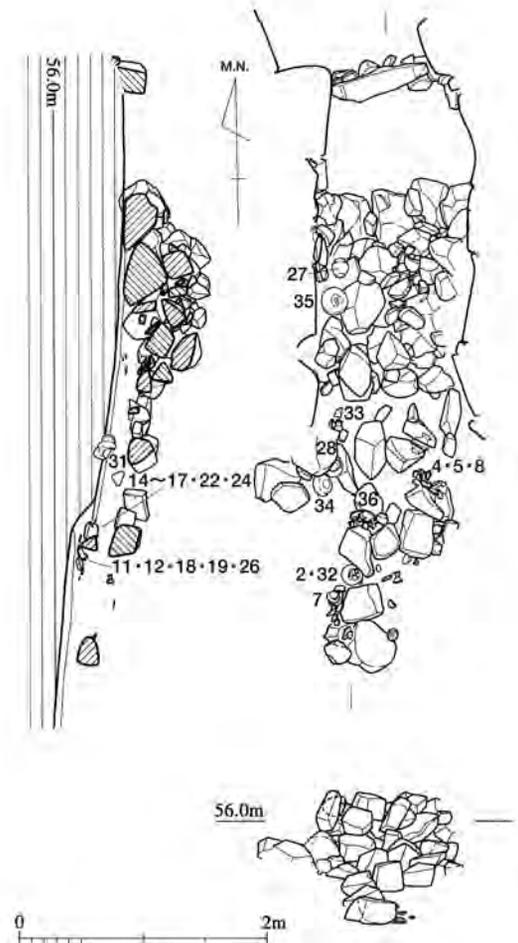
2号墳の南西に位置し、現況で3.5～5mの陥没坑が見られた。調査は陥没坑の清掃から開始し、主体部がある程度判明した段階で主軸に合わせて墳丘にトレンチを設定した。東西トレンチ掘削時に周溝底近くから多くの土器類が見出されたが、発掘の進行に併せて、墳丘南半(前面)の各所からさらに多くの土器類が出土している。

i) 墳丘(図版10・11・17、第16・17・30図)

現況では墳丘規模を知るには至っていない。が、発掘の結果、比較的良好に残存する墳丘を確認できた。

北Tr. 玄室中心部から4.2mの位置で地山を削り出した痕跡を認めることができた。その付近から北側の堆積は黒色系の自然堆積層である。地山は主体部に向かって緩やかに下降するように成形され、盛土は概ね水平に積み上げられている。特色ある土を使用しているのではなく、灰黄褐色の表層に近い土と白色系・赤色系の鮮やかな、いずれも花崗岩バイラン土を使用している。石室前端から地山削り出し下端までの距離は10mである。

東Tr. 表土及び2号墳盛土の二次堆積土が厚いところでは1mほど堆積し、それを除去して幅3m強の周溝堆積土が現れた。上層は灰黒色土、下層は黒色土がレンズ状に厚く堆積するが、床面付近では灰褐色土・灰黒色土・黄褐色砂質土などに細かく分層できる。また、後述するように床面付近では大量の土器群とともに鉄器なども出土している。土層では周溝最深部から0.2mほど高い段が墳丘側に設けられている様子が観察できたが、この段は平面的には確認できていない。盛土は石室中心から3.3mの地点から始まる。なお、このトレンチの東端で2号墳盛土を

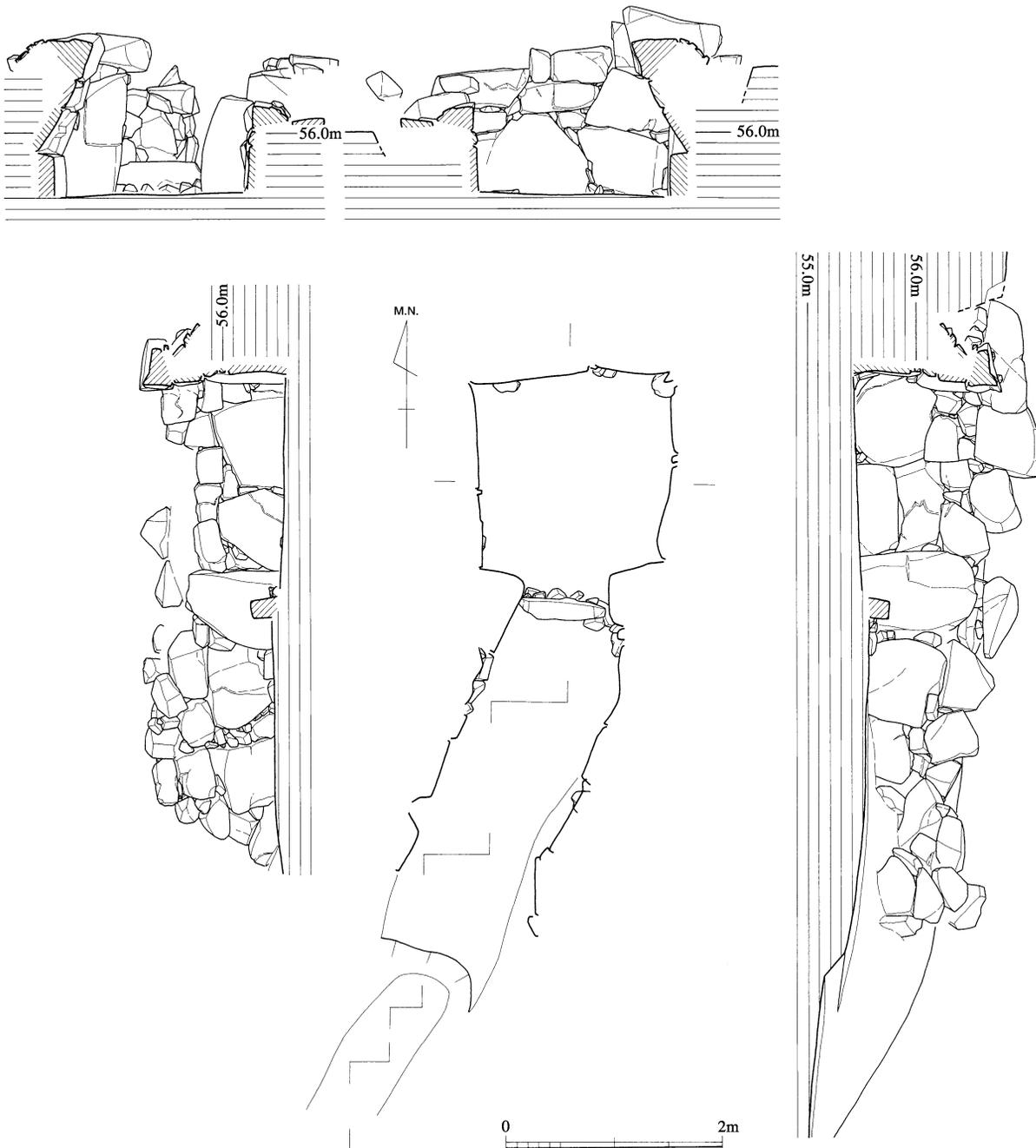


第31図 平石V-3号墳閉塞状況実測図
(1/60)

一部確認している。

西Tr. 墳丘中から礫が現れたために土層を連続的に図化・観察できなかった。それもあって非常に単純な土層図の作成で終わった。また、墳裾付近では二次堆積層のように見える土層があるが、調査時点も解釈を迷ったが、地山成形した範囲に収まることから盛土と考えてよいのであろう。この裾から石室中心線までの距離は3.9mを測る。

以上のことから、3号墳は南北長10m、東西長7mほどの円墳に復原できる。



第32図 平石V-3号墳主体部実測図 (1/60)

ii) 主体部 (図版19・20、第31・32・34図)

先述したように大きな陥没坑があって、それを掘り下げて主体部を確認した。なお、発掘時に散乱した敷石が検出されたが、それも併せて除去している。

石室

両袖式の単室横穴式石室で、平面プランはほぼ正方形となり、腰石に使用された石材はほぼ正確に配列されている。玄室長は約1.8m、幅は奥壁で1.8m、袖石付近で1.6mとわずかに幅を減じる。高さは1.7mが残存する。

羨道・墓道

石室と大きく主軸を変えて3mほど石組が延びるが、東壁が幾分長くなっている。現状では西壁が比較的整っているのに対して、東壁は土圧で押されたようで内傾して石材間にも空隙が目立つ。石組の南端からさらに0.6mほどの床面には明瞭な段を掘り込んでいる。

閉塞

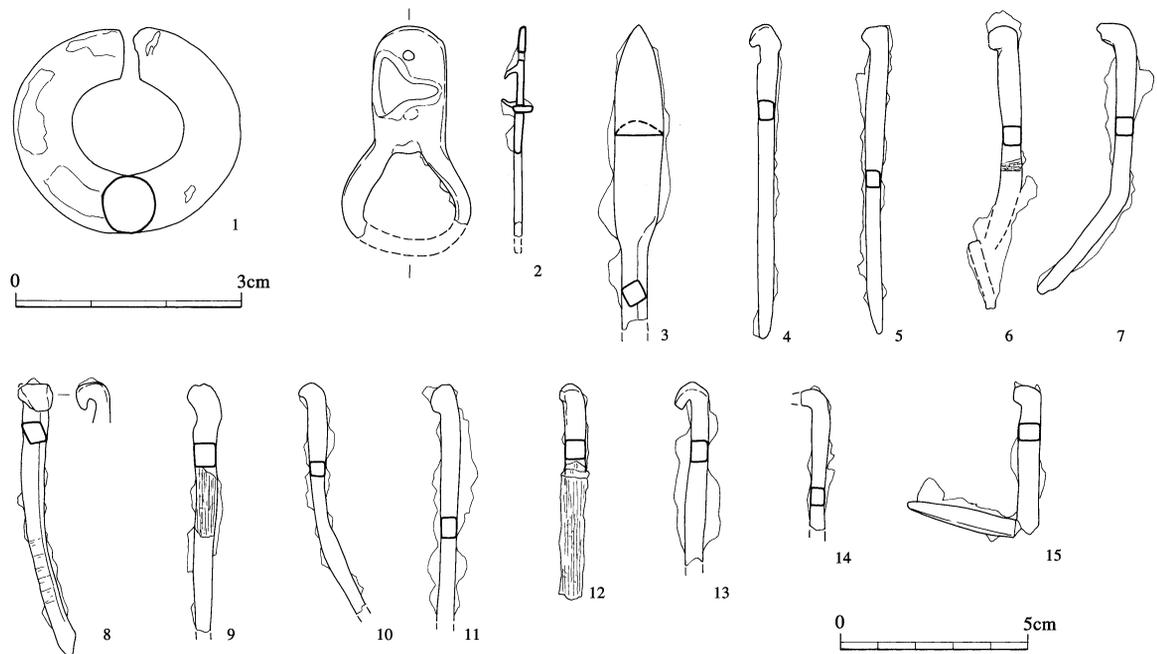
框石から0.6mほどの南に閉塞の先端が位置する。平面図では1.6mの範囲で閉塞石がまとまっているように見えるが、断面図を見ると最下位の石材が接地しているのは3列目までで、それ以南は崩落したものと分かる。本来の閉塞石は1.3mほどの範囲で築かれていた。

iii) 出土遺物 (図版31~38、第12・13図)

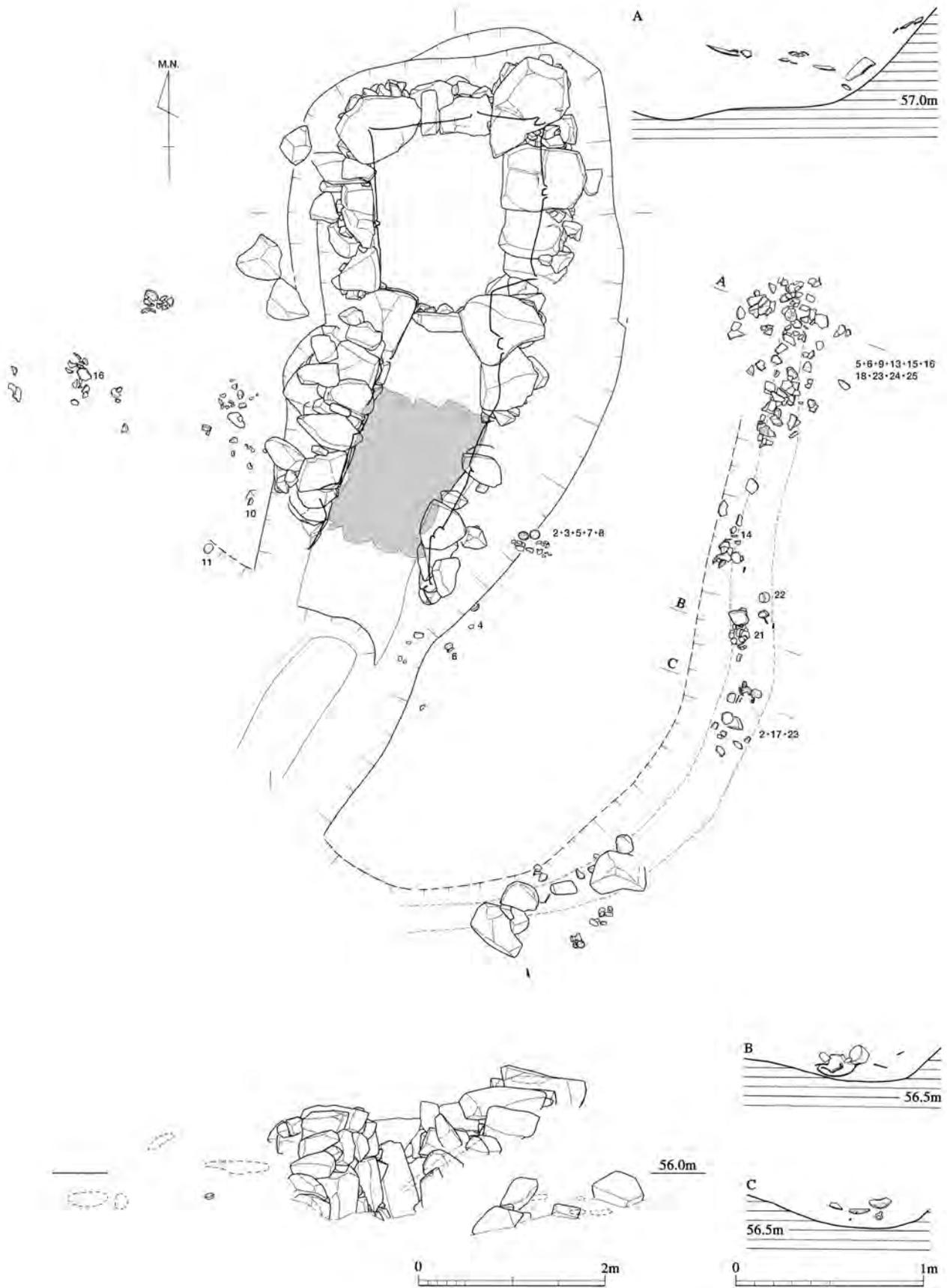
この古墳では墓道・墳丘上・盛土中そして東辺周溝から多くの土器類が出土している。ただ、先にも記したように、東辺周溝からの出土品がすべて3号墳に伴うものとは考えられない。2号墳墓道出土土器との接合例があり、耳環・鉄器などが出土しているからである。

玉類 (図版30、第21図)

1点のみ確認した管玉で、全長直径2.5mm、長さ6mmの小型品で、両端に見える孔は径に比して大きい。青みを帯びる碧玉製であろう。玄室攪乱中から出土。



第33図 平石V-3号墳周溝出土金属製品実測図 (1/1、1/2)



第34図 平石V-3号墳主体部及び周溝実測図 (1/60、1/30)

金属製品（図版31、第21・33図）

第21図では13に示した刀子片以外は墓道からの出土である。13は茎の先端であろう。丸く終わる。14は両関となる刀子。15は図左半分が錆びて大きく膨らんでいるが、切先が残存するかも知れない。良好に残存する部分では刀子の形状を遺す。

16は鍔身が断面長方形となり、先端に刃部をもつ方頭形長頸鍔で、関をもつようである。17は破損が著しいが、中央付近の透孔ははっきり分かる。孔の配置は乱れる。18も小片だが、図のように復原してよいだろう。

19は小型の有肩鉄斧で、全長約7cm、重量は106g。袋部は整った長方形を呈し、とじ合わせ部分も造作が丁寧になされて微かに見える程度である。刃部は両刃のようであるが、形状が乱れ、先端も潰れるように見える。

第33図に示した金属製品は東辺周溝下位から出土したもの。

1は剥離が見られるもののなお比較的良好に残存する耳環だが、全体に黒色化し、金色はごく一部で観察できるだけである。重量は18g。当初は2号墳出土の3に色や大きさが似ているように思っていたが、大きさで若干勝り、重量は随分異なっている。

2は飾り金具で、表面にわずかに金が残る。上方に径2mmの孔と鉤が残存し、2個の鉤で止められたものである。棺を装飾したものか。

3は柳葉形鉄鍔で、片丸造り。鍔身が大きく膨らんでいる。

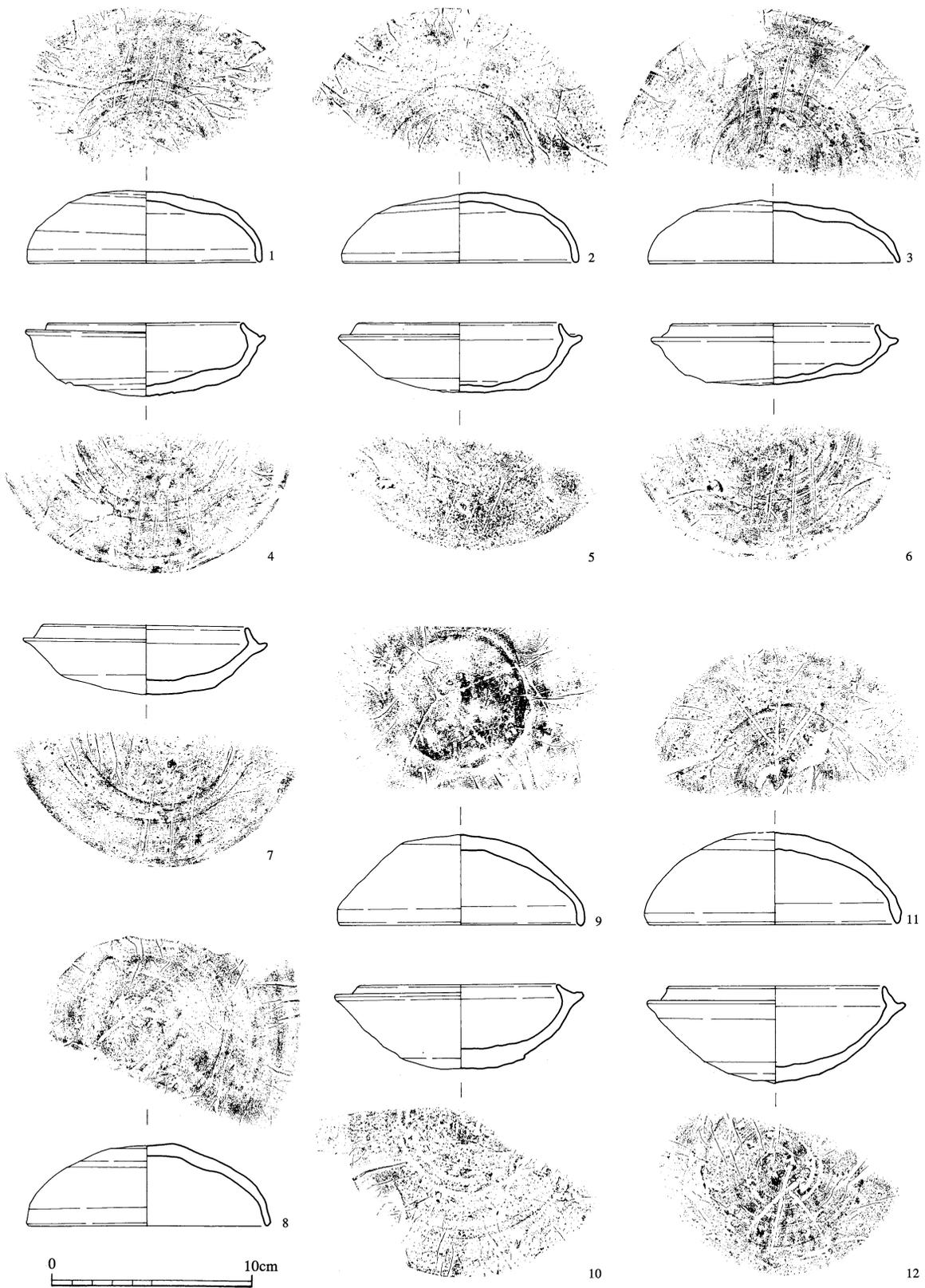
4～15は釘である。全体が残存する4・5では全長8cm強。頭部はいずれも敲かれて曲がるが、曲がり具合に強弱がある。身はいずれも5mmほどの方形となる。縦位あるいは横位に木質が錆着するものがある。これらの鉄釘は当然木棺に使用されたものであろうが、出土状況としては床面近くで散乱していて、本来の在り方を示すものではない。埋葬部以外からは出土しない耳環の出土や、墳丘の状況も併せ考えるならば、3号墳築造時あるいは周溝が掘削時の状況を示していた築造間もない時期に2号墳主体部が破壊され、内部が掻き出されたものと思われる。古墳の破壊—石材抜き取りが目的であれば1・3号墳も同様の被害を受けたはずであろうが2号墳ほどの徹底した破壊は被っていない。1・3号墳築造時の破壊といった想定が最も蓋然性が高いと考えている。

土器

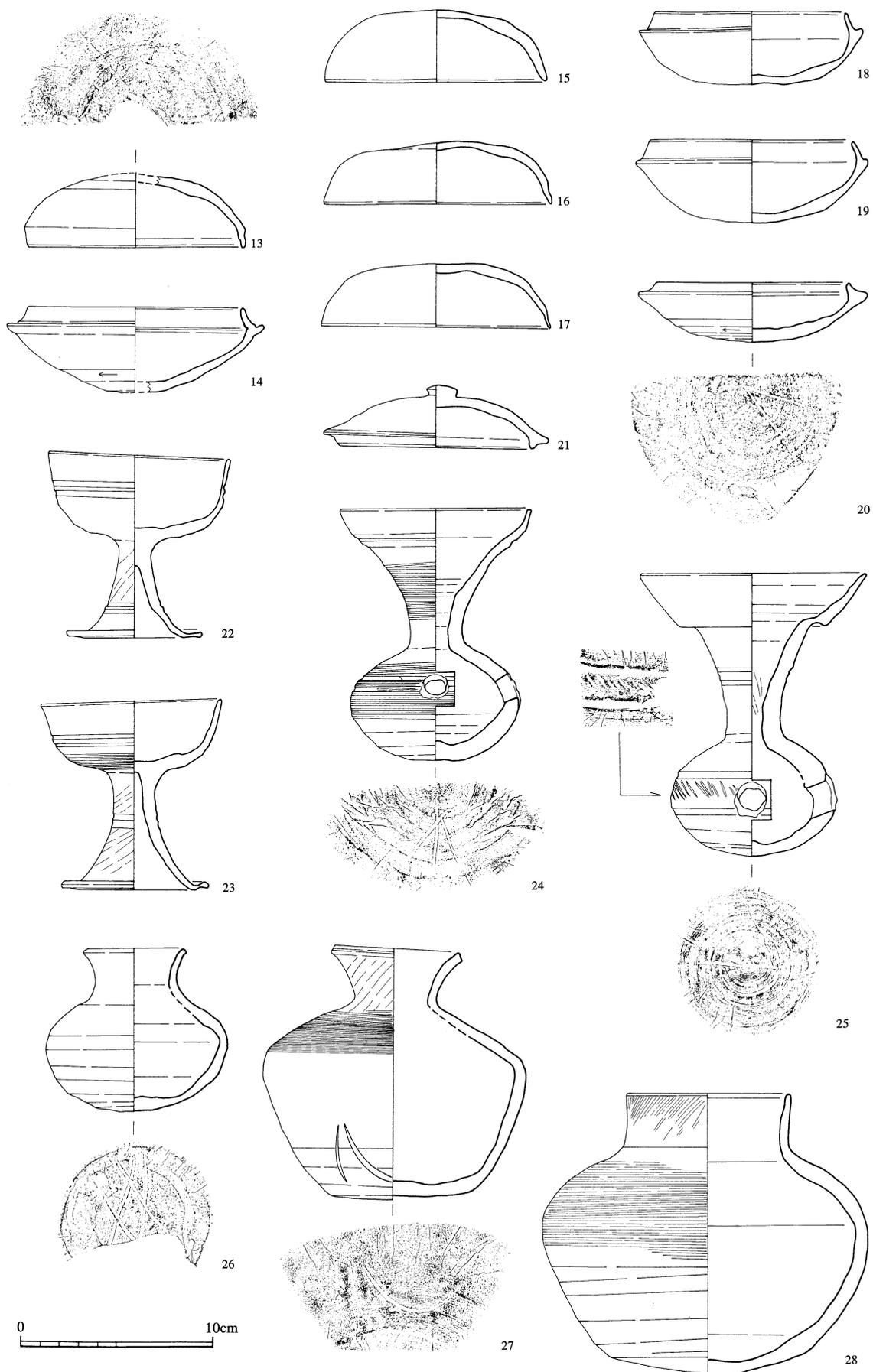
多くの土器が出土しているので、記述の便宜上、墓道・東辺周溝・墳丘（盛土上）の各所に分けて配列、説明を加える。

墓道出土土器（図版31～37、第35～39図）

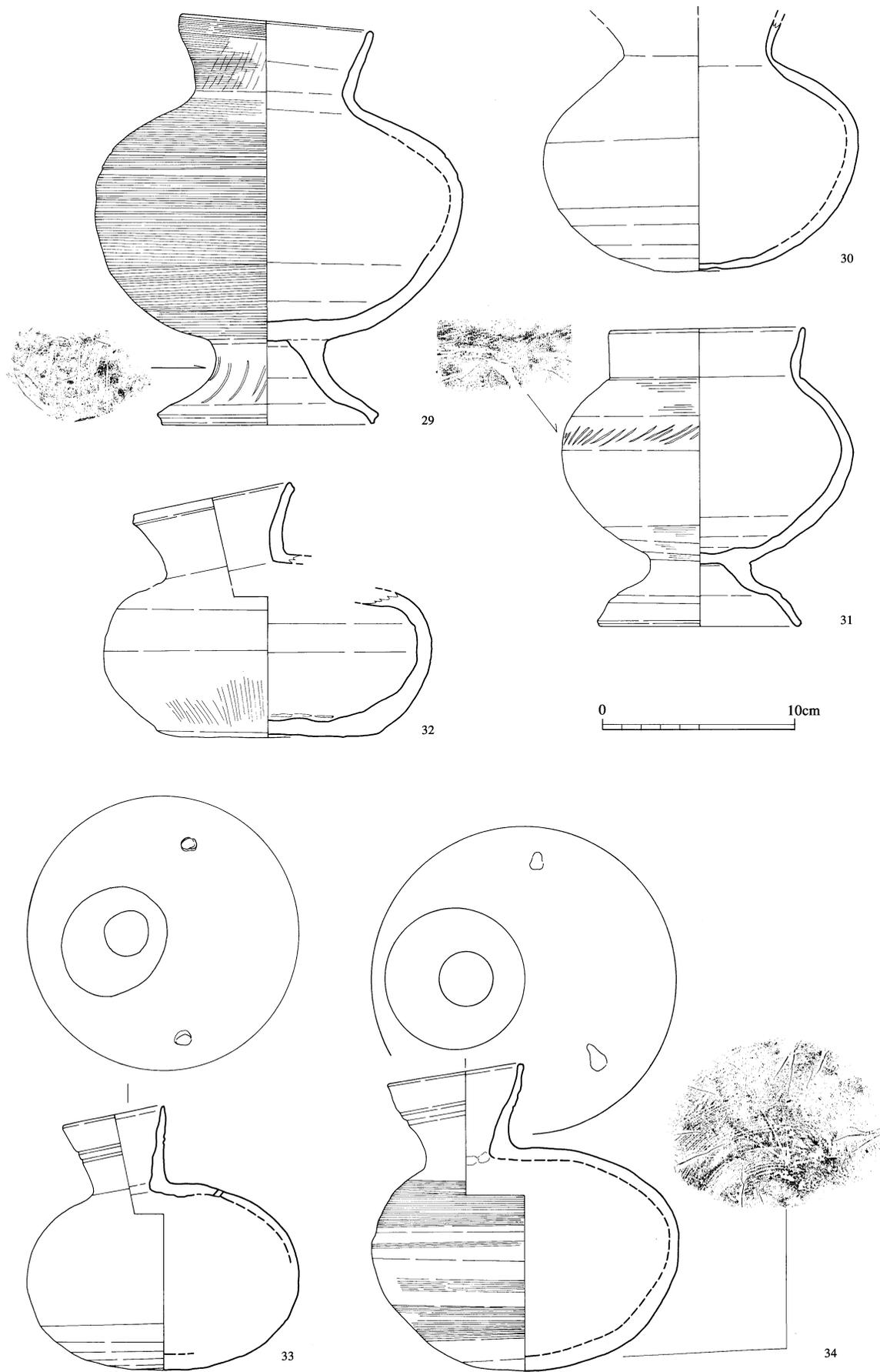
1～7は焼成時に焼け歪み、緑色の自然釉が部分的に付着、3～4本のシャープな平行線を刻む篋記号などの特徴が一致するもので、図で組み合わせたものが必ずしもセット関係にあるものではない。3が2/3の残片であるほかは、いずれも完存またはほぼ完存する。身は口径10cm前後の大きさでほぼ均一、蓋は同11.5～12.6cmとばらつきがある。ほかの蓋杯に比して高さが低い点も特徴である。いずれも丁寧に造作されている。8は口縁部付近で1/3が残存する。胎土精良で、丁寧に作られる。口径12.2cm、器高4.1cmを測り、先の一群に比して丈高となる。9は口縁部の1/3が欠損。長石が多く器表に浮き、天井部外面が煤けている。天井部内面には微かに赤色顔料かと思われるものが付着し、本来の用途に反して火にかけられたようである。天井部外面は篋切りの後に軽く撫でて仕上げるようだが、小さな粘土の盛り上がりが残る。また、平坦に近い天井部の中心から外れた位置に繊細な線で篋記号が刻まれるが、その終点は口縁部近くに達する。10は被熱していないので一見別物のよ



第35图 平石 V-3号墳出土遺物実測図1 (墓道出土土器、1/3)



第36图 平石V-3号墳出土遺物実測図2 (墓道出土土器、1/3)



第37图 平石V-3号墳出土遺物実測図3 (墓道出土土器、1/3)

うであるが、よく見ると長石が多く浮くことや底部外面を篋切りして後に雑な仕上げで終わる平坦な面とする、中心を外れた平坦な面の一端から受け部近くまで細い線で篋記号を刻むなどの共通点があり、本来セット関係にあったものとして間違いない。11・12も胎土や技法、篋記号などからセット関係にあるものである。これも砂粒が器表に多く浮き、天井部・底部外面の中心付近に回転篋削りを施すが、砂粒が多いことから粗雑に見える。紫味を帯びる色調、3本の太い線を組み合わせた篋記号も共通し、いずれもほぼ完存する。

13は1/2ほどが残存、焼け歪み、外面に灰を被る。14は1/4ほどの残片で、胎土粗く、仕上がりも粗雑である。この2点は墓道と東辺周溝からの出土片が接合したものである。

15～21は酸化炎焼成されたものだが器形・調整技法は須恵器と同様である。15はほぼ完形で、器表が荒れるが天井部外面に回転篋削りが見える。全体に灰黄褐色であるが口縁部付近が部分的に赤変する。16は1/2が残存。これも器表が荒れて細部は不明だが、黄褐色を基調とする中で外面が部分的に黒変するようである。17も1/2の残片で、天井部外面に篋削りが見える。淡灰色を呈するが、口縁部付近の一部が赤変する。18はほぼ完存し、器表が荒れている。黄白色～灰黄色を呈するが、受け部付近が部分的に赤変する。19は3/4が残存。黄白色であるが、外面が赤変する。20は先の2点に比して立ち上がりが短く、器高が低い。1/4の残片で、灰黄色～暗褐色となる。21は出土地点を特定できないが、「墓道床付近」と注記がある。つまみは磨滅して器表も荒れる。黄白色を基調とするが、部分的に赤色顔料かと思われるものが付着する。

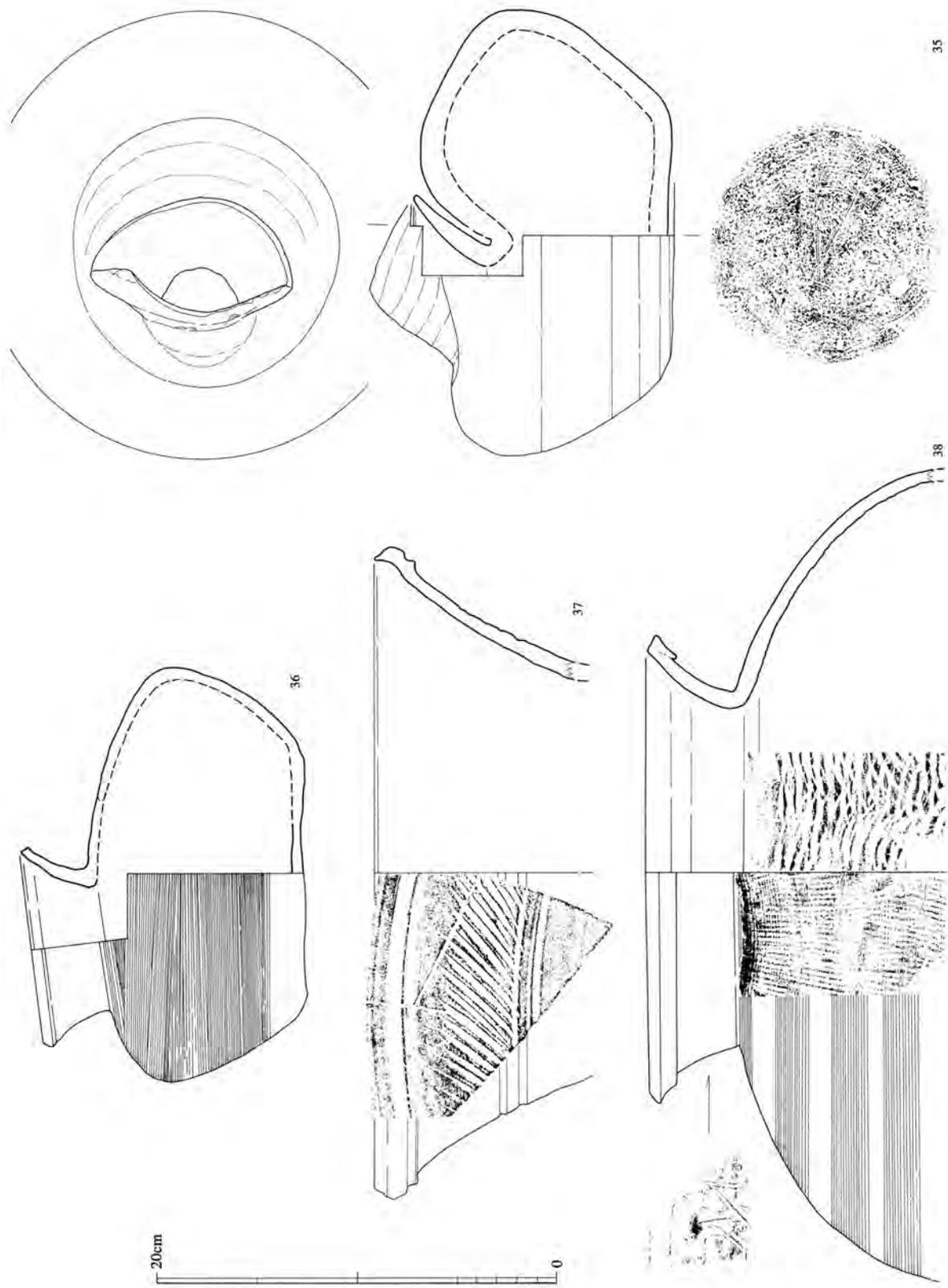
22は杯部がほぼ完存、脚端部は小片となる。口縁部は弱く外反するがほぼ直立に近く、中位に甘い沈線を2条刻む。脚部も中位やや下方に浅い沈線をやはり2条刻んで装飾とする。脚端部は反転して小さく肥厚する。焼け歪んでいる。23は杯部が1/2、脚部がほぼ完存する。杯部・脚部の沈線はこれも非常に甘いものである。

24・25は甕。24は口縁部が短く、開きも小さい。頸部・体部上半をカキ目で仕上げ、円孔付近の2条の沈線は浅く、完周しない。体部下半は丁寧に篋削りを行う。25は口縁部が長く、大きく開く。頸部の2条の沈線は非常に浅いものだが、円孔上下の沈線はしっかりと刻まれる。その間には篋を用いて乱雑に斜線を刻む。底部付近の回転篋削りも雑な感となる。これは「東辺周溝下層」出土片と接合している。

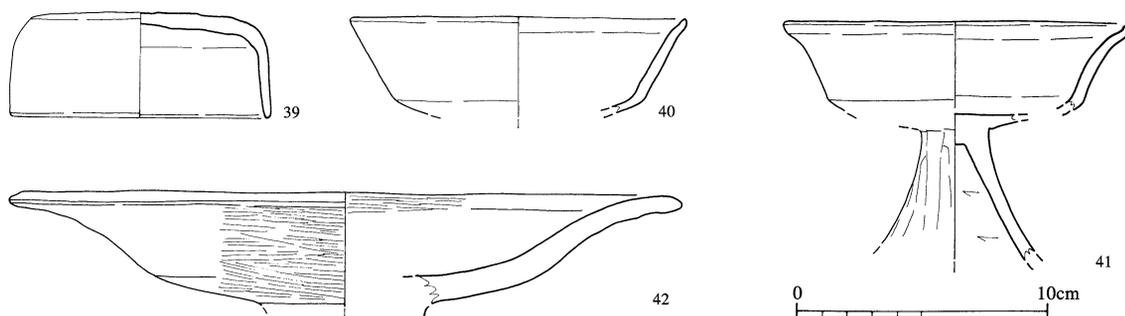
26は器高8.4cmの小型壺で、装飾は一切ない。丁寧に作られているが、焼け弾けが見える。27は閉塞石の上に置かれたもので、出土時は転倒していた。器高13cmの小型品で、口端部をわずかに肥厚させて、肩部は繊細なカキ目で覆う。篋記号が刻まれた付近の体部下位から底部にかけて回転篋削りで仕上げる。胎土に青色系・白色系の粘土を交互に使用していて、縞模様となる。28は口縁部が直行する短頸壺で、体部上半の1/2を欠く。口縁部外面には刷毛目状の斜位の痕跡が残る。胎土・造作とも良好である。30は口縁部を欠くが、図示した部分はほぼ完存する。胎土精良で、回転篋削りなどもとても丁寧に施される。焼成は甘い。

29・31は脚付壺。29の口縁部は小さく開いて直行し、体部は張りが強い。口縁部から体部下半にかけて全体を雑なカキ目で覆うが、肩部に甘い沈線が2条観察できる。脚部外面にはシャープな篋記号が刻まれている。31の口縁部は短く直行する。体部は球形に近く、最大径部直上に篋描の斜線文が刻まれる。脚部は中程で反転屈曲するが、その付近に凹線を刻んでいる。胎土は精良で、酸化炎焼成されて灰白色となる。

32～36は平瓶。32は口縁部と体部が接合不可だが同一個体である。口縁部は端部を断面方形に作



第38图 平石V-3号墳出土遺物実測図4 (墓道出土土器、1/3)



第39図 平石V-3号墳出土遺物実測図5（墓道出土土器、1/3）

るほかに装飾性を欠き、体部は器表が荒れているとはいえ、やはり装飾は見えない。灰白色に近い焼成不良品で、体部下端付近は縦刷毛、底部外面は篋切りの後に雑に撫でる。33は完存するが、焼成時に亀裂が入る不良品で実用には耐えないものであろう。口縁部は直行し、中位に2条の沈線を刻む。体部最大径部が中位にあり、上面にボタン状の装飾を2個付す。胎土は精良で、底部付近の回転篋削りなどの調整も丁寧になされる。34は完存するが、やはり焼成不良で灰白色となり、器表が荒れている。口縁部はわずかに内傾し、頸部中位には2条の甘い沈線が巡る。体部はほぼ全面にカキ目を施し、底部付近には篋記号が刻まれる。35は閉塞石組上に置かれていた完形の平瓶であるが、焼成時に口縁部が潰れている。装飾は一切なく、体部下半から底部にかけては丁寧な回転篋削りで仕上げ、底部外面に篋記号が刻まれる。36は口縁部付近の1/2を欠くほかはほぼ完存する。口縁部は短く外反し、端部に加工を加えるが、頸部は無文。体部はカキ目で覆うようだが、灰被りのために細部は不明である。器表に砂粒が多く浮く。

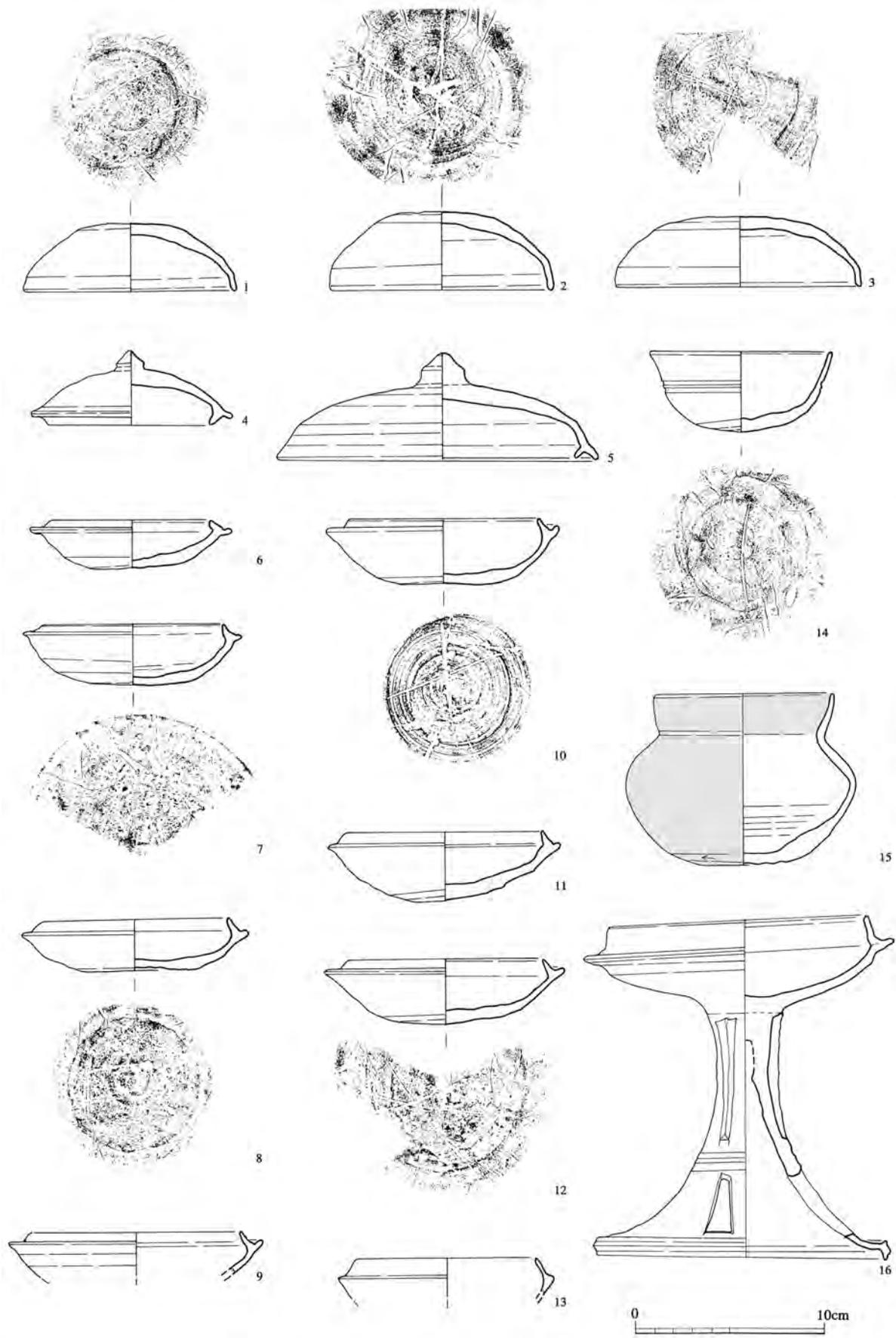
37は復原口径32cmの甕口縁部片。頸部は篋描斜線文で文様を付し、それも含めて沈線や稜線はシャープに造作される。38は口縁部の1/2が残存。胎土・造作ともに良好である。これは墓道床付近・東辺周溝出土片が接合。

39～42はいわゆる土師器である。39は蓋として図化したがる、天井部外面は篋切離し痕をそのまま残すことから身とするのが妥当であるかも知れない。ただ、内面も指頭痕が顕著である。胎土精良で灰黄色～明黄褐色を呈する。40・41は高杯。口端部内側をわずかに凹ませ、屈曲部はシャープな稜を持つ。41は40と異なり口縁部が外反するが、端部はやはり小さく凹ませる。胎土精良で、雑作も丁寧であるが、器表が荒れている。なお、同一個体と思われる脚部では篋削りが観察できる。42は図示部の1/2が残存する大型の高杯片。胎土精良で、器表が荒れているが篋磨きで仕上げたようである。

周溝出土土器（図版37・38、第40～43図）

東辺周溝、といってもほとんどが東南部下層からの出土である。13・20・21が土師器であるほかはすべて須恵器。

1はほぼ完存し、暗青紫色となる。口端部付近が短く屈曲し、天井部外面は回転篋削りである。2もほぼ完存するが焼成が甘く、器表が荒れる。3の口縁部付近は小片となる。拓本で窺えるように天井部は丁寧に篋削りがなされ、胎土も精良といってよい。4は擬宝珠状のつまみをもつ。口縁部が受け部より突出し、天井部は一見カキ目のように見えるが撫でて仕上げているようである。胎土・造作とも良好な約1/2の残片。5はやはり擬宝珠状つまみをもつ大型の蓋で、口縁部の1/4を欠く。胎土精良で、天井部は広く回転篋削りで仕上げる。外面は暗灰褐色～暗茶褐色に発色するが、器表が剥離した部分ではピンク色の地に細い白色粘土が入る絞胎状の縞模様が覗く。



第40图 平石V-3号墳出土遺物実測図6 (墳丘・周溝出土土器、1/3)

6～13は杯身。6は最小で、口径8.4cm、器高2.6cmを測る。外面に灰を被っている。7もほぼ完存する。胎土粗く、これも外面に灰を被る。8もほぼ完存。胎土・調整とも粗く、底部外面は篋削りの後に撫でたようで、平坦化している。また、同所に「人」字のような弱い篋記号が刻まれている。あるいは「×」を意図したものか。9は胎土・造作ともに良好な小片。10は大甕片の上に伏せ置かれたような状態で出土したもので、完存する。立ち上がりは短い、口径10cm、器高3.4cmを測る。底部外面は丁寧に回転篋削りで仕上げる。11は完形品で、外面は灰被りが著しく、焼け歪む。12もほぼ完存し、これも外面は灰を被り、かつ煤けている。

13は須恵器の技法で作られるが、土師質に焼き上がった小片で、器表は摩滅する。

14は身としたが、蓋であるかも知れない。ほぼ完存。体部中位に甘い沈線を2条刻み、天井部は丁寧な回転篋削りで仕上げる。

15は、一見土師器を思わせる形状であるが、製作技法や焼成法は須恵器である。外面は底部付近のみ回転篋削りを用い、その他の部位は横撫でで終わる。なお、口縁部内面から外面全体に赤色顔料を塗布したようである。器表に砂粒が多く浮き、焼成は生焼けに近い。

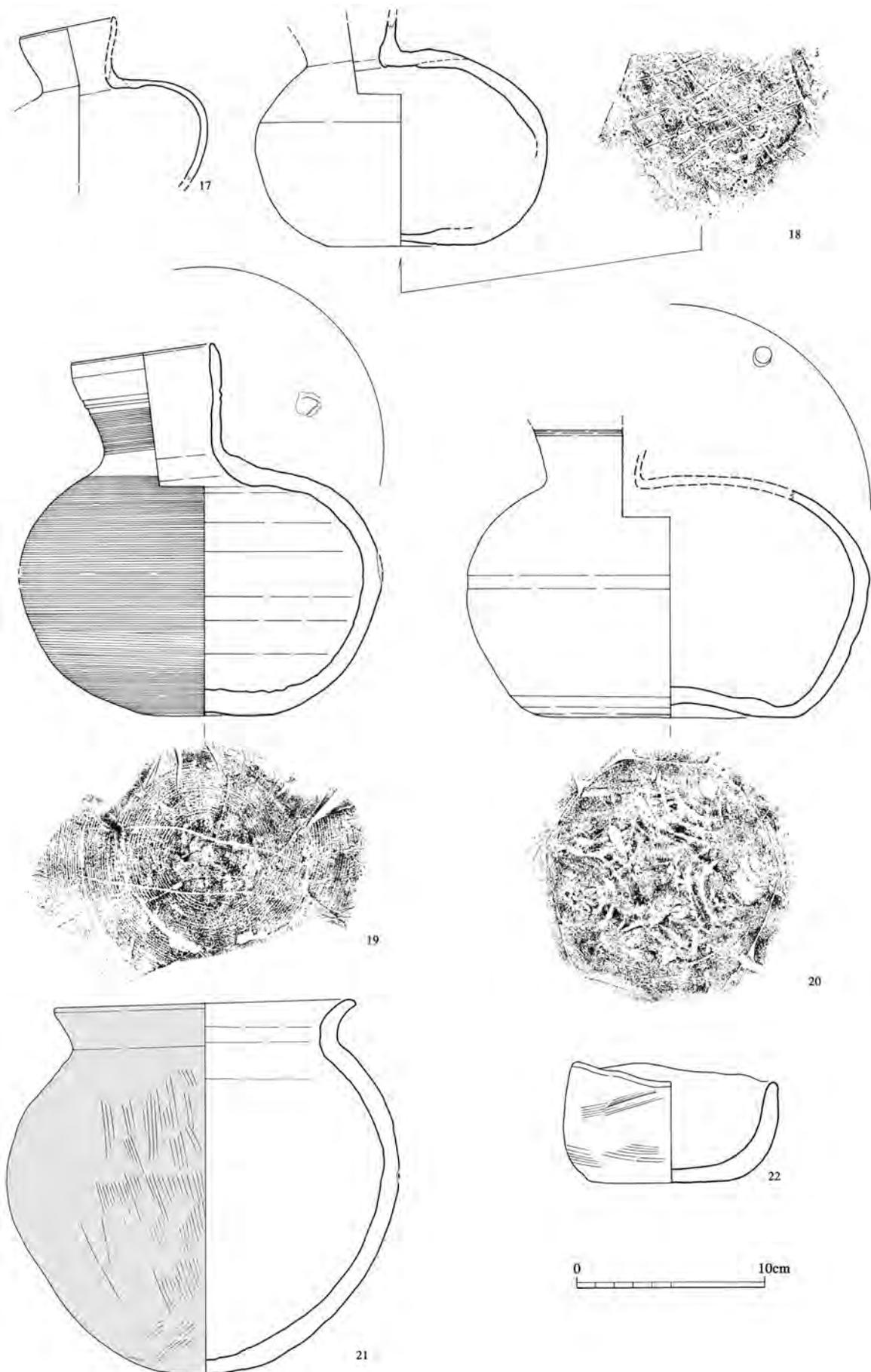
16は周溝中央付近の大甕片集積中の破片と墳丘SW（南西）区出土品が接合している。脚部はほぼ完存、杯部も大部分が残る。脚部中位に2条の甘い凹線が巡り、透孔は上段が貫通せず、下段のはそれぞれ不整で、上段のそれより左へずれている。胎土・造作も良好のようであるが、外面は灰被りが著しい。

17～20は平瓶。17は丁寧に作られた小型品の残片。18は口縁部と体部の1/3ほどを欠く。器表に砂粒が多く浮きなど雑な作りで、また焼成時に器表が大きく弾けている。底部外面には格子状の篋記号がしっかりと刻まれている。19は上下に割れて接合付加のものを図上復元した。頸部中位に沈線を2条刻み、それ以下はほとんどを繊細なカキ目で覆う。肩部に小さなボタン状の粘土塊を2個、装飾として付す。外面の灰被りが顕著で、口縁部付近は焼け歪む。20はやはり口縁部と体部の1/3ほどを欠く。全体に丁寧な横撫でで仕上げるようだが、体部下端付近から底部外周には回転篋削りを施す。底部外面は凹面となって同心円の当具痕が残る。対応する内面は撫で以外の痕跡は見えない。

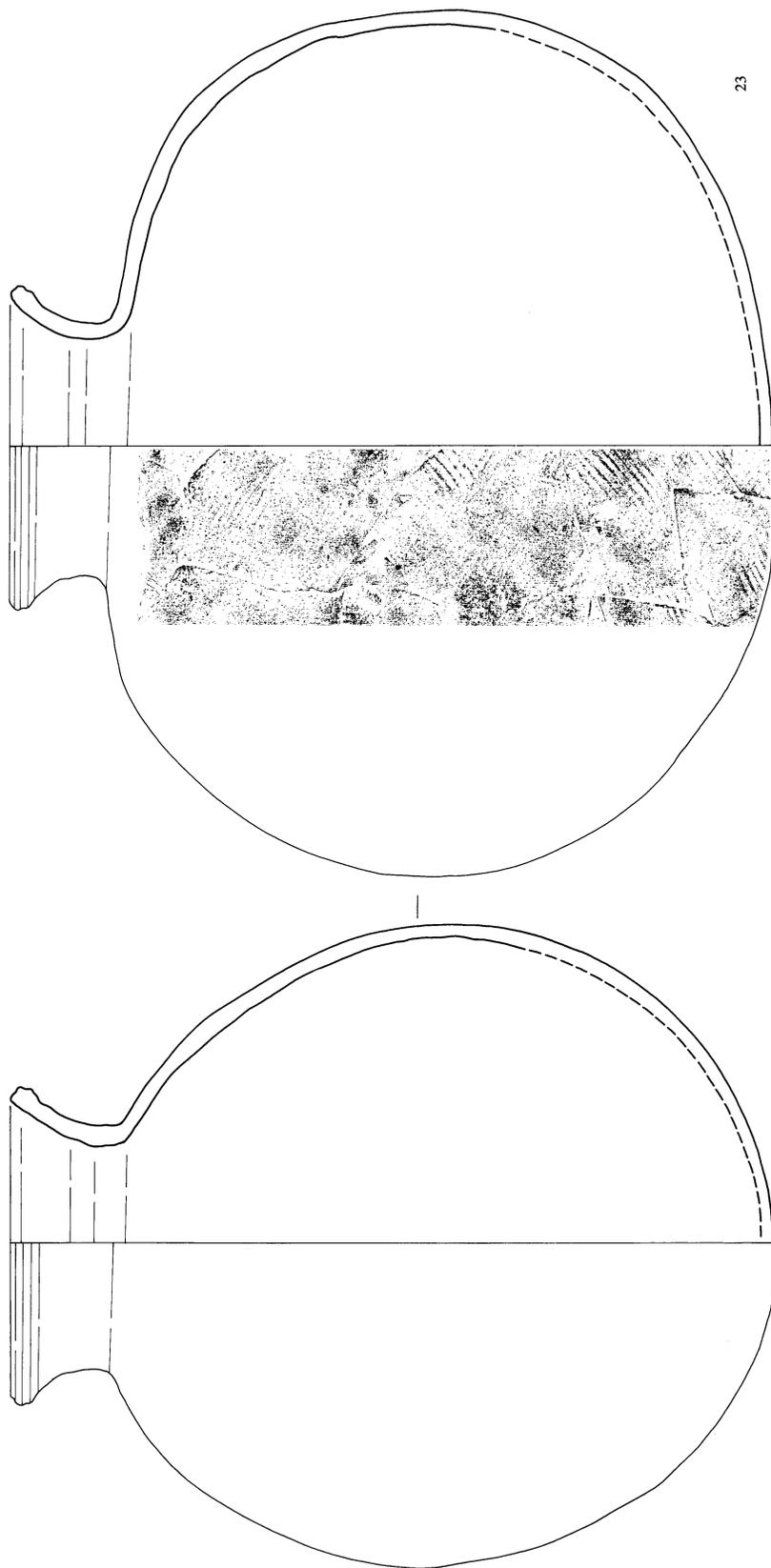
21は土師器甕で、床付近で横転、潰れた状態で出土した。器表が荒れているが肉厚で雑な作りである。なお、外面、特に頸部付近は部分的に灰赤褐色となり、赤色顔料が塗布されていたようである。22は21に近接して出土した手捏ね。形状不整で、灰赤褐色を呈するが、1/2強が黒斑となる。

23は横瓶。器表に砂粒が多く浮き、粗雑な作りで、焼成も甘い。次に述べる大甕片とともに集中して出土した。

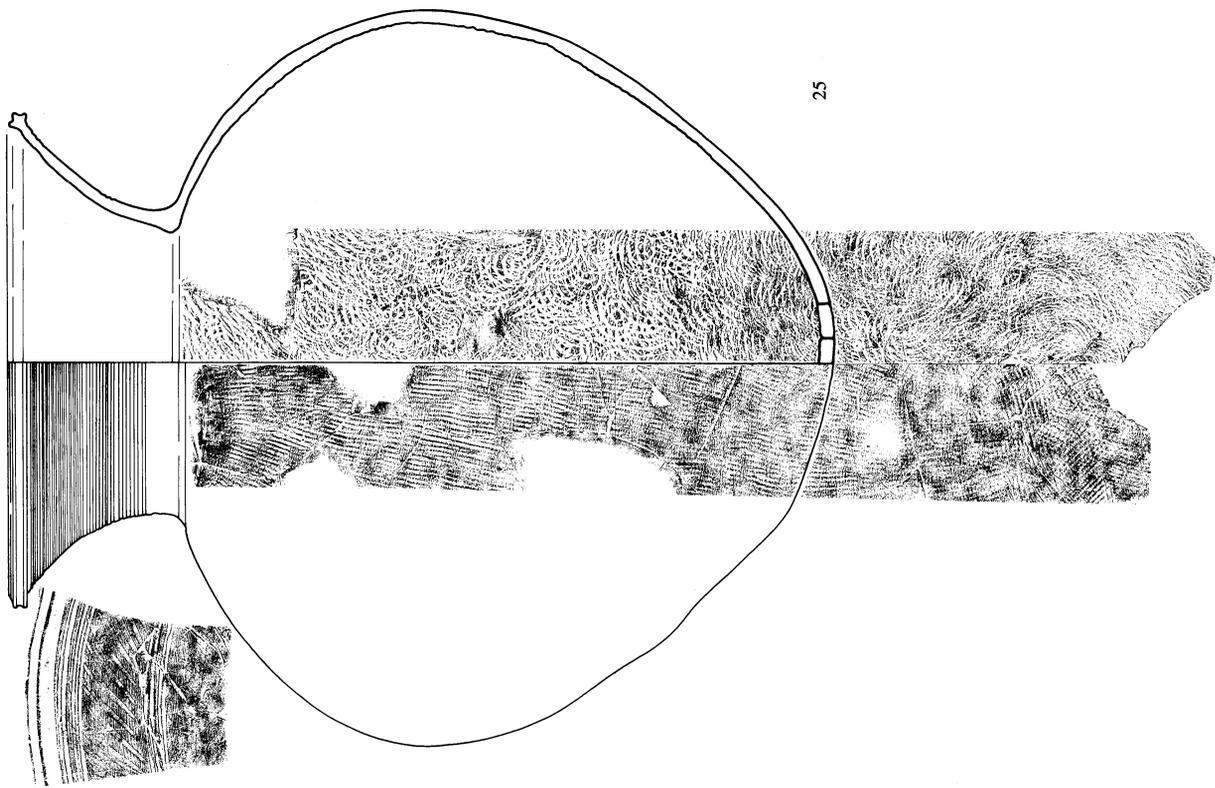
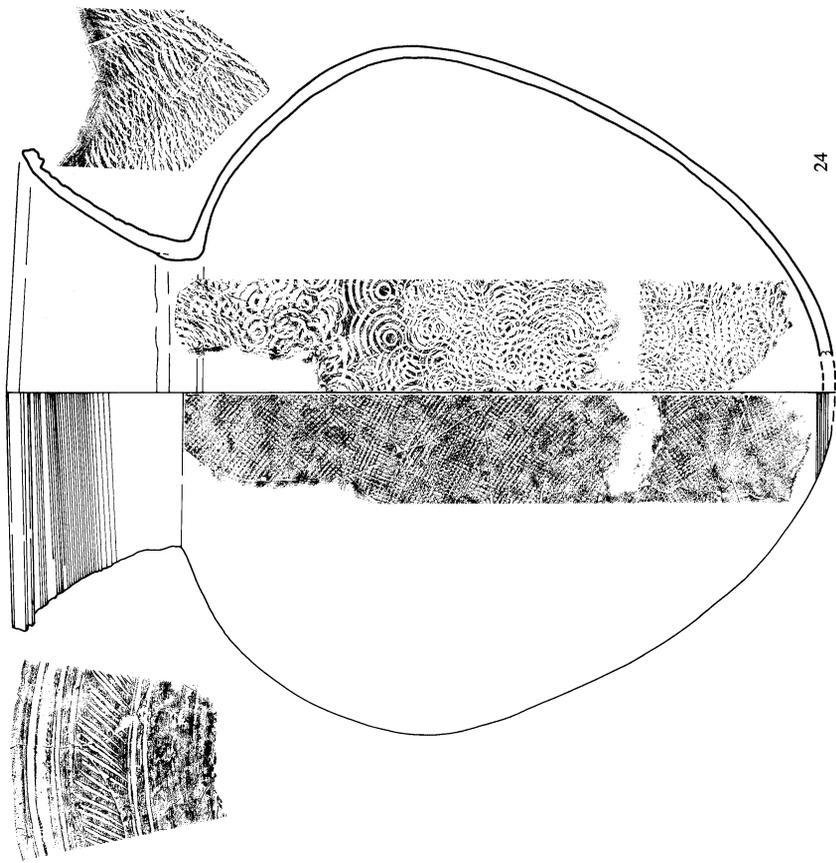
24・25は東辺周溝中央（東Tr.）付近で破碎して出土したものである。24は口縁部付近と体部が接合しないが、図上復元したもので口径約37cm、器高約64cmを測る。口縁部は肥厚させて凹線を刻み、頸部中位に篋描の斜線文を乱雑に刻んで上下を2ないし3条の浅い凹線で画する。凹線は粗雑。なお、文様帯付近は地にカキ目を使用するが、体部はほとんどが叩きのみで仕上げ、カキ目は底部付近の一部でしか使用されていない。25は全体を窺える。口径・器高は24とほぼ同大だが、体部径やその位置が異なる。口縁部は上面と側面を強く横撫でして凹面とし、24と同じように施文する。地のカキ目、粗雑な区画帯凹線は同様であるが、斜線文の原体にここでは幅広く浅いものを使用している。体部は叩きのみで仕上げられ、底部付近に径9cmの不整円孔があるが、意図的なものと思われる。



第41图 平石V-3号墳出土遺物実測図7（墳丘・周溝出土土器、1/3）



第42图 平石V-3号墳出土遺物実測図8（墳丘・周溝出土土器、1/3）

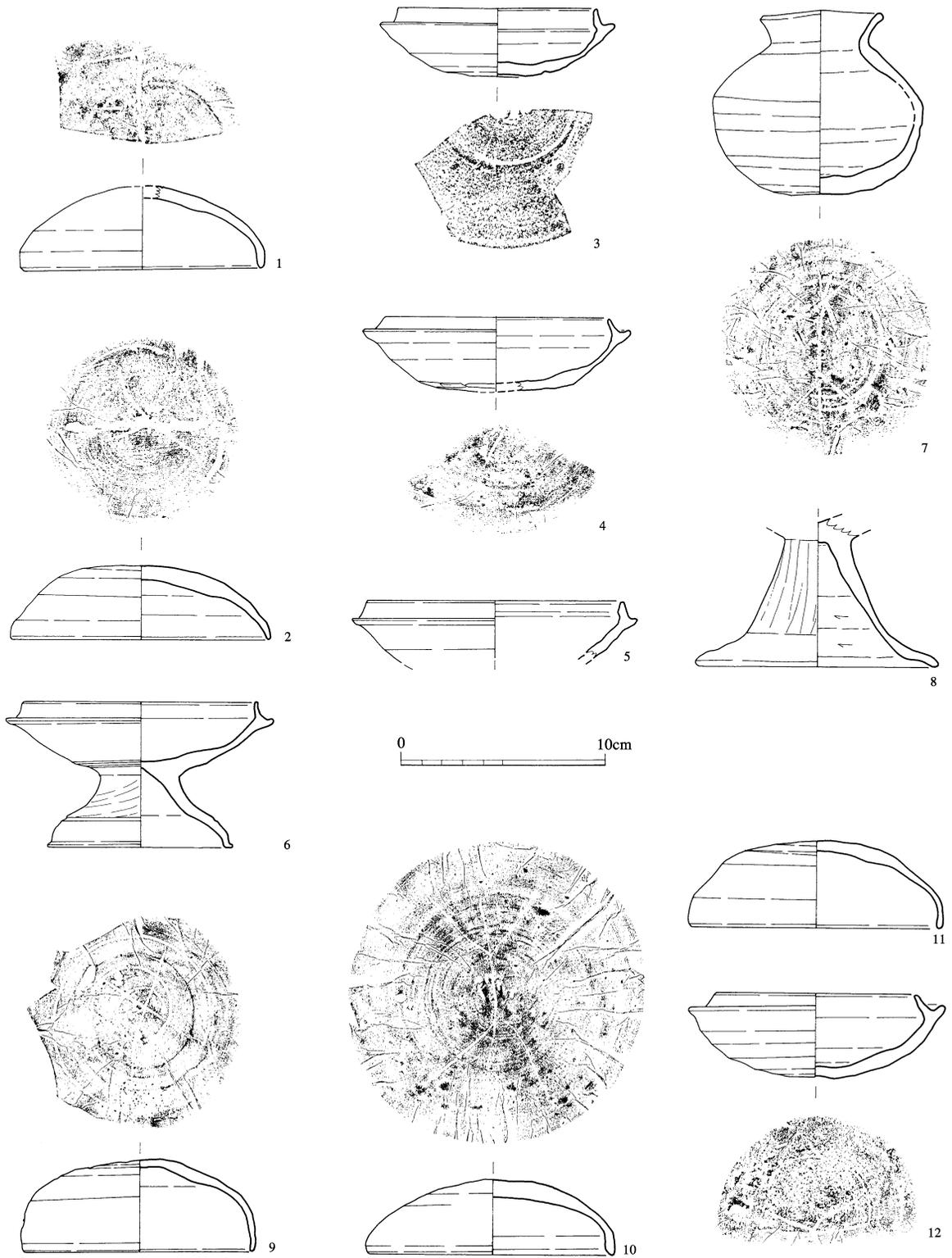


第43图 平石V-3号墳出土遺物実測図9（墳丘・周溝出土土器、1/6）

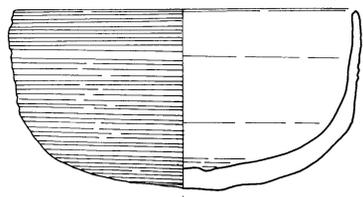
墳丘出土土器（図版39、第44・45図）

おおむね墳丘表土除去後に出土した土器群をここにまとめた。出土場所は南半（前面）で、SE（南東）区、SW（南西）区である。

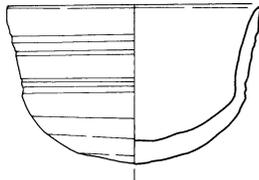
1～8はSE区出土。2・3・5・7・8は墓道肩付近でまとめて出土し、4・6はそれらと50cmの距離



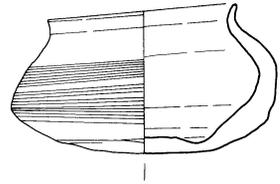
第44図 平石V-3号墳出土遺物実測図10（墳丘・周溝出土土器、1/3）



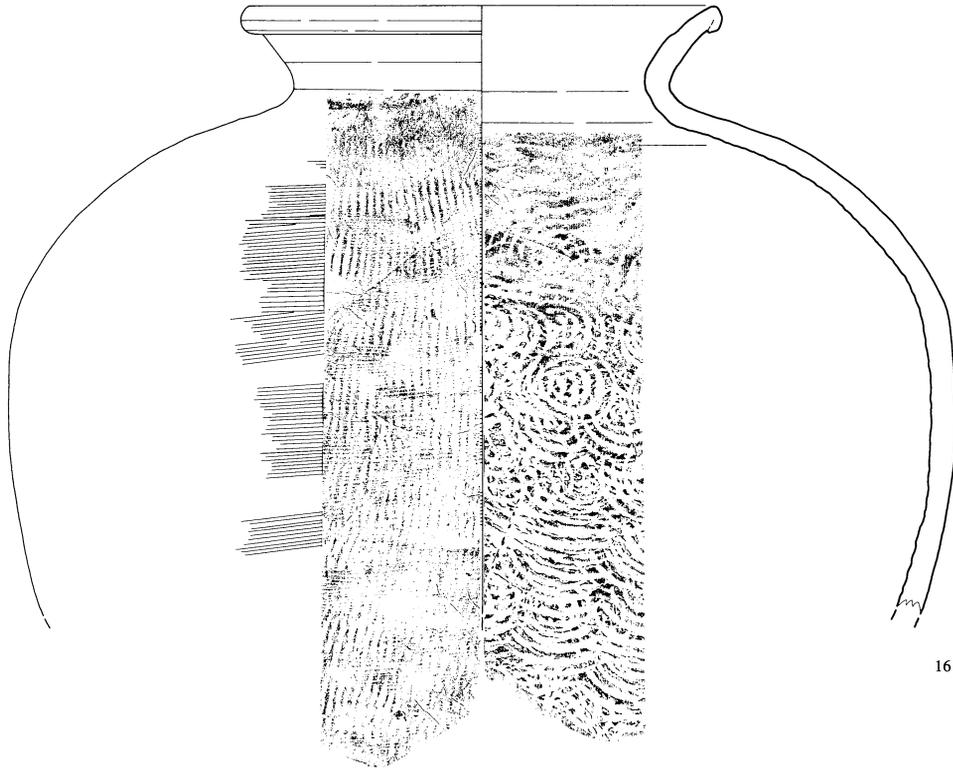
13



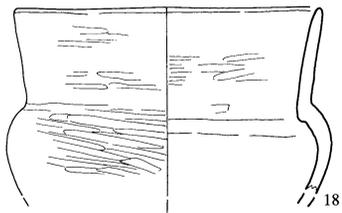
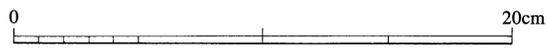
14



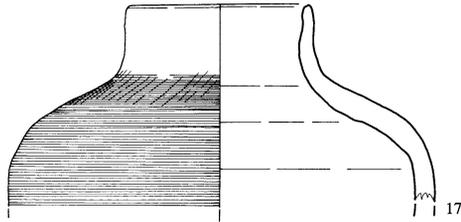
15



16



18



17

第45图 平石V-3号墳出土遺物実測図11 (墳丘・周溝出土土器、1/3)

を置いて南に位置し、やや散乱した状態で出土した。

1は出土地点を特定できていない。口縁部付近は1/5ほどの小片となり、焼け歪むが復元口径は12cm弱となる。2は生焼けで淡灰色～明黄褐色となり、口縁部の大部分を失う。天井部は広く回転篋削りを施す。3は小片。胎土・作りは良好で、外面に灰を被る。4は1/2弱の残片。これは胎土粗く、雑な作りの土器である。5は1/4ほどの残片で、土師質に焼かれて灰白色～黄白色に発色する。6も灰黄色～黄白色を呈する土師質に焼成された土器。胎土・作りとも良好である。7は口縁部の1/3を欠くほかは残存。小型壺で、底部周辺は回転篋削り、それ以外は横撫でで仕上げる。特に上半は灰が吹き飛び、器表が荒れて、口縁部は焼け歪む。8は土師器高杯の脚部。上半は篋磨きで仕上げ、脚端部内面にはしっかりした稜線が入る。

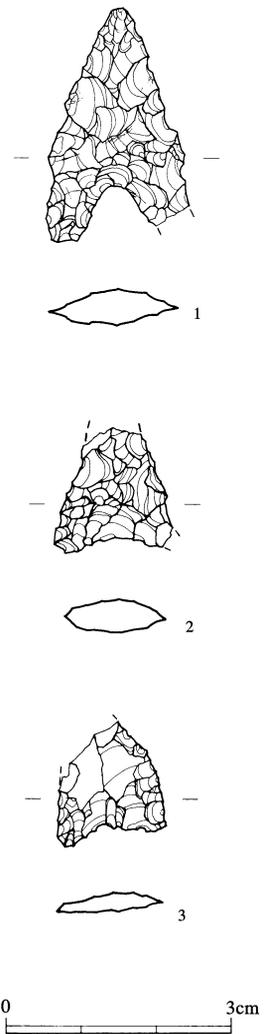
SW区では表土下での3つの土器群、盛土除去後の3つの土器群を図化した。9は墓道貼石背面で出土したものであろう。丁寧に作られた土器で、外面は灰を被って黒色化する。10は墓道に近い部分から出土した完形品。これも胎土精良、丁寧に造作された土器で、篋記号は先に紹介した7と同様な特殊なものである。11は墓道貼石前端の背面から出土したもので、やはり丁寧に作られた完形品。12は注記にないが、WTr. で高杯とともに出土したものであると思われる。2/3の残片で、これも丁寧に作られている。

13・14は一応身としておく。13は大きく焼け歪むが、とても丁寧に作られた良質な土器で、体部中位に甘い凹線を1条巡らせるが、全体をカキ目で覆うために判然としない。10の近くから出土している。14も同様に丁寧に作りの土器で、これは沈線のみで装飾する。天井部には焼成時のひび割れがある。15は墳裾付近出土で、口縁部の一部を欠くほかは完存。体部上半はカキ目、下半は回転篋削りで仕上げ、底部に繊細な篋記号が刻まれる。全体に焼け歪み、口縁部は不整楕円形ともいうような形となる。14・15は16に示した甕の下位付近から出土。表土除去後に図化した3群のうち、中央の土器である。口縁部は小さく折り曲げて玉縁状とするが、それ以外に装飾はない。胎土精良で、丁寧に作られている。

18は墓道貼石背面近くで碎片化して出土したものの一つである。口縁部外面には縦刷毛の痕跡があるが、全体に粗い篋磨きで仕上げている。

5) その他の遺構と遺物

この平石V群も立地はIV群に似て急斜面下の狭い緩斜面に位置する。したがって、通常の生活の痕跡は到底存在し得ない状況であるが平石IV群同様に若干の縄文時代の遺物を出土している。土器は小片であることもあって省略するが、石鏃を紹介する。1は縦断面流線形をなす黒曜石石鏃。全面に細かい調整を加えるが、側縁部はやや荒い。長3.1cmを測る。2号墳墳丘SW区より出土。2・3は黒曜石石鏃。2は細かい調整を施し、先端・右脚が新欠する。3号墳東Tr.出土。3は先端から左側縁にかけて新欠。3号墳墓道床付近より出土。これら縄文時代の所産で、狩猟に伴うものである。



第46図 平石V群出土石製品等実測図(1/1)

6) 小 結

この平石V群では3基の古墳を調査した。3基の高位ではトレンチ調査で古墳を確認できず、下位はかなりの急斜面で降下するため、さらなる古墳は存在しないものと思われる。

さて、出土土器を見ると、その上限は2号墳東Tr.出土の杯身が口径12.4cmで最大の法量をもつ。1号墳出土の杯身は口径11cm前後、比較的多くが出土した3号墳では10cm前後となり、一応この順に築造されたと理解してよいと考えている。ただ、これらの蓋杯外面はいずれも回転篋削りで仕上げられ、法量が最も隔たる2・3号墳から出土した有蓋高杯はいずれも上段透孔が貫通しない共通点をもつ。透孔の配置等で3号墳出土品が稚拙であるとはいえ、これら3基の築造時期は北部九州須恵器編年のⅣ期のうちに収まり、さほど隔たるものではないのであろう。

上記の築造順を認めた上で、3号墳の東辺周溝から出土した若干の遺物について指摘しておくことがある。同所からは多くの土器とともに耳環・鉄釘を主とする鉄製品も出土した。出土位置は周溝底近くである。古墳周溝から鉄製品が出土する例は往々にして見られるが、本例のように特別な配慮を見出しがたい例はなからうか。埋葬部外からまず出土することのない耳環が1個単独で出土したことも特筆できよう。3号墳周溝が2号墳墳丘を削り込むように掘削されていることを考え併せると、3号墳築造時に2号墳の墳丘を破壊し、想像を重ねれば石室も破壊した可能性が考えられよう。2号墳石室のみが大規模に石材を抜かれていることは、石室破壊に際して石材を抜き取り、2号墳に再使用したことも推測される。1号墳についても、浅く不明瞭ながらも周溝西北部が2号墳墳丘を削り込んでおり、2号墳を最初に破壊したのは1号墳築造に伴った行為であった可能性もある。



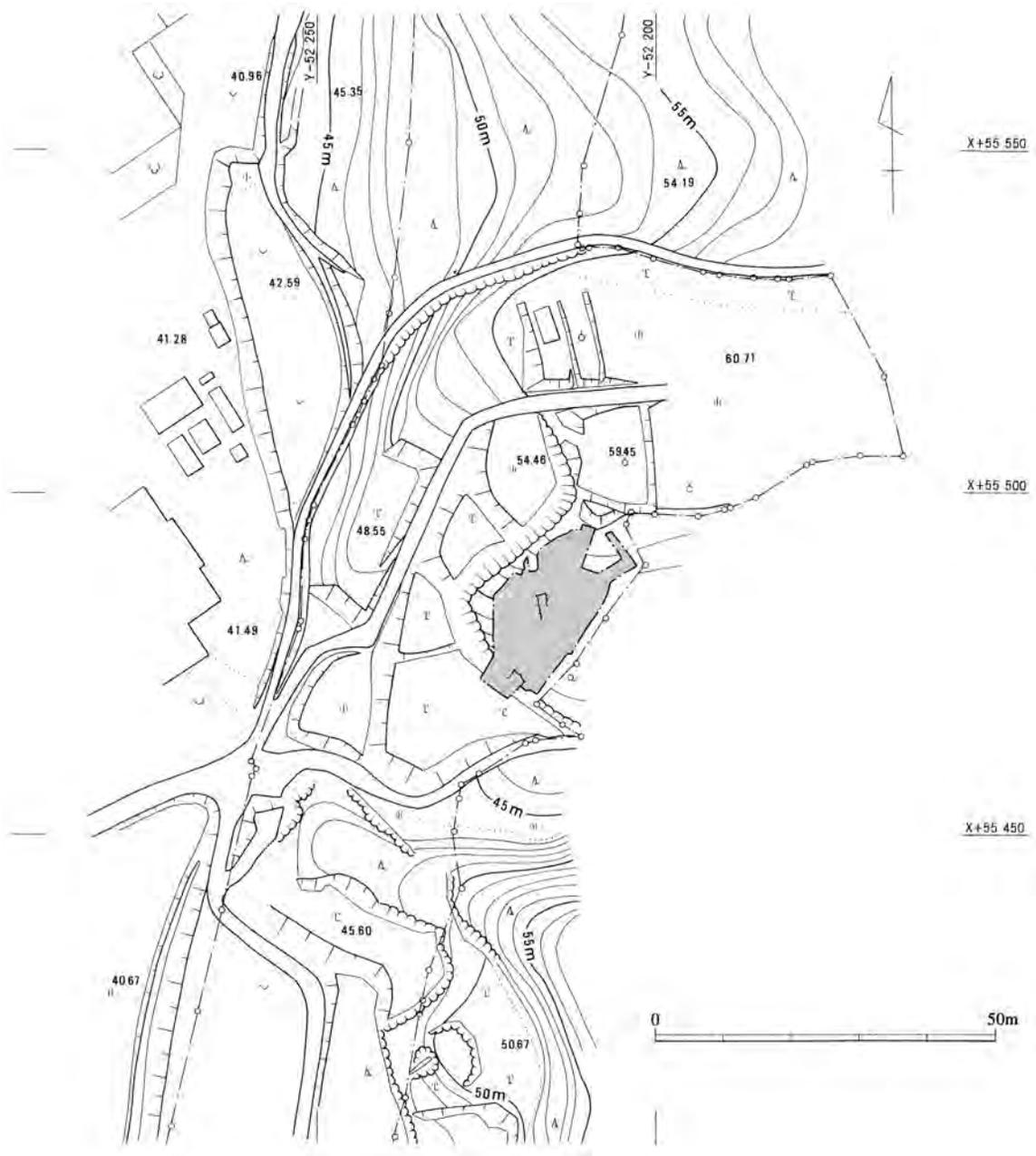
那珂川山中を走る高架橋（中央の主峰が観音山）

3 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群

1) はじめに

本遺跡は、福岡県筑紫郡那珂川町大字下梶原437番地に所在し、春日市との境をなす観音山(169m)西麓の、標高48m~60mの南に傾斜する急斜面上に立地する。

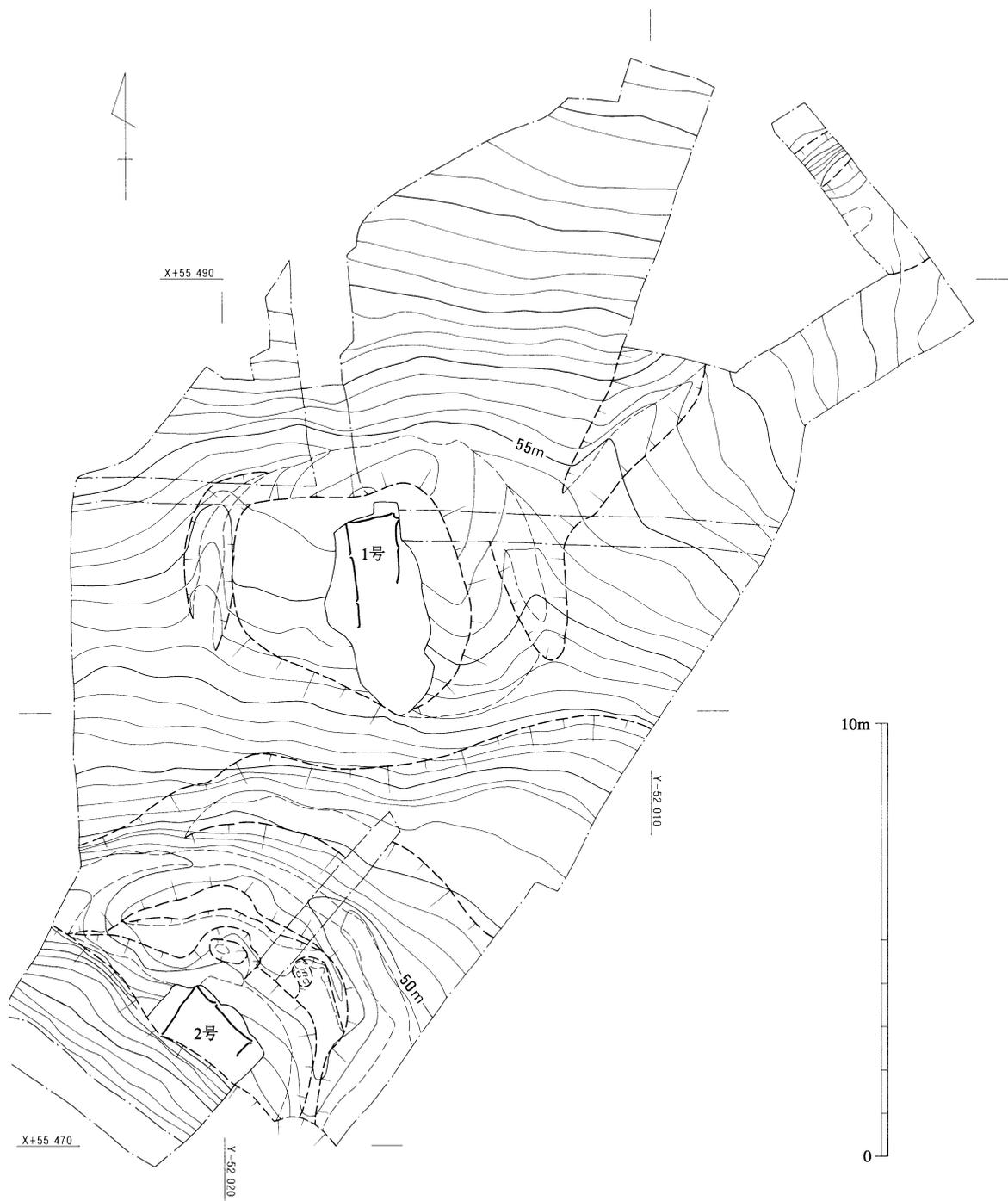
調査対象地の北、西、南側は、これまでの開発行為によって大きく削り取られて既に失われており、旧地形を比較的維持していると考えられる部分は僅かで、そこでも里道の痕跡等の攪乱が見られる状態であった。



第47図 瀬戸Ⅱ群調査区位置図 (1/1,000)

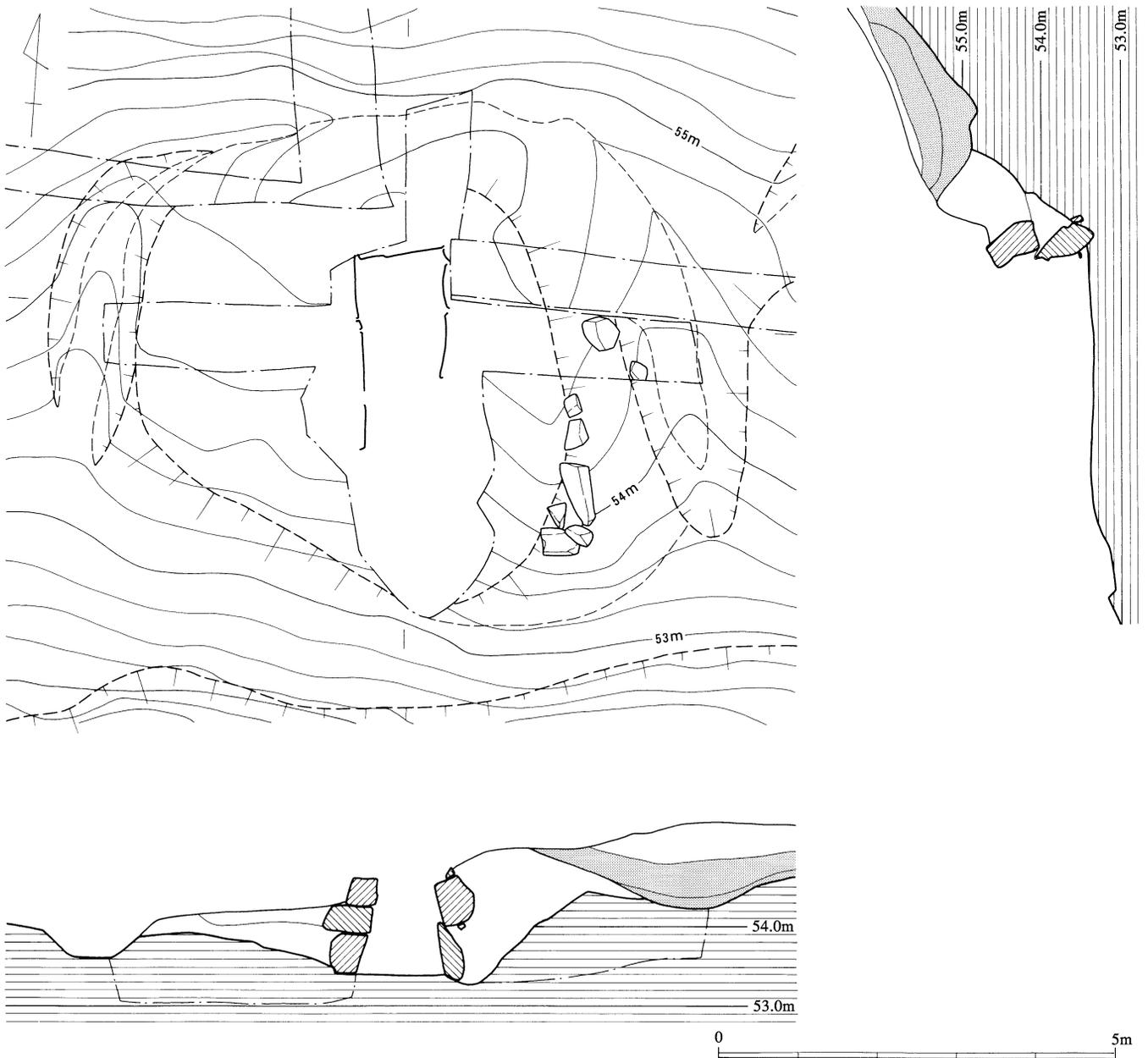


第48図 瀬戸Ⅱ群周辺地形図 (1/200)



第49図 瀬戸Ⅱ群遺構配置図 (1/150)

試掘調査は、那珂川町教育委員会によって平成18年11月9日～29日の間実施され、2基の古墳の存在が確認された。発掘調査は、この試掘調査の結果に基づいて、同年12月22日から開始した。23日から町教委の掘削した6箇所の試掘溝をさらえ、残存状態の悪い2基の古墳の石室を確認した。26日からは新たに1号墳石室北東側に新たに試掘溝を設定して掘削を開始し、さらに別個の古墳の存否を確認した。合計7箇所の試掘溝によって、調査区内では石室まで確認できる古墳は2基存在し、さらに1号墳北東周溝に接続して北東方向に延びる溝1条を確認した。平成19年1月11日からは、1・2号墳の土層観察用ベルト以外の部分について、調査区全域の人力による表土の除去作業を開始した。これと並行して各遺構の実測作業、写真撮影を行い、ほぼ掘り上がった3月14日にはラジコンヘリによる上空からの全体写真撮影を実施、30日にすべての作業を終了して撤収した。



第50図 瀬戸Ⅱ-1号墳実測図 (1/80)

調査の結果検出した遺構は、先述のとおり古墳2基と1号墳周溝から北東方向に延びる溝1条で、溝については調査区外に存在する古墳の周溝あるいは墓道の一部分と考えられる。

2) 観音山古墳群瀬戸Ⅱ-1号墳

i) 墳丘 (図版28・29、第50図)

調査区のほぼ中央で検出した。調査前の段階で、墳丘は既に大きく削り取られており、わずかな高まりとして認識できる程度であった。調査の結果、墳丘と周溝の南部は地形の段落ちのために失われているものの、墳丘盛土をわずかに残し、西、北、東側に「コ」字形に周溝が残存した、方墳を意識した墳形と判断できる。周溝の北側については、斜面との境に特段の傾斜変換点を見いだせず、地形の傾斜をほぼそのまま利用したものと考えられる。残存している周溝は最大部分で幅1.6m、深さ50cm程度。また、墳丘の南東部で石材が一部並べて配置されているかのような箇所があり、外護列石である可能性がある。

墳丘規模は、東西方向は周溝の内側で計測して6.1m、南北方向は南側が失われているが5.1mが残存している。

ii) 主体部 (図版28、第51図)

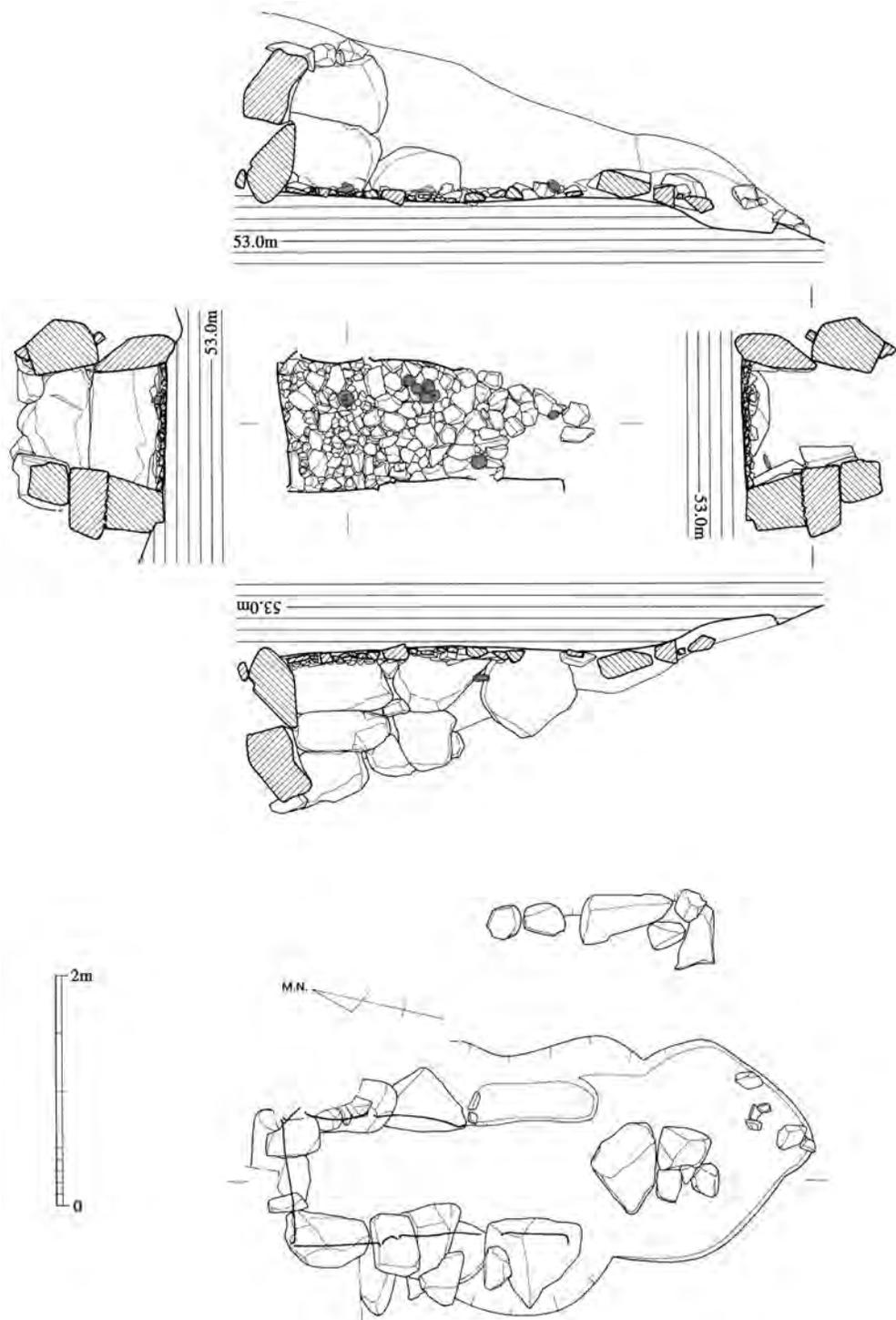
石室は、墳丘の中央より東側に偏した位置に造営されている。削平によって石室上半部と手前の入口部付近を既に失っているが、残存した部分で観察できる範囲では、地山を50cm～1m程掘り込んで平坦部を造る、石室を構築する、墳丘盛土を積む、の順で築造されている。斜面下方である南側に開口した横穴式石室で、石室主軸はN-12°-W。

平面形は、玄門部等入口側は失われており、構造等については一切不明である。玄室についても西側壁で奥壁から3石、東側壁で2石と3石目の抜き取り痕が残るのみであるが、玄室は平面長方形で、幅は奥壁付近で1.15m、手前は石材抜き取り痕から判断して約1.0m、残存長は、原位置を留めると判断できる敷石から2.8m。立面は、石室上半部を失っており、周壁についても地形の傾斜に従って下側にあたる入り口部側の残存状況が悪い。奥壁で2段、西側壁で最大3段、東側壁で2段分の石材が残存しており、奥壁、側壁ともに上部が狭くなる台形状に組んでいる。奥壁側で残存高1.2m。

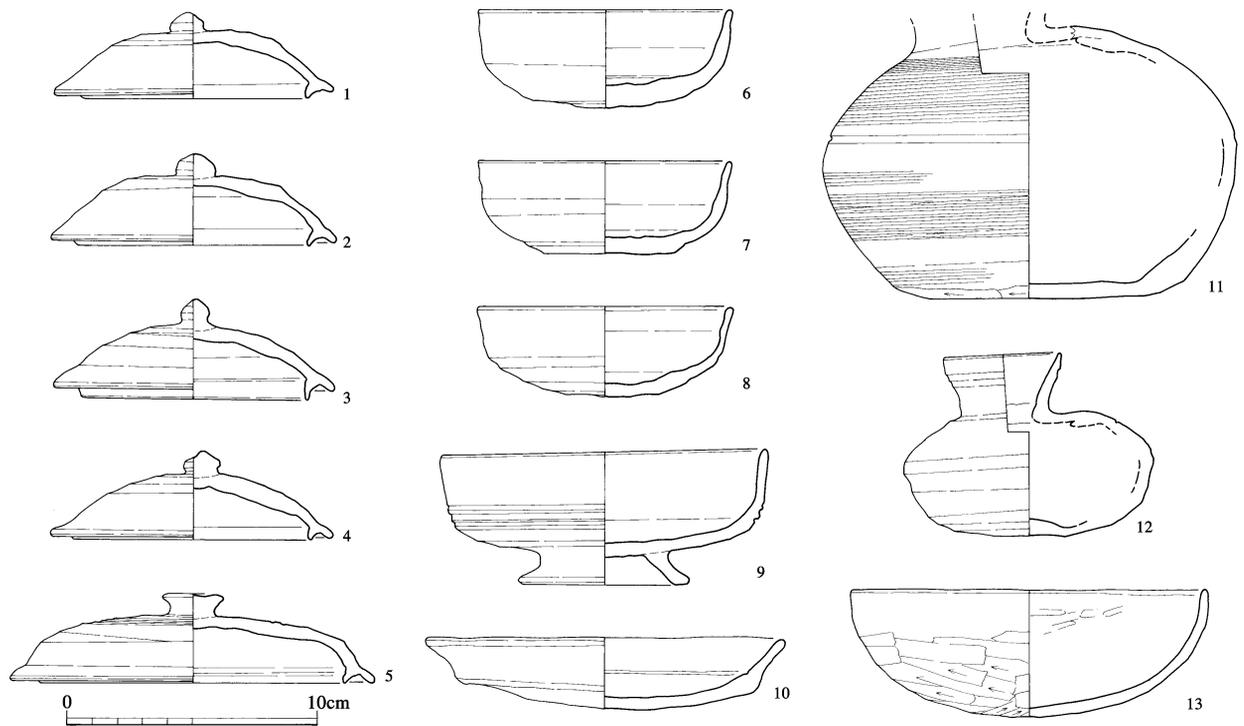
敷石は、径5～30cm程のやや不揃いな扁平自然石を敷き並べている。また、玄室奥側と中央付近東側の敷石上で原位置をある程度留めた土器類が出土した。

iii) 出土遺物 (図版40、第52図)

すべて玄室内から出土した。13が土師器である以外は須恵器。1～4、6～8の杯蓋、杯身は、玄室中央部東側の敷石上からセットになってまとまって出土した。出土状況からは、蓋を下にして身のほうを被せていたようである。杯蓋は4点とも天井部に宝珠形のつまみを付け、口縁部内面にはかえりを持つ。径11.1～11.3cm、かえり部径9.0～9.6cm、器高3.4～4.0cm。杯身は、回転篋切りの後軽くなでる程度の雑な仕上げ。口縁部は直線的に立ち上がる。口径10.2～10.3cm、器高3.6～3.9cm。5も口縁部にかえりを持つ杯蓋であるが径の大きなもので、つまみは高さのある釘状になり、天井部には沈線が廻る。径14.6cm、かえり部径12.2cm、器高3.5cm。9は杯で、脚といったほうが良いほど



第51図 瀬戸Ⅱ-1号墳主体部実測図 (1/60)



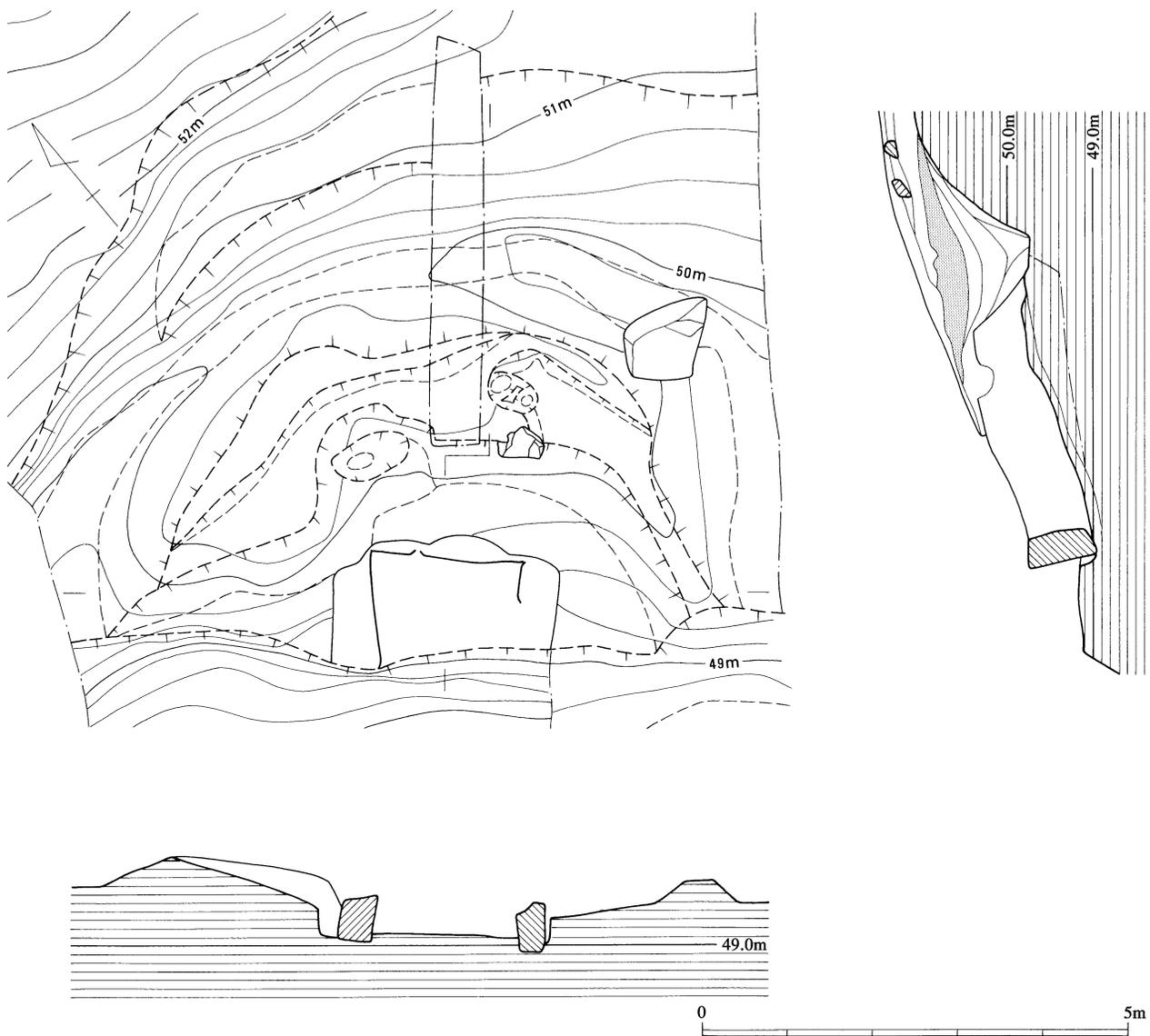
第52図 瀬戸Ⅱ-1号墳出土遺物実測図 (1/3)

高い高台を持つ。体部は直立し、底部との境に沈線が廻る。高台は体部に比べて径が小さく「ハ」字に広がり高さがある。口径13.2cm、高台径6.9cm、器高5.4cm。10は皿で、底部がやや丸く、口縁部は反り気味に立ち上がる。口径14.4cm、器高2.9cm。11・12は平瓶。11は大型のもので、口頸部を欠失する。体部は丸く、全面にカキ目を施し、肩部に浅い沈線が廻る。体部径16.5cm、体部高10.8cm。12は小型のもので、13の土師器椀の中に置かれた状態で出土した。体部は扁平で、肩部で屈曲する。口頸部、体部は横撫で調整、底部は回転篋削り調整。口径4.7cm、肩部径10.0cm、器高7.3cm。13は土師器椀で、石室奥の敷石上で12の平瓶と重なった状態で出土した。口縁部まで境目のない丸底の器形で、外面下半は篋削り調整、それ以外の内外面は横方向の篋磨き調整だが全体に器面は風化している。口径14.4cm、器高5.1cm。

3) 観音山古墳群瀬戸Ⅱ-2号墳

i) 墳丘 (図版30、第53図)

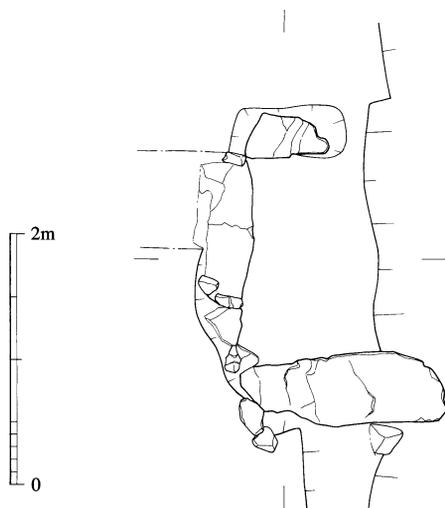
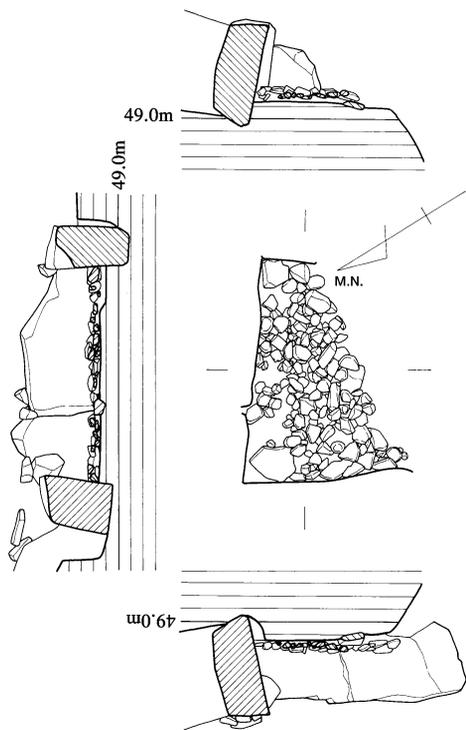
調査区の南端部に位置する。墳丘の南側過半部は以前の造成工事で削り取られて失われており、現状で2m程の段差がある。墳丘は徹底的に削平されており、盛土の痕跡は石室北側と西側でわずかに認められた程度であった。周溝は、失われた南側を除いて半円形に残存し、斜面を切断するように地山を掘削して形成しており、断面逆台形で、北側の最大部分で上端部幅3.0m、深さ1.0m程が残存する。残された周溝から判断すると、墳丘は円形で、規模はおおよそ径9m程度であったと思われる。



第53図 瀬戸Ⅱ-2号墳実測図 (1/80)

ii) 主体部 (図版30、第54図)

主体部は横穴式石室であるが、近年の造成工事によって南側のほとんどの部分が失われている。残存しているのは、奥壁とこれに接続する左右側壁の各1石分のいずれも基底の腰石と、それらに囲まれた部分の床面のみである。残されたわずかな部分から判断すると、主体部は南西方向に開口する横穴式石室で、主軸はほとんど計測不能であるが、側壁の状況からはN-35°-E程であろうか。玄室の周壁基部には高さ40~60cm程度の腰石を、壁面を若干内側に傾けて立て並べる。玄室幅は奥壁で1.78m、手前側の幅が狭くなるようである。床面には長径5~30cm程度の扁平な自然石を雑に並べて敷石としている。



第54図 瀬戸Ⅱ-2号墳主体部実測図
(1/60)

iii) 出土遺物 (図版40、第55図)

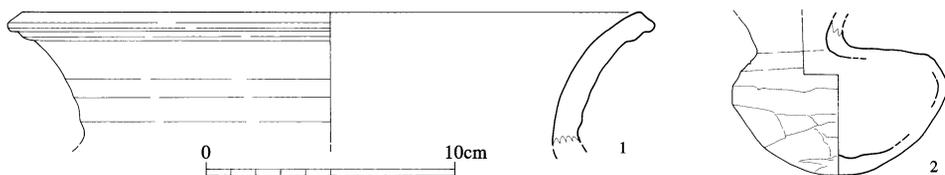
図示できる遺物は2点であるが、2は北東側周溝内からの出土であり、1号墳に伴うものである可能性も高い。1は須恵器甕で、外反する口頸部を持つ。復元口径26.0cm、復元頸部径19.8cm。2は須恵器平瓶。丸底で肩の張った器形で、肩部径8.6cm。上半部は横撫で、撫で調整、下半部は篋削り調整。焼成は賢緻であるが、色調は褐色～黄褐色を呈する。

4) 小 結

観音山の北麓から西麓の一带は、観音山古墳群として後期古墳が濃密に分布するところであるが、今回の調査対象地では近年の開発行為によって地形が大きく改変されており、町教委の行った試掘調査の結果でも2基の古墳が残存していたにすぎなかった。

今回の調査で検出した遺構は、古墳2基と、これとは別の古墳の周溝または墓道の一部と考えられる溝1条であるが、先述のとおり削平と掘削のためにほとんどの部分が失われていた。このうち1号墳は方墳と考えられ、外護列石を持つ可能性がある。主体部は横穴式石室であるが、上部と玄門部等を失っており構造はほとんど不明である。時期は敷石上から出土した土器から7世紀前半頃と考えられ、7世紀後半あるいは末頃までは使用されたようである。2号墳については、円墳で横穴式石室を主体部とすること以外はほとんど不明である。時期についても、有効な出土遺物がないために明言し得ない。

以上、2基の古墳については、いずれも残存状況が極めて悪く、墳丘、石室構造ともに明らかにし得たことは極わずかであった。



第55図 2号墳出土遺物実測図 (1/3)

IV おわりに

九州新幹線建設に伴い、那珂川町内で実施した発掘調査地点を1頁表1に示したが、それらの内容は今年度、次年度までにすべて報告の予定である。県教委が実施した内容については、未整理でも概要は分かるが、町教委が実施した遺跡について、調査中に見学を行ったものもあるが、詳細は全く不明である。したがって、今年度報告にあたっては、総括的なまとめは行いがたいので、気づいたいくつかを羅列して記述する。

1. 古墳群の開始と終焉

観音山古墳群は総数300基ほどの一大古墳群といわれ、中原・瀬戸・平石と大きく3支群に分けているが、さらに細かく尾根ごとに小支群が設定されている。既に150基ほどが調査・記録保存されているが、それらすべての詳細が報告されているわけではない。既に刊行された報告書をあたったところ、中原Ⅰ・Ⅳ群中に竪穴式石室墳や竪穴系横穴式石室墳があり、5世紀後半～6世紀前葉の築造が最も遡りようであるが、数は少ない。そして、6世紀後半代の築造とされる中原Ⅰ-1号墳は全長26mの前方後円墳で、近接する土坑から馬歯とともに鉄製馬具が出土している。古墳群中唯一の前方後円墳であり、この時期の盟主墳としてよからう。そして、前方後円形の墳形を採用したことから、この集団の社会的勢威が最大化した時期をも示しているのであろう。古墳群の盛期は今回報告した6世紀後半から7世紀前半にかけてで、殆どの古墳がこの間に築造されている。

翻って、周辺に目をやれば、小河川である梶原川を挟んで観音山古墳群の西に近接するカクチガ浦遺跡群では、丘陵の西北部に集中して竪穴系埋葬施設をもつ古墳群、古式須恵器を伴う竪穴系横口式石室を主体部とする古墳群が連綿と営まれるが、古墳造営は6世紀初めの段階で一端絶える。そして6世紀後半に北東部で2基の横穴式石室墳が営まれるが、それも尾根線を異にし通常の後期古墳群とは異なる様相を見せている。この両遺跡群の推移を見る限り、カクチガ浦遺跡群を造営した集団が、集団の拡大に併せ、葬地を観音山山麓に移動したと考えることもできよう。

そして、築造・追葬あるいは祭祀等の最終段階は8世紀である。次年度報告予定の観音山古墳群平石Ⅲ群中でも「古墳の上に築造した」やや異質な古墳や、8世紀代の築造と思われる「古墳」状の墳墓遺構を報告する予定であり、詳細はそれに譲りたい。

2. 古墳群の性格

過去の調査において本古墳群から出土した特殊な遺物と呼ぶべきものは少ない。馬具を出土する古墳もさほどなく、上位階層に属する集団ではないのであろう。豪華な副葬品がないだけ、性格を押し量る材料は乏しい。そうした中で、中原Ⅲ群の3基の古墳から鉄滓が出土したことは注目すべきかも知れない。古墳群全体の位置づけについても、次年度報告で総括することとする。

図 版

1.平石Ⅳ-1号墳現況
(南から)



2.同 (東から)



3.同墓道南端発掘状況
(南から)





1.平石Ⅳ-1号墳調査後
(上空から)



2.同 (南上空から)



1.平石Ⅳ-1号東トレンチ土層
(南東から)



2.北トレンチ土層 (北東から)



1.平石Ⅳ-1号墳墳丘
(東から)



2.同 (南から)



3.同 (北西から)

1.平石Ⅳ-1号墳前面
崩落状況（南から）



2.同閉塞状況
（南から）



3.同（東から）





1.平石Ⅳ-1号墳
閉塞石除去後（南から）



2.同（東南から）



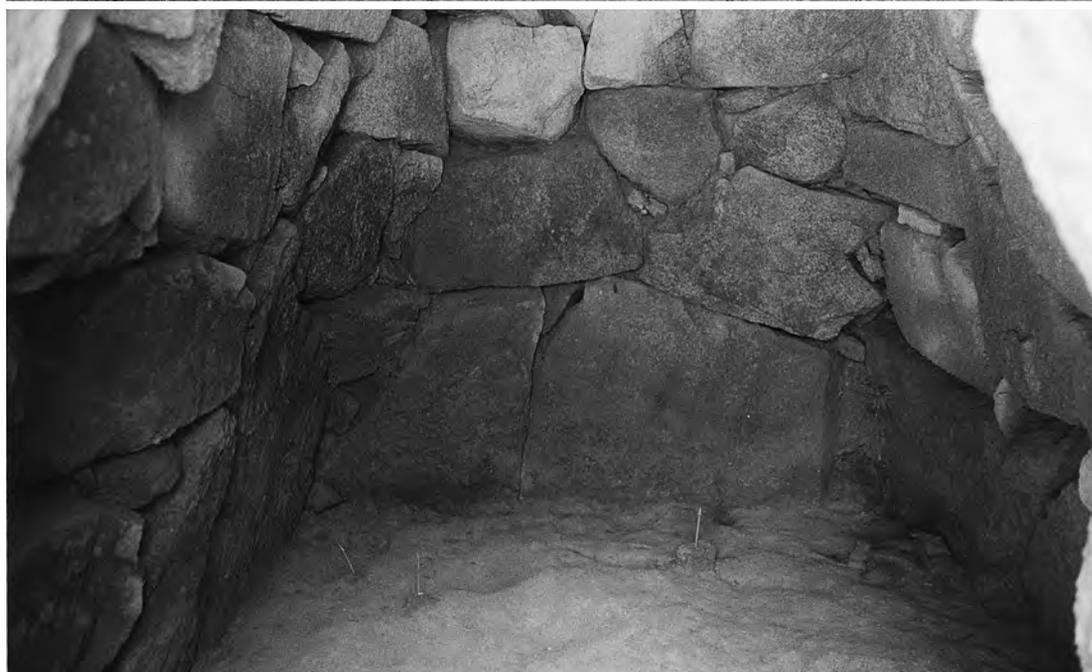
3.同（東から）



1.平石Ⅳ-1号墳
完掘後全景（南から）



2.同（南から）



3.同主体部内
（串は耳環、南から）



1.平石Ⅳ-1号墳玄室
左側壁（南から）
2.同奥壁（東から）



3.同奥壁上半（南から）



4.同石材間の粘土充填
状況（南から）



1.平石Ⅳ群丘陵頂部現況
(南東から)



2.同調査後 (北西から)



3.同 (南東から)



1.平石V群現況
(南から)



2.同調査後 (上空から)



1.平石V群完掘後
(南から)



2.同V-1号墳主体部
(北から)



3.同V-1号墳
玄室北半(南から)



1.平石V-1号墳主体部
全景（南から）



2.同閉塞状況（南から）



3.同周溝東辺の礫群
（東から）

1.平石V-1号墳
NW区周溝
(南東から)



2.同墓道西肩土器
出土状況 (南西から)



3.同V-2号墳主体部
(北から)





1.平石V-2号墳
東トレンチ土層
(北西から)



2.同NE区墳丘
(南東から)



3.同V-2号墳主体部
完掘後(北から)



1.平石V-2号墳墓道
東側壁（南西から）



2.同閉塞状況（北から）



3.同（南西から）



1.平石V-2号墳SE区
土器出土状況
(南東から)



2.同墓道周辺
土器出土状況
(南東から)



3.同V-2号墳前面土器出土状況
(手前の土器は1号墳墳裾として取り上げ、南から)

1.平石V-3号墳
東トレンチ土層
(南東から)



2.同NE区墳丘
(北西から)



3.同墓道堆積状況
(西から)





1.平石V-3号墳
主体部完掘後
(南から)



2.同(北から)



3.同(西から)



1.平石V-3号墳
閉塞状況(北から)



2.同(南から)



3.同土器出土状況
(西から)



1.平石V-3号墳墓道
土器出土状況
(北東から)



2.同 (南東から)



3.同 (南から)



1.平石V-3号墳墓道
土器出土状況
(東から)



2.同 (南から)



3.同 (南から)



1.平石V-3号墳東辺周溝土器出土状況
(南から)



2.同(東から)



3.同(東から)



1.平石V-3号墳東辺
周溝土器出土状況
(西から)



2.同墓道東肩土器
出土状況 (南東から)



3.同墳丘SW区土器
出土状況 (北西から)



1.平石V-3号墳墳丘SW区土器出土状況
(西から)



2.同(南西から)



3.同(北から)



1.平石V群Aトレンチ
(西から)



2.B1トレンチ
(南西から)



3.平石V群B2トレンチ
(西から)



1.平石V群Cトレンチ
(南西から)



2.同Dトレンチ現況
(西から)



3.平石V群Dトレンチ
(北西から)

1.瀬戸Ⅱ群遠景
(南から)



2.同調査区全景
(南から)





1.瀬戸Ⅱ-1号墳全景
(上空から)



2.同石室 (南から)



3.同石室床面 (南から)



1.瀬戸Ⅱ-1号墳西周溝
土層断面（南から）



2.同北周溝土層断面
（東から）



3.同東周溝土層断面
（南から）



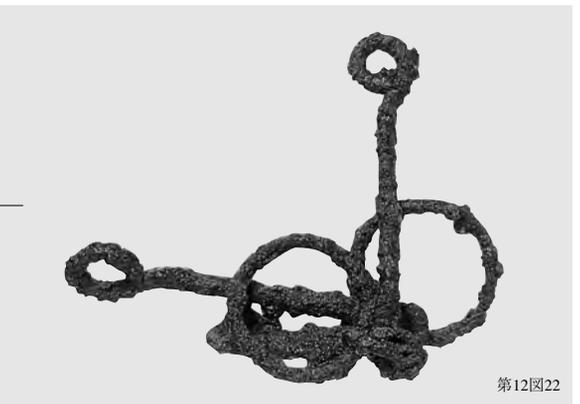
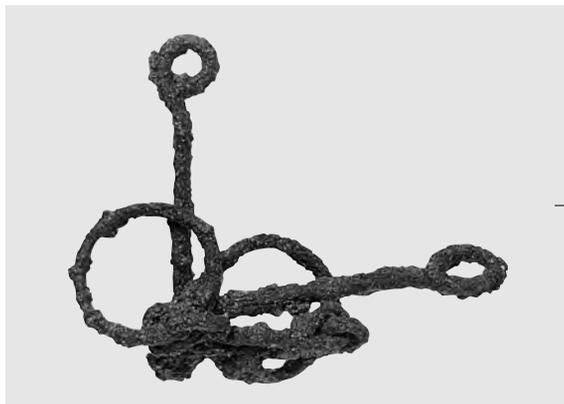
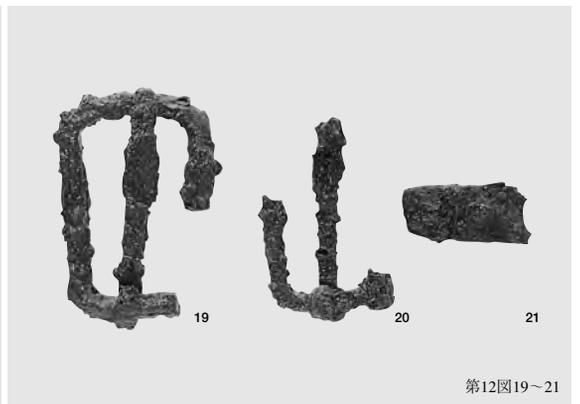
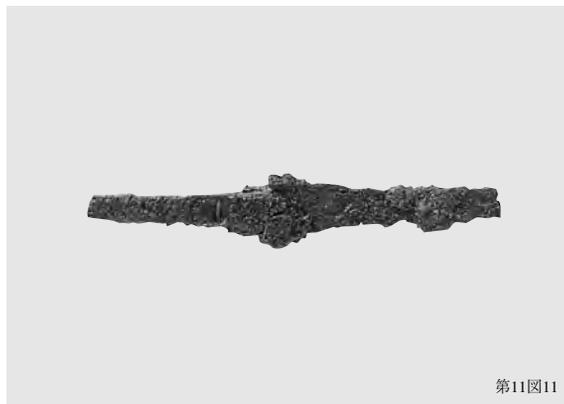
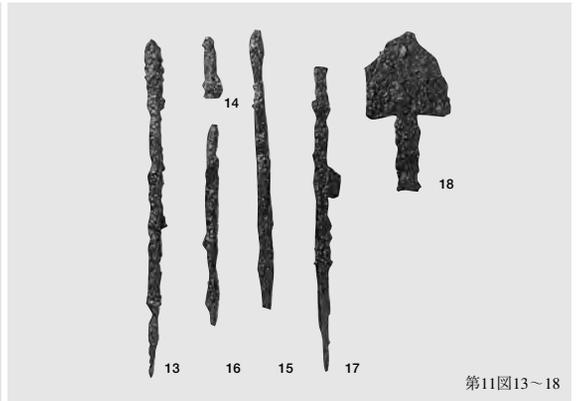
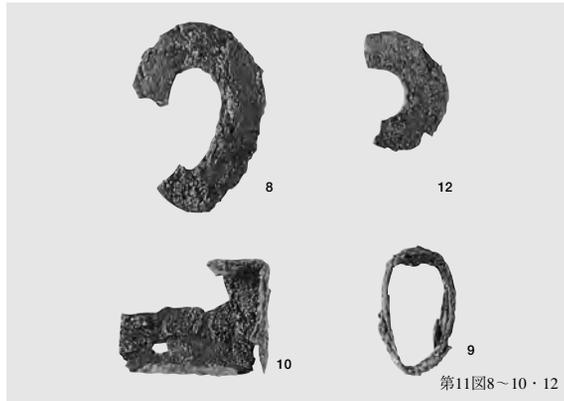
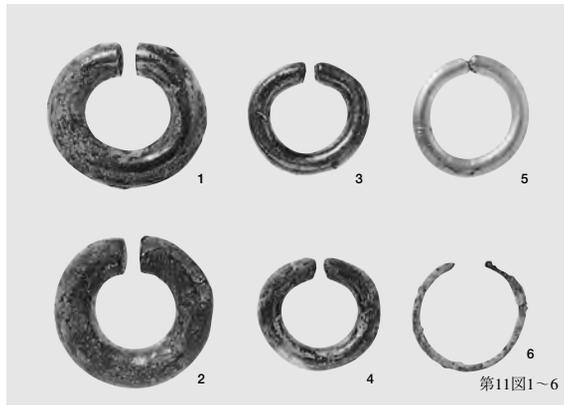
1. 瀬戸Ⅱ-2号墳全景
(上空から)



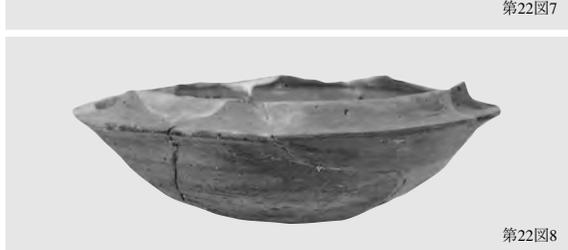
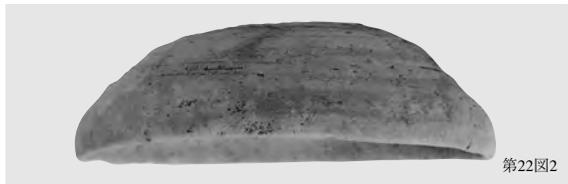
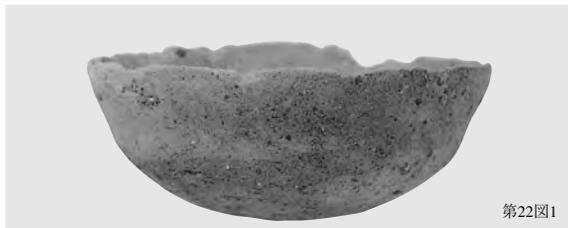
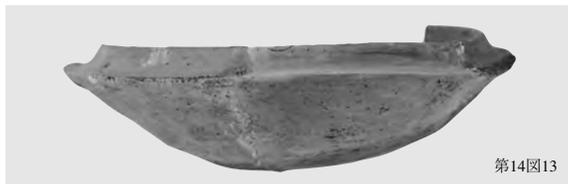
2. 同石室 (南西から)



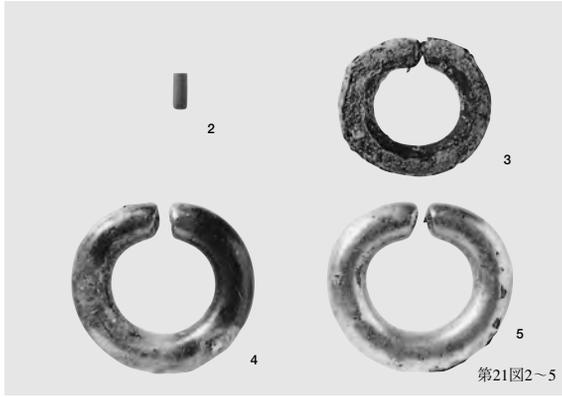
3. 同北東周溝土層断面
(南東から)



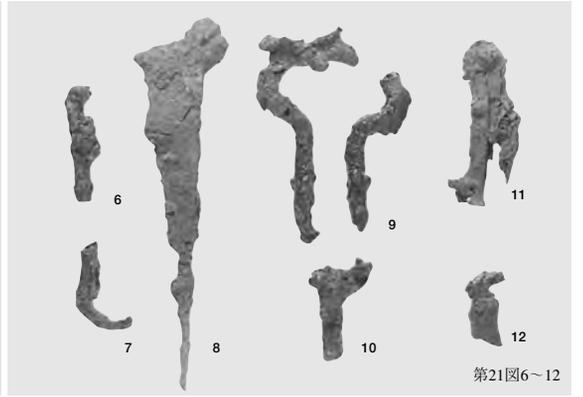
出土遺物1 (平石IV-1号墳出土遺物1)



出土遺物2 (平石IV-1号墳出土遺物2、平石V-1号墳出土遺物1)



第21图2~5



第21图6~12



第27图1



第27图6



第27图8



第27图3



第27图10



第27图12



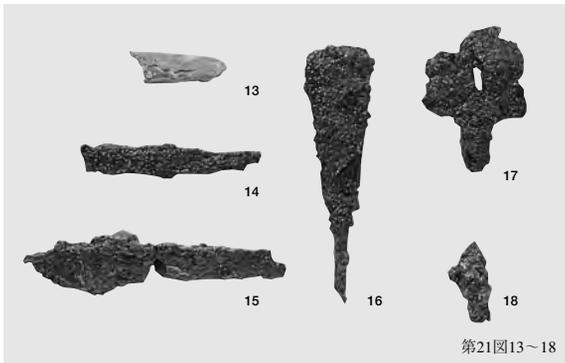
第27图5



第29图17



第28图13

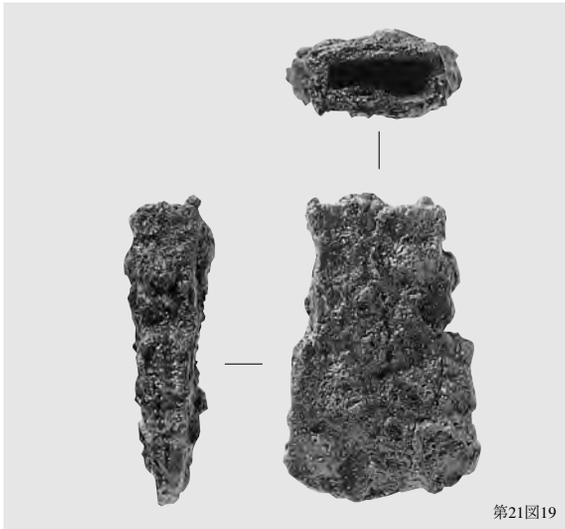


第21图13~18

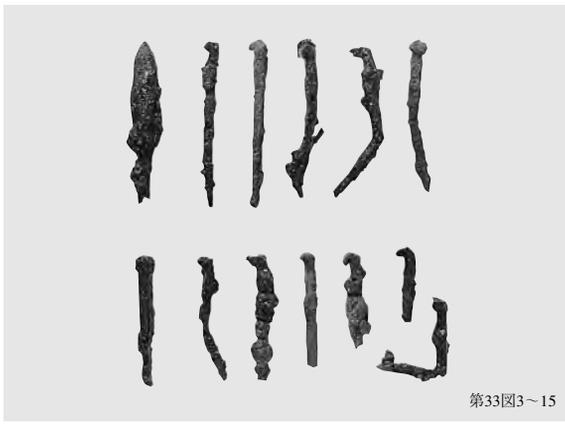


第29图18

第29图19



第21图19



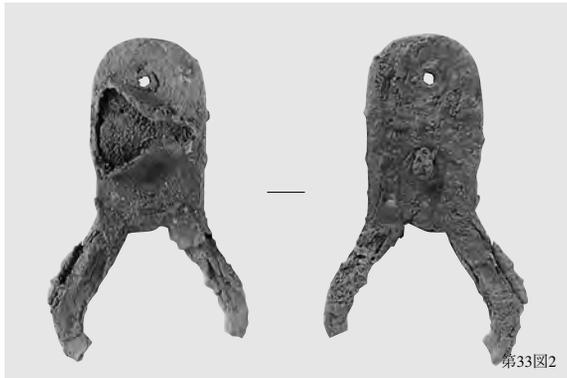
第33图3~15



第33图1



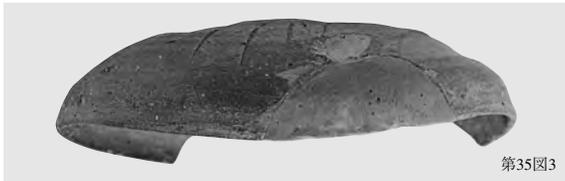
第35图1



第33图2



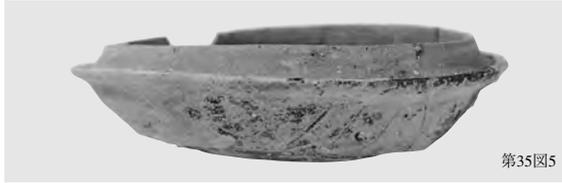
第35图2



第35图3



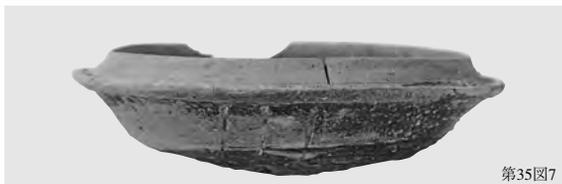
第35图4



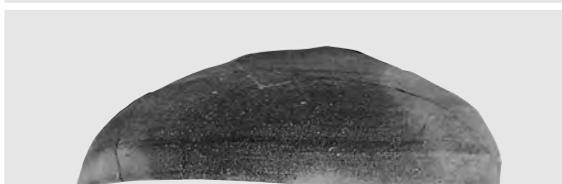
第35图5



第35图6



第35图7



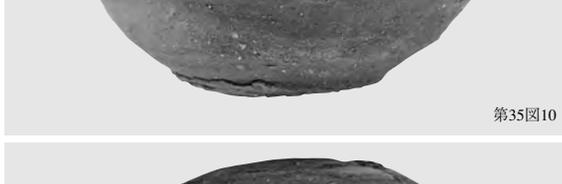
第35图8



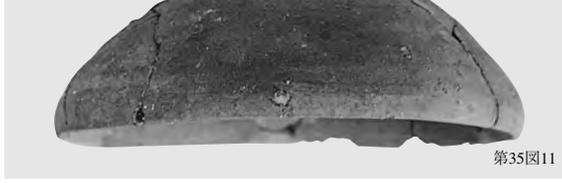
第35图9



第35图10



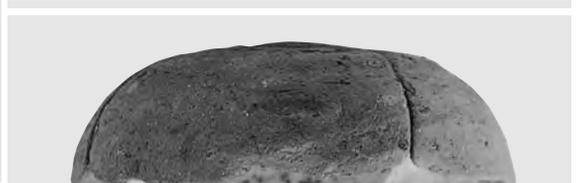
第35图11



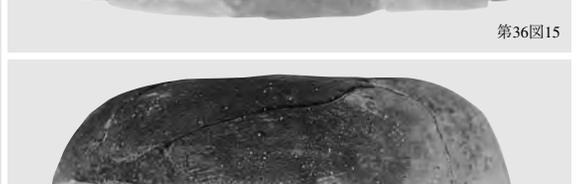
第35图12



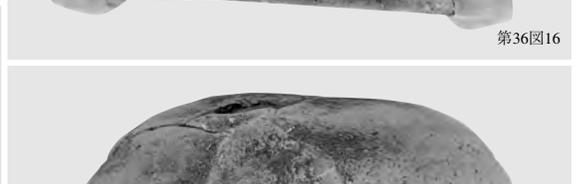
第36图13



第36图15



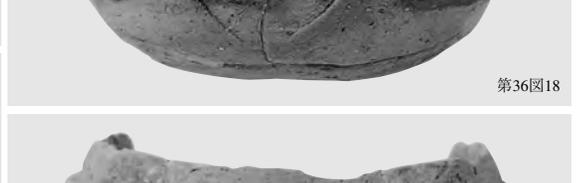
第36图16



第36图17



第36图18



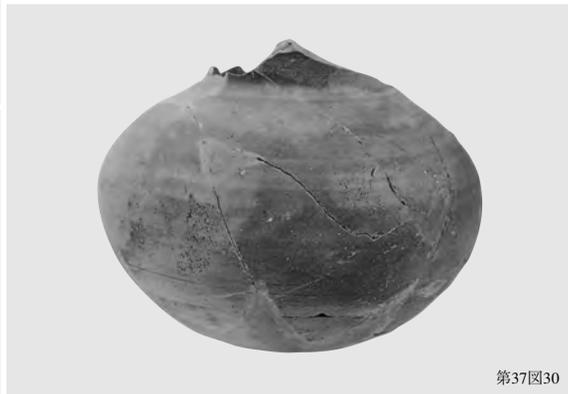
第36图19

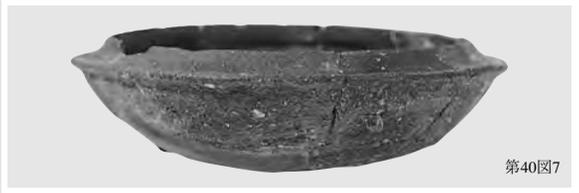
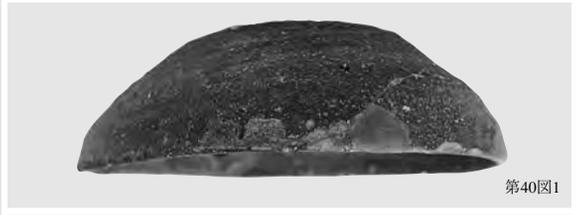
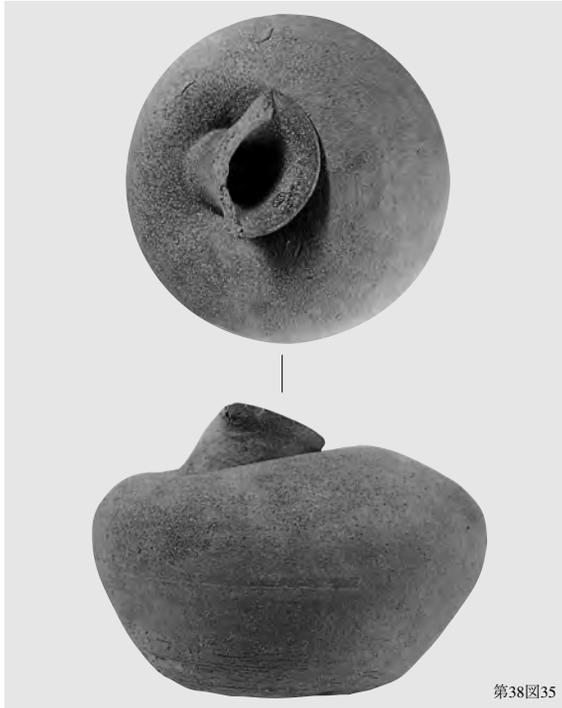


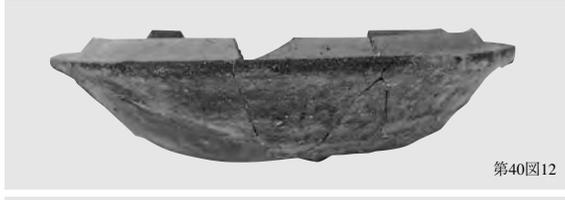
第36图21

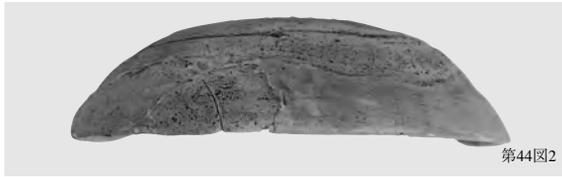


第36图22









第44图2



第44图11



第44图6



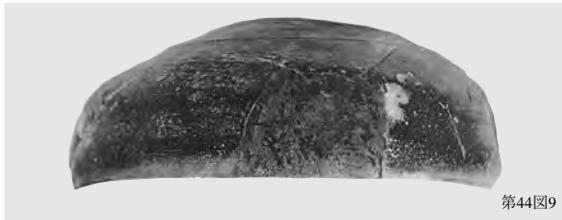
第44图12



第44图7



第45图13



第44图9



第45图14



第44图10



第45图15



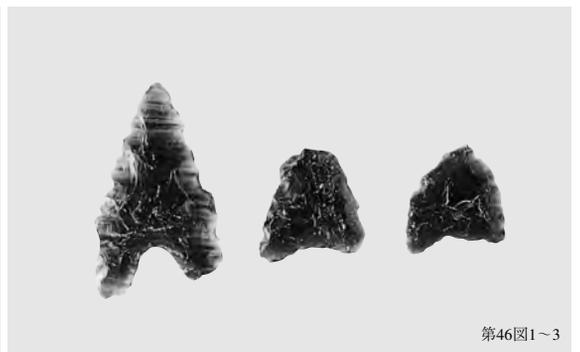
第15图1~8



第15图9

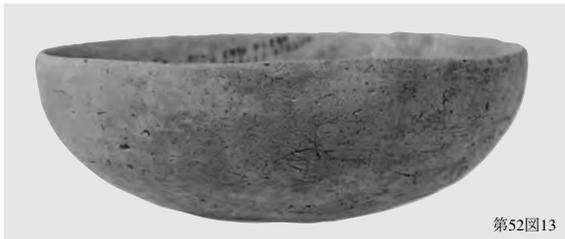


第15图10



第46图1~3

出土遺物9 (平石V-3号墳出土遺物6、平石IV·V群出土石製品)



出土遺物10 (瀬戸Ⅱ-1・2号墳出土遺物)

報告書抄録

ふりがな	かんのんやまこふんぐんひらいしよん・ごぐん かんのんやまこふんぐんせとにぐん							
書名	観音山古墳群平石Ⅳ・Ⅴ群 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	飛野博文 小川泰樹 海出淳平							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL:092-651-1111							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんのんやまこふんぐん 観音山古墳群	ふくおかけんちくしぐんなかがわまち 福岡県筑紫郡那珂川町	305	193	33° 30′ 07″	130° 26′ 27″	20070205 ~20070221 20070417 ~20070625	300m ²	九州新幹線建設
ひらいしよんぐん 平石Ⅳ群	おおあざまつのき 大字松木705-5ほか		194	33° 30′ 05″	130° 26′ 26″	20060925 ~20070203	600m ²	
かんのんやまこふんぐん 観音山古墳群	ふくおかけんちくしぐんなかがわまち 福岡県筑紫郡那珂川町		199	33° 29′ 58″	130° 26′ 25″	20061222 ~20070330	300m ²	
せとにぐん 瀬戸Ⅱ群	おおあざしもかじわら 大字下梶原437-1ほか							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
観音山古墳群 平石Ⅳ群	古墳	古墳	小型円墳1基		金銅製耳環、鉄製馬具、土師器・須恵器		古墳が切り合う	
観音山古墳群 平石Ⅴ群	古墳	古墳	小型円墳3基		金銅製耳環、鉄製品、土師器・須恵器			
観音山古墳群 瀬戸Ⅱ群	古墳	古墳	小型方墳1、小型円墳2		須恵器			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 20	登録番号 1

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集

観音山古墳群平石Ⅳ・Ⅴ群
観音山古墳群瀬戸Ⅱ群

平成21年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 久野印刷株式会社
〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町3番1号
TEL 092-262-5726 FAX 092-262-5720